安と、孰れか遠き」といへる問に對して、「日は近し、目を擧ぐれば則ち、日を見れども長安を見ず」と對へた類想と思はれ、又下句は、かの「肝膽も胡越」といつた趣にも似てるる。枕草子に「近くて遠きもの、思はぬはらから親族の中」とあるは、或はこの歌などから思ひ寄つたかも知れない。開口一番、唐を近しと喝破した落想の奇矯なのには驚かされる。これは例の詩家の常手段である。遠近の對比が親密に過ぎたのは、聊かくちをしい。今すこし蘊含の味ひをもたせたいとも思つたが、この歌の特色は却つてこの餘裕のない仕立にある。

獨のみながめふる屋のつまなれば人をしのぶの草ぞおひける　さだのぶ

釋 ○ながめふる屋のつま　詠め經るに、長雨降るをかけ、その降るに又古屋をかけた。「つま」は軒の端である。○人をしのぶの草　人を偲ぶに、忍草をかけた。忍草のことは、上に既出。

大意 人のつれなさに、只一人ばかり物思をして、毎日〳〵日を經る、この古屋の軒の端であるから、雨に朽ちて、自分が人を偲ぶとおなじ名の、忍草が生ひ茂つたわい。

評 霖雨に朽ちた軒端の忍草につけて、その懷抱を敍べた。初二句は、春下「わが身世にふるながめせしまに」といふ小町の詠と同工で、更に「つま」とまでかけてきたので、煩瑣にたへられない。

わが宿は道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに　僧正遍昭

大意 自分の庭は草が茂り合つて、通ひ路もない程にまで、ひどく荒れてしまつたわい、心強くて來もせぬ人を今日は明日はと待ち〳〵して居る間に、つい月日が經つてサ。

評 「待つとせしまに」の一語、悲涼凄酸の感をそゝること太だしい。蓋しその途絶えは暫時の事と豫期した口調だからである。今日は明日はとはかない空頼めに、月日は梭の如くに經つて、看る〳〵苔蘚古邃を封じてしまつた。その心長さの程が思はれるではないか。いかにせむ飛花の如き輕薄の子は、他の春風に狂し去つて、遂に再び楣に返つて來ない。こゝに至つて悔恨の情、絶望の聲は乃ちこの三十一字を呻吟し來つた。風韻また縹渺として絃外の餘音がある。宗貞の昔ならば知らぬこと、遍昭としての戀歌は異數である。今姑くその人格を尊重して、これを題詠の作として疑ひを存しておく。結句、六帖にこふとせしまに、二句、貫之集に道見えぬまでとある。すべて意調ともに本文の方が勝つてるる。且貫之集に入つたのは勿論誤である。

○

今こむといひて別れしあしたより思ひくらしのねをのみぞなく

釋 ○今こむ　「今」は離別「立別れいなばの山の」の條に既出。○思ひくらし　思ひ暮らしに、蜩をかけた。

大意 あの人が近いうちに又來うといつて、別れて去なれた朝からこの方、一向音づれが無い故、毎日、あの人を戀しく思ひ暮らしに暮らして、あの蜩の鳴くやうに、音を擧げて泣いてばかりサ居るわ。

評 素性が「今來むといひしばかりに」の作は、乃父のこの作に胚胎したのかも知れない。但彼れは只その一夜を待ち明かしたので、これは日をわたつて待ち暮らしたのである。感哀の深かるべきは、理に於いてはこの歌であるが、情韻兩つながら、却つてあの歌の方が優つてゐる。よく構想敍法の相違を對比して、その妙諦を味はれたい。「思ひくらし」の小細工、甚だ厭味である。

拾遺集の物名に、忠岑の歌としてこれが再選されてある。すべて再選の歌は後出の方がたしかであるから、拾遺に從ふがよい。多分最初の傳本の誤であらう。

こめやとは思ふものからひぐらしの鳴く夕暮は立ち待たれつゝ　　よみ人しらず

釋 ○こめや　來むやはの意。

大意 今は如何ほど待つても、來ようかいや來はすまいとは思ふものながらも、蜩の鳴く夕暮時分になるといふと、門口へ出て、ひたすら立つて居ては、待たれ〳〵して、どうも思ひ切つては居られぬわ。

評 例のよもやに惹かされるのである。人情の弱さがむき出しにされてゐる。それが何となく悲しい響を吹奏する蜩の鳴く夕暮、その夕暮は思ふ男の通つて來た時刻だから、慣習のまゝに又も立ち待たれるのである。

○

今しはとわびにしものをさゝがにの衣にかゝり我れをたのむる

釋 ○今しはと　今はとの意。「し」は強辭。○さゝがに　もと蜘の枕詞。日本紀私記に「佐瑳餓泥、蜘蛛之別名也、言其體加レ蟹、住二左々原一故云」とある。雅澄は「笹が根の轉れるにて、小竹の根は入り組みたる物なれば、組むに蜘をいひかけたるなり」といひ、又、小蟹の意でその形から譬へて、蜘に續けたともいふ。こゝでは、「さゝがに」を直に蜘のことに用ひた。○たのむる　賴ましめるの意。

大意 かう久しう來ぬからは、今はサもう來ることではあるまいと、くよ〳〵物案じをして居たものを、その人の來るといふ知らせのやうに、蜘が着物に這ひかゝつて、まだ何か賴み處のあるやうに思はせることよ。

評 さてはあの人の心はまだ絶え切つたのではないのかの餘意がある。允恭記に、衣通姫が天皇に獻つた歌に、

わが夫子がくべき宵なりさゝかねの蜘のおこなひこよひしるしも

と見えて、「蜘の出れば待ち人來る」といふ諺が古くからあつたと見える。尤もこれは支那から輸入の迷信である。爾雅の疏に「一名長蹄、荆州河内人、謂二之喜母一、此蟲來著二人衣一、當下有二親客至一有上喜也」とあり、又、西京雜記に「蜘蛛集而百事喜云々」とあり、皆慶兆としてゐる。君を待ち戀ひ、橋占、辻占、石占、疊算、松葉算もしつくして、今や絶望の淵に沈まうとする刹那、この蟲の出現に萬緒の哀怨は一旦に忘却されて、はかない新光明に隨喜する。ほんに他愛ないのは戀の道である。結句の終りにことかなといふ歎辭が含まつてゐる。歌は今一層の狂熱がほしい。

○

今はこじと思ふ物から忘れつゝまたるゝ事のまだもやまぬか

釋 ○まだも　「まだ」は未だの上畧。○やまぬか　「か」は歎辭。

大意 今はもう來まいと思ふものながら、ついそれを忘れ〳〵しては、あの人を待たれる事が、未だにまあ已まぬことかな。

評 ほんに困つてしまふの餘意がある。ともすれば打ち忘れて待たれるのは、日頃の心慣ひからであらう。土佐日記に、

あるものと忘れつゝなほなき人をいづらと問ふぞ悲しかりける

頗る人情の機微に觸れてゐる。結句、疎宕奇氣ありで、自分ながら未練らしい自分の心を呆れて歎かずには居られない趣である。

○

月夜にはこぬ人またるかき曇り雨もふらなむわびつゝも寢む

大意 かうさやかな月夜には、常は來ぬあのつらい人も、月の面白さに浮かれ出して、もしも來はせぬかと待たれて、氣が揉めてならぬ、しかしどうで來ぬことなら、いつそ空が眞黑に曇つて、雨が降つてもらひたい、すれば、情なくつらい事とは思ひ〳〵してもまあ、あきらめて寢ようと思ふわ。

評 益なき心盡しの、なまなかなることを歎いた。月夜を喜び雨を嫌ふのは、一般の人情である。それをわびしく思ひながらも諦めて寢ようといふ。月ゆゑ人待つ心の焦燥が、あからさまに表現されてゐる。景樹いはく、

眞實雨を願ふにあらず。月夜にはふと來まじきにあらねば、なほ月夜をぞ賴むべきはいふに及ばぬを、かき曇り雨も降らなむなどいへるは、せめてもの情の心やりにて、實を推しきる時は、必ずしも然らざるなり。云々。

背縣に中つた適評であらう。結句、素朴な表現で、泣寢入に寢入らうとする痴呆の態が、遺憾なく描き出されて面白い。下句、二段に切りとゝのへて、四五の句の終りに、未來の辭の「む」を据ゑたのも、聲響がなだらかである。要するに眞觀前後の風調かと思はれる。

雨ふらむ夜ぞおもほゆるぬば玉の月にだにこぬ人のこゝろは　（貫之集）

月夜にはこぬだにもこそまつと聞け曇るをかへす物にぞありける　（六帖）

月夜にはこぬ人まつといとへどもふる夜しもこそ寢られざりけれ　（同）

の類は、この歌によつて構想したもので、遙かに感哀が劣つてゐる。

○

うゑていにし秋田刈るまで見えこねばけさ初雁の音にぞなきぬる

大意 五月の頃、この田を植ゑておいて去なれてしまつた人が、その田を刈る秋のこの時節になるまで、待てどもく來ねば、今朝初めて鳴き渡る、あの雁のやうにサ、聲に立てゝ泣いたわ。

評 あはれ「一日見ざれば三秋の如し」といふを、早苗を採つてから來ぬこと殆ど半歲强。これまでは人目をかねて辛棒に辛棒をしぬいたのが、今や早稻田かり金にあはれを催されて、端なく音に立てゝ泣かれてしまつた。

住の江の岸を田にはり蒔きし稻ひいで刈るまで逢はぬ君かも

春がすみたなびく田居に庵して秋田刈るまで思はしむらく

と同想同型で、月日の程經たのを、具體的に景物を以て表現した。「見えこねば」の敍述がすこしいひ過しかとも思ふが、外にいひやうもない。「初雁のねになく」の巧を加へたのは、平安朝の手のある歌風である。

○

來ぬ人をまつ夕暮のあき風はいかに吹けばかわびしかるらむ

大意　來もせぬ人を待ち居る夕方の秋の風は、どのやうに吹くので、かうも悲しくつらく思はれるのであらうか。

評　風もとより心なし、悲しいのは只聞く人の心的作用によることなのを、「いかに吹けばか」と、風の所爲であるかのやうに、幼く疑つてゐるのが面白い。蓋し夕暮は男の女の許を訪づれる時刻であり、待つ男は久しく來ぬ男であり、風は物悲しさを齎す秋風であり、かう三拍子揃つては、鐵で作つた人間でも泣かれる。語調また、暢やかで和らかい。作者は婦人に違ひない。

○

久しくもなりにけるかな住の江のまつは苦しきものにぞありける

釋　○住の江　住吉と同じい。賀部「住の江の松を秋風」の條に既出。○まつは　松に待つをかけた。

大意　思ふ人が來ずなつてから、存外に久しくまあなつたことよ、その久しいといふ事を以て評判の、住吉の松といふやうに、來もせぬ人を待つは、さて〳〵苦しいものであつたわい。

評　「住吉の松は久しい物」といひ囃された、世の諺を踐んでの作である。雜下に「われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松云々」と詠んだのも、亦さうである。或は別にさうした意味の古歌などがあつたのかも知れない。

住の江のまつほど久（ヒサ）になりぬれば蘆たづの音（ネ）になかぬ日はなし　かねみのおほきみ

釋　○住の江のまつほど　松に、待つ程とかけた。○久　久しの名詞格。○蘆たづの　「音になく」にいひかけた序。「蘆たづ」は戀一「忘らるゝ時しなければ蘆たづの」の條に既出。

大意　來ぬ人を來るか〳〵と、住の江に久しい名の高いその松といふやうに、待ち居る間が久しくなつたから、その松に住む蘆鶴の音をたてゝ鳴くやうに、自分は聲を出して泣かぬ日とては、一日も無いわ。

評　「待つ」といひ、「久」といひたい爲に、住の江の松をひき出した。蘆たづは松に對へて、齡久しい物の取り合はせに置いたのみではない。實に、松に多く來馴れて、當時の住吉の濱あたりには、盛んに巢食つて鳴いてゐたので使つた。これを「音になく」の序としたのは、既に萬葉に「あしたづのねのみしなかゆ」など例の多いことである。序詞の疊用、例の煩はしい。

なほ考へると、「まつほど」は伏苓（マツホド）か。伏苓は和名鈔に「玄中記に松脂淪入レ地（テル）千歲（ニ）則爲（チル）二伏苓（ト）一、伏苓末都保度（ハマツホド）」と見えて、松脂が千年も經なければ伏苓にならないのだから、伏苓は久（ヒサ）にかけた序ではあるまいか。

なかひらの朝臣あひ知りて侍りけるを、かれ方になりにければ、父が大和の守に侍りける許へまかるとて、よみて

伊勢

三輪の山いかに待ちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば

つかはしける

釋 ○なかひらの朝臣云々　なかひらは藤原仲平である。關白基經の子で、時平の弟。天慶八年七十一にして薨じた。官左大臣に至り、世に枇杷殿と稱した。「父が」は作者の父藤原繁蔭をいふ。○三輪の山　大和國式上郡にある名山、大物主神を祀る。

大意　私は貴方に見捨てられて、京住居も面白くないから、古歌に「戀しくば尋ねてお出なされ」と詠んである三輪の山の方へ此度下りまするが、さて古歌の三輪山とは違つて、この三輪山は何年たつとも、思ひ出して尋ねて來てくれる人もありはすまいと存じますれば、どんなに人を待ち暮らすことでございませう。

評　大和の國府は奈良であるから。作者が父の大和守の許に行つたのも、奈良であつたらう。すると三輪とは隔つてゐるが、同じ國内の名所なので用ひたのである。雜下、

わが庵は三輪のやま本こひしくばとぶらひきませ杉立てる門

を本歌に取つて、三輪山を擬人して、自分の身によそへて詠んだ。本歌には、とぶらひ來ます人あるに對して、これは「尋ぬる人もあらじ」と打ち歎いた。かう「尋ぬる人も」と廣くはいつてゐるが、その實はこの歌をさし當てゝ贈つた人一人卽ち仲平をさしてゐる。面白い器用なよみ方で、この作者のとしては優れた方である。女が男に棄てられて田舍落をする位、あはれな氣の毒なことはない。當時仲平は年廿ばかりの若殿上人だから、移ろふ方々が多かつた事は思ひやられる。作者はかうして一旦大和に下り、間もなく又上京したこと、見えて、寬平の末年には七條后の宮人として、宇多帝の寵を受けて、行明親王を生み奉つた。男も女も若いうちは根を絕えた波の浮草で、つひの寄る瀨は妙なものではないか。この歌、公任の金玉集に入撰してゐる。

雲林院のみこ

だいしらず

ふきまよふ野風を寒みあき萩のうつりも行くか人のこゝろの

釋 ○行くか　「か」は歎辭。

大意　あちこち吹き迷はす野の風が寒いので、秋萩の花の移ろつて行くやうに、思ふ人の心が、餘所へ移つてまあ行くことよ。

評　暮秋の蕭條たる景氣に誘はれて、いよ〳〵人に捨てられた頼りない寂しみを感ずる。上句は序である。四五句の倒裝、促迫した意趣に相協つて、調が諧ふ。「か」の辭、「の」の辭呼應して、鏘然たる響がある。

小野小町

今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり

釋 ○時雨に　時雨の如くにの意。萬葉集卷十「秋津羽に匂へる衣」などのにである。○ふりぬれば　降りに、舊りをかけた。

大意　この節の時雨の降るといふやうに、私の身が舊くなつたによつて、その時雨に木の葉の色の變るやうに、心ばかりか以前仰しやつたお約束の言の葉までが、存外に變つて來ましたわい。

評　時節柄の時雨に移ろふ木葉に擬へて、かの比翼連理の兼言を拈出し來つて、輕薄の兒を愧死せしめようとする。この場合にふさはしい手段である。比喩の重疊、緣語の修飾、この作者の家風と知られる。後撰集冬に再出して、初句あきはてゝとある。かくてはいよ〳〵纖細に流れるであらう。

782

かへし　　小野のさだき

人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまに〳〵散りも亂れめ

大意　私が貴方を思ふ心が、仰のやうに時雨に移ろふ木の葉ならばこそ、風の吹くに隨つて、餘所へ散り亂れもしませう、しかし心が木の葉といふことは無いから、決して餘所へ散り亂れて移ることではありません。

評　何事があつても、心配なさるなの餘意がある。贈歌の「言の葉さへに」とあるについて、この一場の活地を發見して、水火の言舌を弄する處、太だ狡獪である。

業平の朝臣、きの有常がむすめに住みけるを、うらむること
とありて、しばしのあひだ、晝はきて、夕さりは歸りのみし
ければよみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆるものから

釋　○業平の朝臣云々　業平が紀有常の娘の許に通つて壻になつてゐたが、面白くない事があつて、晝の間晝は來て、夕方には歸り〳〵してゐたので、有常の娘が詠んで業平に贈つた歌との意。「むすめに住む」とは娘の壻になること。伊勢物語には、

昔男、宮仕しける女の方に、御達なりける人をあひ知りて、程もなくかれにけり。同じ所なれば、女の目には見ゆるものから、男はあるものにも思ひたらねば

と詞書があつて、この歌を載せた。○あま雲の　「あま」は天の意。こゝは雨の義ではない。大空の雲は遠く隔たつた物なので、「よそ」の序に用ひることは、萬葉に例が多い。但こゝは序詞を一轉して、比喩に用ひた。○か　歎辭。

大意　天雲の遠よそにあるやうに、よそ〳〵しくまあ貴方のなつて行くことよ、それならば隱れて見えぬやうにもなる筈を、さすがに晝はお出があつて、天雲の目に見えるやうに、お目にはかゝりながらサ。

評　怨めしいお仕打よの餘意がある。夜泊つて朝歸るのが當時の慣習であるから、晝ばかり見えて、夕方歸つてしまふものは甚しい皮肉な仕打である。かうしてとゞの詰りは棄てられるのだと意識すると、默つてはゐられない。「天雲」の比喩は前代からの套語だが、これはいかにもよくあてはまつて使はれた。

かへし　　なりひらの朝臣

ゆきかへり空にのみしてふることはわがゐる山の風早みなり

釋　○ゆきかへり空にのみして　空にのみ往返してといふを前後させていつた。○ふる　經る。

大意　貴方の仰しやる天雲が、空にばかり往來をして時を經ることは、なぜかといふに、そのかゝつてゐる山の風が烈しさに、落ち付きかねるからであるわ、私もその通りで、往きつ戻りつ足をとめずに、どちら付かずに月日を經る譯は、私が妻として住んで居る貴女のお心が變り易くて、氣が早いからであるわ。

評　不足は此方からいふべき筈なのにの餘意がある。「わがゐる山の風早み」、これ詞書にある「うらむることありて」に當つてゐるので、女の密夫を引き入れたことを怨んで、夜は足をとめずに立ち歸つたのである。「わが」を、景樹が「こなたにかくるは非なり。上の天雲のさま、皆わが上なるに、更に又わがと、我が身をいふべきにあらず、このわがは、人のわがなり」と解したのは甚だむづかし過ぎる。これは、起句もわがゆきかへりといふべきを、下のに讓つて略いたのである。すべて戀歌にある天雲のうへで、首尾をあはせた。諷託寄興は巧妙ともいへないが、譏刺の意は殊に痛切である。

題しらず

唐衣なればみにこそまつはれめかけてのみやは戀ひむと思ひし　かげのりのおほ君

釋　○唐衣　離別「唐衣きつゝなれにし」の條に既出。○なれば　著馴れなばの意。○かけて　心に懸けることと、唐衣の緣語である。といふは衣は衣桁などに懸けるが常であるから。

大意　着物は著馴れると柔かになつて、身にサひつたりと著纏ふであらう、それに引き換へて、人が馴染になつてからが、このやうによそ〳〵しく、たゞ常住に心懸けてばかり居て、戀ひ焦れようとは思つたことであつたか、いや思ひも寄らなかつたことよ。

評　比興の作、しかし大した事もない。

秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心のそらになるらむ　とものり

釋　○あき風　飽きに、秋風をかけた。○身をわけて　體内を吹きとほるをいふ。野を吹き過ぎる風を野分といふの類である。○しも　「し」は强辭、「も」は歎辭。

大意　秋風は野などを分けて吹きもすれ、人の身を分けてはサ吹かぬのに、何で風に草木の葉などの、空に吹き上げられるやうに、私に飽きたあの人の心が浮かれて、よそ〳〵しくなるのであらうぞ。

評　吹く風が物を空に颺げることは、この頃の常套語で、大井川行幸の序にも、「拙き言の葉は、吹く風の空に亂れつゝ」など見えた。「心の空になる」といふより、折柄の秋の野分の風を聯想し來つて、「身を分けてしも云々」と、一不審を提出した。「身を分けて」は、後撰及び六帖に、

身を分けて霜やおくらむあだ人の言の葉さへにかれも行くかな

と同じく、區別する意ではない。契沖、眞淵、宣長などの「わが身、人の身と分けては」と解いたのは甚しい誤である。三句の下に、何故にの語を挿みて聞く格である。

三句、家集には吹かねども、結句、顯本にはちるらむ、六帖にはみゆらむとある。

つれもなくなり行く人の言の葉ぞ秋よりさきの紅葉なりける　源宗于朝臣

大意　紅葉は秋になれば色づく物であるが、次第につれなくなつて行く人の言の葉はサ、秋より先の紅葉であつて、時節の秋も來ぬうちに、皆變つてしまつたわい。

評　言の葉の變るより、木の葉の色變るを聯想して、「秋より先の紅葉」と隱喩したのを、一ふしとする。家集には、二句言の葉や、結句なるらむとある。

心地そこなへる頃、あひしりて侍りける人のとはで、心地おこたりてのち、とぶらへりければ、よみてつかはしける　兵衛

死出の山麓を見てぞ歸りにしつらき人よりまづ越えじとて

釋　○心地そこなへる頃云々　相語らうた男が、病中には見舞に來ないで、全快した時分に來たので、詠んでその男に贈つた歌との意。○死出の山　死有の相を別譯阿含經に、「死山、能壞二一切壽命一」とある。又涅槃經に「有二四大山一、從二四方一來、欲レ害二人民一、四大山卽生老病死也」と見えて、死の險難を山に譬へたまでゝある。然るに、十王經といふ僞經に「閻魔王國堺、死天山南門云々」と作つてから、實の山の如くになつた。

大意　この間は私も煩つて、既のこと、あの世の界と聞く死出の山まで行つたのに、その時見舞に來て下されぬ無情の貴方とは違つて、私はその死出の山をも、假令つれない貴方とはいへ、かねて一所に越える筈の約束だから、貴方より先には越えはすまいと存じまして、その山の麓を見てサ、一まづ立ち戻つて參りましたわい。

評　諷詠骨に徹するものである。こんな皮肉は却つて婦人でなくてはいひ得まい。對手の男は、必ず天地にほこ

ろび目の無いことを喞つたことであつたらう。

顯本に、二三の句麓よりのみ歸りきぬとあるはわるい。

あひしれりける人の、やうやくかれ方になりけるあひだに、燒けたる茅の葉に、ふみをさしてつかはせりける　小町があね

時過ぎてかれ行く小野の淺茅には今はおもひぞ絕えずもえける

釋　○かれ行く　離れ行くに、枯れ行くをかけた。○小野の淺茅　戀二「淺ぢふの小野の篠原しのぶとも」の條に既出。○おもひ　思ひに、火をかけた。

大意　秋の頃が過ぎて、冬枯になつて行く野は、火をつけて燒くものであるが、身の盛りが過ぎて、貴方が段々遠ざかつてしまひなされた、枯野の淺茅のやうな私は、今は思ひの火が絕えず燃えてまあ居りますわい。

評　その證據には、この焦けた茅の葉を御覽下されたいと、その書簡をつけて贈つたのである。こんな氣の利いた思ひつき、小野にわが氏の小野を寄せたはたらき、すべて作者の小慧を見るに足りる。「波のうねくゝ」と詠んだ妹に愧ぢない。

物思ひける頃、物へまかりける道に、野火のもえけるを見てよめる　伊勢

冬枯の野べとわが身を思ひせばもえても春を待たましものを

釋 ○野火　枯草などを燒き拂ふ爲に、野に著けた火の稱。○もえても　燃えての意。「も」は歎辭である。燃ゆともの意に解してはならぬ。

大意 時過ぎた冬枯の野が、あのやうに燃えてまあ再び芽の出る春を待つことであるが、人に見棄てられた自分の身を、その冬枯の野であると思ひもするならば、この胸の中に、思の火の燃えたまゝにまあ辛棒して、復もとにかへる時節の來るのを待たうものをサ、何といつても、自分は冬枯の野とはちがつて生身（カヤ）であるから、思の火に焦れ死をして、その時節を待ち得られぬわい。

評 何としたいたづら者か、この可憐の佳人をして、こんな苦勞をさせる。冬枯の野でも、なほ萌えて春待つ光明が未來にある、然るに自分の未來は絶望である、冬枯の野にも及ばないと、思ひ入つた感傷的情致は、全く同情に堪へない。

六帖に、初句霜枯のとある。結句、六帖の一本に待つべきものを、今一本には春にあはましものをとある。貫之集にあるのは、本行のと同じい。但貫之の歌ではあるまい。六帖には、作者を小町があねとしてある。これはこの集の排列を見誤つて、上の歌の作者を、これにまでかけて見たのであるらしい。

水の沫のきえでうき身といひながらながれてなほも頼まるゝかな　とものり

釋 ○きえでうき身　消えずして浮くに、憂き身をかけた。○ながれて　長らへての意。流れてをよせた。

大意 思ふ人に見捨てられて、水の沫の消えないで浮くといふやうに、消えもえせず卽ち死にも得せぬ憂い身とはいふものゝ、何時もかうばかりでもあるまい、又逢はれることもあらうかと生き長らへて、やはりまあ末を頼みにされることよ。

評 例の緣語のくさり續けで甚だうるさい。「ながれて」も水の緣である。「いひながらながれて」とある同音の反復、辭調はなだらかに聞える。諸註、二句の「て」の辭を淸んで、眞淵は、「消えて浮くといひかけて」といひ、景樹は、「消えては浮くの意」といひ、宣長は、「初句はきえてにのみ係る序にて、うきへまではかゝらず」といつた。いづれも義理が十分にすまない。今は廣蔭の說に從つて、「て」を濁つて、否定の辭として解いた。

六帖及び、友則集に、二句うき世と、三句知りながら、四句ながれても猶とある。又六帖の再出のには、三句思へどもとある。また六帖には、作者は伊勢となつてゐる。景樹は「歌のさまより推して、伊勢のならむ」といつたが、一往尤もとも思はれるが、なほよく考へると、六帖のは上から次を逐つて、本集の作者を見誤つたに相違ない。

みなせ川ありて行く水なくばこそ遂（ツヒ）にわがみを絶えぬと思はめ　よみ人しらず

釋 ○みなせ川　戀二「言にいでていはぬばかりぞ」の條に既出。○ありて　川の在りてに、我が身の存在しての意をかけた。○わがみを　身をに、水脈（ミヲ）をよせた。

大意 平日は水が無いといはれる水無瀨川に、いつまでも絶對に流れ行く水が無いならばこそ、とうゝこの川

は水脈が絶えたと思はう、その如く今は棄てられたとしても、長らへてみて、いよ〳〵何等の便りもないなら、その時こそとう〳〵貴方が私の身を見限つたと思はうわ。

評 しかしその水無瀬川でさへ、折には水が流れて水脈を作すから、わが中も亦もとに反る緣が無いことでもあるまいの餘意がある。この貞淑な心長さには、どんな者でも反省を促される。この種の比興は正敍を避けて逆寫した描法だから、曲折がその間に生じて、體裁のおのづから巧緻となるのは據ないが、水無瀬川の緣語が、あまりに細かに貼き過ぎてゐる。

吉野川よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れじ　　みつね

釋 ○はやく　夙く。○ことは　言はの意。

大意 吉野川の名のやうによし〳〵、貴方こそそのやうにつらくもなさらう、しかし私は、貴方が以前お約束なされたお詞は、決して忘れは致しますまい。

評 わが飽くまで故を思ふ情を敍べたのは、卽ち反映の手段で、これ早くもその約束を反故にした人への諷刺である。この歌を贈られた女は、どんなに面目ない事だつたらう。初句は同音を疊んで、「よし」を呼び出す序としてゐる。吉野川は急流なので、「はやく」もその緣語である。

世のなかの人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞありける　　よみ人しらず

釋 ○花ぞめの　花染の如くの意。花染は、月草の花で染めたもの。月草は秋上「月草に衣はすらむ」の條に既出。宇治拾遺に「色は花を塗りたるやうに、青じろにて」とある。

大意 世の中の人の心といふものは、色に喩へれば、丁度花染のやうなもので、至極變り易い色でサあつたわい。

評 眞淵が「世の中と廣くいひて、心は一人をさせるなり」といつたのは適解である。色の移ろひ易いことから聯想して、人の心を花染に喩へた。元來花染は最も原始的の染料であるが、奈良平安時代を通じて盛んに用ひた。染花（ウツシバナ）といつて、その花汁を紙に移しておいて年中の所用とした。故にこの移ろひ易い色であることは恐らく知らぬ者はなかつたと思はれる。隨つてその時代としては新味は乏しい譯になる。況や花染卽ち月草染を、移ろひ易い例に引くことは、既に萬葉に數多見えてゐる。初句、六帖には月草のとある。

○

心こそうたてにくけれ染めざらば移ろふことも惜からましや

釋 ○うたて　春上「散ると見てあるべきものを」の條に既出。○ましや　「や」は反動辭。

大意 うたてや自分の心がサ憎いわ、なぜといふに、染めぬ色の變ることの無いと同じく、自分から思はずば、人の心の變るのも惜しからうかまあ、惜しくも無い筈だ。

評 「天をも怨みず、人をも咎めず」で、只わがこの心を責めた。一寸半悟りのやうな事をいつては見たが、さて

心は心として、思ふまゝにはならぬから、依然としてあきらめがつかない。これら愛憎の葛藤から生ずる煩悶の情的心象の變化を味ふ時は、幾多の滋味を藏してゐる事が知られよう。まづ「心こそうたて憎けれ」の矯語を下して、三句以下その理由を說明した。

色見えでうつろふものは世の中の人のこゝろの花にぞありける　こまち

釋 ○色見えで　草木の花ではその色相をいひ、心の花ではその氣色又は樣子をいふ。○移ろふ　變るをいふ。

大意 草や木の花は、色にあらはれて移ろふと見えるが、さう氣色にもたゝずして移り變るものは、たゞ一つ、世の中の人の心の花でサあつたわい。

評 上の「世の中の人の心は」と同じく、廣くいつて實は一人をさしたのである。「心の花」は心的現象を花に混喩した語で、そのあだ〳〵しい限りを敍べた。暢達流麗、おのづから感慨がある。

われのみや世をうぐひすと鳴きわびむ人の心の花とちりなば　よみ人しらず

釋 ○世をうぐひす　世を憂といふに、鶯をかけた。○うぐひすと　鶯の如くの意。○花と　花の如くの意。

大意 私一人ばかり、世が憂いといふ名の鶯の鳴くやうに、泣いて辛氣に暮らすであらうか、あの人の心が花の散るやうに、自分を離れようならばサ。

評 いよ〳〵棄てられたのではないかといふ疑ひの起つた時の作で、悲しい豫想に、その時は泣くより外はあるまいと思ふ折から、鶯の盛んに落花に紛れて啼くのを見て、湊合して詠んだ感懷である。

思ふともかれなむ人をいかゞせむあかず散りぬる花とこそ見め　そせいほうし

大意 いか程戀しく思ふとも、遠退いていかう人を何としようぞ、どうも仕方が無いわ、いつそ奇麗にあきらめて、まだ十分見足らぬうちに早く散つた、花だとサ思つて居ようわサ。

評 飛花は再び梢に還らぬ、この理は見易い。この見易い道理を捉へて、そこに姑く慰めの天地を作らうといふ。大層冷靜に構へた處は達者の言にちかい。がこれは口と腹とは大した相違なので、自分から離れて往つた人が戀しくて〳〵溜らぬあまりに、一寸かうも考へて、我れと我が心の熱を醒ましさうと試みたものである。實は悲しい歌なのである。幽怨の致、妙は說破せぬ處にある。

新撰和歌に、初二句今はとてかれなむ人もとある。

今はとて君がかれなばわが宿の花をばひとり見てやしのばむ　よみ人しらず

大意 もうこれ限りといつて、君が遠退いて、來ぬようになつてしまはうならば、仕方が無いから、このわが宿の花をば自分ひとりで見て、一緒に見た事もあつた君のことを、いろ〳〵と思ひ出さうか。

評 男が漸く冷淡に寄り付かなくなつてゆくので、行末を想像して悲觀した。花以外に思出草になる物もない趣が、「花をば」の辭で表現されてゐる。「看花滿眼淚、楚王共不言」など、樂しい追懷を催すべき花は、悲哀の情に對映して、なか〳〵に苦悶を多からしめる。「女の歌と見えて、哀れにやさしく侍るかな」と、古人の評したのは尤もである。

以上四首一類の歌で、或は花につけ、或は花に對して、懷を敍べてゐる。

忘草かれもやするとつれもなき人のこゝろに霜はおかなむ　　宗于朝臣

釋 ○忘草　上に既出。

大意 自分を忘れた人の心の忘草も、若しや枯れもして、又もとのやうに思つてくれる事もあらうかと思へば、あのつれない人の心へ、霜が置いてもらひたいわ。

評 忘草より霜を聯想して、その霜を人の心にと希つた奇巧には驚かれるが、眞實味は淺い。

寛平の御時、御屏風に歌かゝせ給ひける時、よみてかきける　　そせいほうし

わすれ草なにをか種とおもひしはつれなき人の心なりけり

釋 ○屏風に歌書かせ　屏風の色紙形などに、素性に命じて歌を書かせられた時、素性が新に詠んで書いた歌との意。

大意 これまで忘草といふ物は、何を種にして生えることかと思つて居たは、不覺の至で、その種はつい目の前の、自分につれない人の心であつたわい。

評 序文に「大和歌は人の心を種として」と書いたと同樣の巧で、これは今始めてそれを會得した趣にいひなしたのが面白い。「なりけり」に係るべきその種はといふ主語が略いてあるから、意釋の如くに解しないと、その意がたじろぐ。「は」の辭一字點睛の妙がある。調も流滑である。小町集に、

忘草わが身につむと思ひしは人のこゝろにおふるなりけり

類想の同型だが、比較すると、遙かにこの洗煉の作であることが知られよう。

詞書の趣によると、この作者はいみじき手かきであつたらしい。貫之などにさしつぎの伎倆であつたらう。賀部にも「よみて書きける」の詞書があつて、貫之と素性の名が竝んである。

三句、新撰和歌に思ひしをとある。

題しらず

秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらむ

釋 ○いね　稻に、去ねをかけた。○こともかけなくに　言も懸けぬにの意。「なく」は、ぬの延言。○かる　離る に、刈るをかけた。

大意 秋の田の稻は刈つて物に掛けて乾すが、思ふ人の來られた時、自分が嫌つて、その秋田の稻といふやう

に、去ねといふ詞をも掛けはせぬに、それにさあ何を憂いと思つてか、このやうにあの人が遠退いて離れて來ぬのであらう。

評 緣語の修飾が、うるさいいやな氣がする。

新撰和歌に、二句いねといふことも、下句をらじとなどか人のいふらむとある。

はつ雁のなきこそ渡れ世の中の人のこゝろのあきしうければ　紀貫之

釋 ○はつ雁の　初雁の如くの意。○あきし　飽きに、秋をかけた。「し」は強辭。

大意 自分は空を渡る初雁のやうに泣いてサ、月日を經るわ、その譯は、世の中の人の心に來る、飽きといふ秋がサ憂いからサ。

評 秋には雁の鳴き渡るのを有意に取り合はせた。「世の中の人」は例の一人をさしたのである。

あはれともうしとも物を思ふ時などか涙のいとなかるらむ　よみ人しらず

釋 ○いとなかるらむ　「いとなし」はせはしいことをいふ。新撰字鏡に倦惓を伊止奈志（イトナシ）と訓んである。

大意 人が情け深くて、あゝ嬉しいと思ふ時も、人がつれなくて、あゝ憂いと思ふ時も、何でかうも、涙が暇なくこぼれるのであらうぞ。

評 人の知り切つた平凡の事實、只一つ疑問の語を著けて、纔に詩情の搖曳するを覺える。作者は點化の術を心得てゐる。

○

身をうしと思ふに消えぬ物なればかくても經ぬる世にこそありけれ

大意 思ふ人にすてられて、限りなくわが身が憂いと思ふのに、流石に命はえ消えぬ物なので、このやうに憂い身ながらも、やはりそれなりに經て行けば行かれる世でサあつたわい。

評 見棄てられたら、その悲歎にすぐにでも死ぬやうに思ひながら、よくもいまだに居るものと、過去の回想に耽つたので、人間の弱さを告白したものである。上句の說明的なのがくちをしい。

蜑の刈る藻に住む蟲のわれからとねをこそなかめ世をば恨みじ　典侍藤原直子朝臣

釋 ○われから　名詞のわれからに、我れからをかけた。「われから」を秋成は「六帖には、別の題に出だせれば、その世には、人知りたる物なるべし。貝などの一種にて、破殼の義とも思はる。伊勢物語にも、われから身をも碎きつる哉とよめり。こはわが友正のりが考なり」といひ、大和本草には「藻にいで來る蟲にて、細く長きものなり」といひ、北邊隨筆には「藻につきたる貝にて、殼の一ひらなる物」といひ、又景樹は「因幡わたりにて海布に小蝦の如きいとさゝやかなる蟲のつきたるをいふ。さるは、甲めきたる物のもぬけたる、或は破れたる

さまなど、はかなけに見ゆめり」といつた。なほ玉勝間、閑田耕筆、瓦礫雜考、茅窓漫錄、後撰新抄、參考勢語附錄など、うるさい程前人の說があるが、いづれもたしかな事はない。○ねをこそなかめ　聲をあげて泣かうの意。

大意　海士の刈る藻の中に住む、われからといふ蟲の名のやうに、何事も我れから仕出した事と了見して、自分一人音を立てゝサ泣かうわ、つれない人を恨みはすまいぞ。

評　われからに就いて、久保之取蛇尾にいふ、

顯註、八雲御抄、色葉和難、餘材抄、たしかならず。今試に僻案をいはむ、仁德紀に「故諺曰有海人耶、因己物以泣、是其緣也云々」。古今の歌はこれによりて詠めるならむ。海士の刈る藻に住む蟲とは、かの調進の魚をいふ。われからとねをこそなかめとは、彼の諺に、おのが物から音泣くといへるが如し。かく見る時は、たしかなる證文ありて、われからとは貝ぞなどいふ論なかるべし。云々。

調進の魚を蟲とは、あまりに甚しい牽强で、失笑したくなる。無論意釋の解に從ふがよい。初二句は序である。三句以下は、まことに「有海人耶因己物以泣」の諺に據つたものだらう。人のつれないのをも、皆わが不束なる故と、ひとへにおのれを責めた謙虛な態度と、「音をこそ泣かめ」と限りない心の痛手をむき出しにしたのとは、他の同情を惹く素因をなしてゐる。

この歌伊勢物語には二條后の御歌とし、

戀ひわびぬあまの刈る藻にやどるてふわれから身をも碎きつるかな

といふ業平の返歌がある。

あひ見ぬもうきもわが身のから衣　思ひしらずも解くる紐かな　いなば

釋　○わが身のから衣　我が身からの意に、唐衣をかけた。「から衣」は羈旅「唐衣きつゝなれにし」の條に既出。○紐　こゝは下裳の紐である。

大意　思ふ人に逢はれぬのも、その人のつらいのも、皆我が身からなので、自分のやうな者は、とても先の氣に入る譯は無いのに、その人の思つてくれる知らせがましく、さても〳〵譯がわからずに、解ける下紐であることよ。

評　下紐の解けるのを、人に戀ひらるゝ兆とすることは、戀一「思ふともこふとも逢はむものなれや」の條に說明しておいた。しかもその歌とこれとは類想の同型である。只彼は一度も逢ひ見ぬ趣、これは逢ひ見たが飽かれた趣であることが差つてゐるだけである。下紐の思ひ知らずとある擬人を一ふしとする。二句の碎けたのと三句へのうつりの辭樣とは、餘り快くもない。

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌　すがのゝたゞおん

つれなさを今はこひじと思へども心よわくもおつるなみだか

釋　○なみだか　「か」は歎辭。

大意　人のつれなさを思ひ知つて、今はもう戀ひ慕ひはすまいとたしなむけれども、ともすれば思ひ出して、さ

てもさても心弱くまあ、こぼれる涙であるよ。

評 何と理性で抑へても、涙の方で承知しない。戀の眞諦が卽ちこゝに存する。六帖の詠者不詳の歌に、戀ひしとはいはじと思ふにきのふけふ心よわくもおつる涙か　同想の同型、どちらが先であらうか。思ふに、或はこの歌が轉つて傳はつたものではあるまいか。初句、新撰萬葉につれなきをとある。これは意が一層明確である。

題しらず　伊勢

人知れず絶えなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはましものを

大意 はじめから二人の中が、世間の人に知られずに、そして切れてしまふのであらうならば、つらい事ながらも、せめてあれは無根の噂だとでもいひもしようものを、はやもう世間の人も知つて居るので、さうもいはれねば、切れたうへに浮名が立つて、さて〳〵つらい事よ。

評 當時は一夫多妻であり、そして男子はなか〳〵放縱であつた。だから忘られる卽ち棄てられる危險は婦人には多かつた。その場合その自尊心と名譽とを傷けない唯一の彌縫策は、男との關係を祕密に葬ることだけれども、公然と人が知つた中では、それも出來ない。進退谷つた苦悶の聲、悽愴の感に打たれる。古本今昔物語に、今は昔伊勢の御息所のいまだ七條后の御許に候ひける頃、枇杷左大臣(仲平)若くして少將にてありける程にいと忍びて通ひ給ひけるを、忍ぶとすれど人おのづからほのかに、そのけしきを見てけり。その後少將通ひ給はずして音なかりければ、かく詠みてなむ遣はしたりける。「人しれず云々」と。少將これを見てあはれと思ひけむ、かへりてなむ此度はあらはれていと思ひて住み給ひけるとや。とあるのは、その事情を裏書するものである。二句、六帖にやみなましかばとある。

それをだに思ふ事とてわが宿をみきとないひそ人のきかくに　よみ人しらず

樣 ○思ふ事とて　思ふ事としての意。○きかくに　聞くにの意。〳〵くの延言は「かく」である。

大意 貴方に今飽かれたのはつらい事であるが、そのうへに棄てられたなどいふ噂が立つては猶更つらい故、せめて噂の立たぬやうにする、それをなりとも私を思つて下さる事として、外の話のついでにも、私の家を見たなどと、決していつて下さるな、事ありさうに人が聞くによつてサ。

評 「わが宿を」とあるので見ると、壻殿を家に通はせたのである。然るにその壻殿が甚だ浮氣な奴で、來たかと思ふともう愛想を盡かして來ない。これでは婦人の立場として我慢の出來ない侮辱と悔恨を感ずる。そこでいつそ私の家へ來たといつてくれるな世間の手前もあるからと、滿足すべからざる事に滿足して、せめてそれを愚に着ようと歎願した。その心情は頗るあはれである。宣長が初二句を、人を深く思ふ時はその人の家をなりとも見たく思ふものなれどもといふ意に誤解して、部立の違つてゐるやうに論じたのは、なか〳〵である。

○

あふ事のもはら絶えぬる時にこそ人の戀しきことも知りけれ

釋 ○もはら　專ら。

大意 これまで絶え〳〵ながらも、逢ふことのあつた間は、待つといふ樂みもまじつて、戀しさもさ程では無かつたが、今かう一向に絶えてしまつて、逢はれぬとなつた時にサ、はじめて人の誠に戀しい事も思ひ知つたわい。

評 いひ通つたまでのやうだが、更に見返すと、極端まで突き詰めた感じが出てゐる。

○

わびはつる時さへ物のかなしきはいづこをしのぶ涙なるらむ

釋 ○しのぶ　慕ふ意。

大意 あの人に見棄てられて、難儀しぬいた時節にも、やはり忘れかねて物悲しいのは、どこをあの人の取得として戀しく思つて、流れる涙であるのであらうぞ。

評 一寸理性に返つた或瞬間、しづかに自分をながめたのである。「いづこをしのぶ」と涙を怪しんだのは、卽ち心を怪しんだのである。身を怪しんだのである。といつてどう諦めがつくのでもない。まことに愛着の念はその根が深く、理性に超越してゐる。

後撰集に再出したのは「男の忘れ侍りければ」と詞書があつて、作者は伊勢である。また四五の句、新撰和歌にはいづれをしのぶ心とある。

恨みても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして　藤原興風

大意 恨んでも泣いても、この悲しさを、誰れを相手にしていはうぞ、思ふ人は最早絶えて、一向に逢ふことも無ければ、鏡へ映つて見える自分の影で無くては、外に相手にしていはうやうが無いわ。

評 孤榮依るところなく、形影相弔するばかり、この寂寞荒涼たる思ひは、渾べてその人の無情に因緣するのである。下句沈痛で、嗟歎の意が永い。結句の下には。の辭を添へて見ると、意が明瞭に聞える。

夕されば人なき床をうちはらひ歎かむためとなれるわが身か　よみ人しらず

釋 ○夕されば　冬歌「夕されば衣手さむし」の條に既出。○人なき床　人のゐぬ床。

大意 今は契も絶え果て、、來て寢る人もない床を、夕方になれば、以前の通り打ち拂つて、以前夕暮毎には人を待つとて、床の塵を拂つた事を思ひ出しては、空しく歎かう爲に生まれて來た、我が身であることかまあ。

評 拙い運命をかこち、身をはかなんだ愚痴は、この沒理想の誇張となつた。苦勞する爲にこの世に生まれたのかなど、今もよく人のいふ事である。萬葉卷十、

あすよりはわが玉床をうち拂ひ君といねずてひとりかも寢む

を藍本として、更に一歩をすゝめたもので、いづれも婦人の作であらう。

○

わたつみのわが身こす波たち返り蜑のすむてふうらみつるかな

釋 ○わたつみのわが身こす波　我が身を超すわたつみの波といふを、倒置していつた。○蜑のすむてふうらみつる　海士の住むといふ浦見つるに、恨みつるをかけた。

大意 海の自分の身をうち超すほどの大波が寄せて、海士の住む浦を見、浦を見しては立ち返り〳〵するやうに、自分の身をさし越して無い者にする人を、今更恨んでも詮ない事ながら、又しても〳〵恨んだ事よ。

評 顯昭いふ、

我をおきて先に人に逢ふを、わが身こす波とそへたるにや。末の松山（君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ）かといふ人あれど、その心見えず、云々。

歌意の解し方は誤つてゐるが、末の松山に關係のないといふはよろしい。なほ戀三「あふ事のなぎさにし寄る波なれば」の條を參照ありたい。

○

あらを田をあらすき返し返しても人の心を見てこそやまめ

釋 ○あらを田　荒れ田。「を」は美稱。○あらすき返し　疎鋤き返しの意。打聽に擧げた或說に、「小田は度々すき返し作る、初に鋤くをばあらすきとて、あら〳〵と鋤くなり」とある。今俗にアラクリといふ。○返しても返してまあ。返せどもの意ではない。「も」は歎辭。

大意 荒田をあら鋤き返すやうに、今一應立ち反つてまあ、人の心をとくと見屆けてサ、いよ〳〵心が變つたといふことならばあきらめて、戀ひ慕ふのも止めようわ。

評 この未練、この心長さ、所謂惚れた弱身なのであらう。初二句は、三句の「返しても」にかゝる序である。結句、四音三音の組織だから、調が促つて、上句の長高な序體にふさはない。六帖に「見てこそやまめ人の心を」とあるに從ふがよいかと思ふ。下なる誹諧歌に、なかき、

雲はれぬあさ間の山のあさましや人の心を見てこそやまめ

とあるに紛れて、下句を誤つたのではあるまいか。なほ六帖、又は童蒙抄にある、

伊勢の海のちひろたく繩くり返し見てこそやまめ人の心を

など、いづれもその序詞を殊にするだけで、主成語は同一である。どれが先に出來たものか。

初句、六帖にあらき田をとある。新しき墾田の意である。景樹はこれを宜しとして、二句を新鋤き返すの意に解きなし、さて「新田は、何返も打こなすべければ、打返し〳〵の序に置きて力あるなり」といつた。

○

ありそ海の濱のまさごと頼めしは忘るゝことの數にぞありける

釋 ○ありそ海　荒磯海の義。○まさご　「ま」は美稱。「さご」は砂の略。○頼め　頼ませの意。

大意 大海の濱の眞砂の數のやうに、數々の親切を盡して居るといひ立てゝ、自分を頼もしく思はせておいた、

その濱の眞砂の數は、案外にも自分を忘れる方の數でサあつたわい。

評 冷熱の豹變に驚いて、昔のかね言にもかうした新解釋を與へたことは、卽ち深くその不誠意を指斥したのである。怨意が深い。後撰集戀四、

常磐にとたのめしことはまつほどの久しかるべき名にこそありけれ

もこの類想である。

○

蘆べより雲ゐをさしてゆく雁のいや遠ざかるわが身かなしも

釋 ○ゆく雁の　行く雁の如くの意。

大意 蘆邊から空をさして飛んで行く雁の、段々遠くなるやうに、段々と思ふ人にかけ離れて、契の絶えて行く自分の身は悲しいわまあ。

評 三句までの序は、萬葉集卷十、

秋風にやまとびこゆる雁がねのこゑ遠ざかる雲がくるらし

に類似してゐる。さうした景色を詠め入つてゐる折節、雁のいや遠ざかるから、ふと聯想があの人に走つて往つたやうな趣である。

○

しぐれつゝもみづゐよりも言の葉の心のあきにあふぞ佗しき

釋 ○心のあきに　飽きに、秋をかけた。

大意 時雨が降り〳〵して、木の葉が色づいてゆく秋は、わびしいものであるが、それよりもまさつて、親切にいつて下された言の葉の變る、人の心の飽きといふ秋に逢ふのがサわびしいわ。

評 緣語が表現の出發點になつてゐるので、感じが生きてこない。言の葉の混喩、心のあきのいひかけ、新撰萬葉に、

言の葉をたのむべしやはあきくればいづれか色の變らざりける

とあるに似てゐる。さては上の、

わが袖にまだき時雨のふりぬるは君がこゝろにあきや來ぬらむ

今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉きへに移ろひにけり

の二首を錯綜して出來たやうな歌である。

○

あき風のふきとふきぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり

釋 ○ふきとふき　吹きに吹くと同じ。

大意 秋風の吹きに吹いた武藏野は、流石に廣い野ながら、總體に皆、草の葉色が變つたわい、といふが表面の意で、飽きたといふお心が強くなつてくる時には、かねての約束のお言葉は、すつかり變つたわい、といふが

裏面の意。

評 顯昭はこの歌意を釋して、「武藏野といひて、一本ゆゑにの心あるなり」といつた。これは、むらさきの一本ゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る の意に據つたといふので、景樹も贊成したがわるい。一向無關係のことである。これは、流石に廣い武藏野の草葉も、秋風に色の變らぬは一つもないといひ立てゝ、御親切らしかつた貴方のお言葉も、やはり同じこと變りましたよと、あてつけた皮肉が手際なのである。おのづから含蓄はある。

四句、六帖になべて草木のとある。

あき風にあふたのみこそ悲しけれわがみ空しくなりぬと思へば　小町

釋 ○たのみ　田の實に、賴みをかけた。田の實は稻をいふ。○わがみ　身に、實をかけた。

大意 秋の大風に遇ふ田の稻はサ、折角賴みにして置いた私の稻の實が入らずにしまふと思へば情けないわ、それと同じやうに、人の心の秋風にあつて、私の身の賴みが、皆むだになつてしまつたと思へばサ悲しいわい。

評 例の口吻、この人には免れ難い癖であらう。

あき風のふきうらがへす葛の葉のうらみてもなほうらめしきかな　平貞文

釋 ○葛の葉の　「葛」はその葉が廣くて、風に飜りがちで裏を見せるので、葛の葉の裏見とつゞけ、恨みをかけた。

大意 思ふ人が自分を飽きて裏反つた恨は、秋風が吹き反す葛の葉の、裏を見るといふやうに、恨をいつてもいつても、やはり恨が晴れぬ位、さても〳〵恨めしいことよ。

評 上句は、「うらみて」にかゝる序である。萬葉卷集十二、

水葉の岡の葛葉をふきかへしおもしる子らが見えぬ頃かも

の序も同じ取材であるが、彼れは葛の葉の表面の隱れる方から見たのを、これはその裏面のあらはれる方から見て、描寫を順逆にした、作者が折角の新案を、後人がやたらに踏襲して陳腐としてしまつたのは、葛の葉のこれも恨めしい限りであらう。「うら」の語の三疊は、わざと巧んだものである。

初二句、六帖に秋風に吹き反さるゝとあるが宜しいと、景樹は論じた。まことに一意到底の序體にはふさはしく、初句三句の終りの「の」の辭の重複も避けられようが、作者の歌風の多くより論ずれば、やはり本文によるべきかと思ふ。

あきといへばよそにぞ聞きしあだ人の我れをふるせる名にこそありけれ　よみ人しらず

釋 ○あだ人　浮氣な人。○我れをふるせる　自分を見棄てゝ、舊人としたのをいふ。

大意 これまでは、あきといへば季節の名と心得て、餘所事のやうにサ聞いて居つた處が、餘所事では無い、移

り氣な人が自分を見棄てゝ、舊いものにした名、卽ち自分を飽いたといふ名でサあつたわい。

評 時節の秋にあひ、又も人の飽きにあつたので、それを湊合した巧である。

初句、打聽本に秋てへばとある。

以上五首、秋に飽きをよせて恨んだ戀である。かやうに秀句を基礎とした構想は、詩としての本旨を誤つてゐる。度々見ると唾棄してしまひたく思はれるのも、評者ばかりであるまい。

○

わすらるゝ身をうぢ橋のなか絶えて人も通はぬ年ぞへにける

又は、こなたかなたに人も通はず

釋 ○身をうぢ橋の　身を憂といふに、宇治橋をかけた。宇治橋のことは、戀四「さむしろに衣片敷きこよひもや云々」の條に既出。「うぢ橋の」は宇治橋の如くの意。

大意 人に忘られて見棄てられるわが身は、憂いものであるが、その憂いといふ名の附いた宇治橋の中の絶えて人が通はぬやうに、中絶して使の人さへも通はぬ年がサ、何返も經つたわい。

評 まことこの歌を詠んだ頃は、宇治橋の中絶えたまゝに、年久しく經て居たのであらう。大化二年に、道昭和尙が始めて架設してから、延喜の頃までは、二百三十餘年を經た。この間必ず幾多の興廢があるべき筈である。紀に所見がないからとて、「中絶えて」を橋の緣語に設けていつた事とのみ解した前人の說は、太だ妥當でない。

新撰和歌も、結句は左註と同じい。この方調が豪健で面白い。

あふ事をながらの橋のながらへてこひ渡るまに年ぞへにける

坂上これのり

釋 ○ながらの橋　弘仁三年に攝津國長柄郡（今西成郡）長柄の里の長柄川に架けた橋。長柄川は淀川の支流。

大意 長柄の橋の名のやうに、生き長らへて、あの人に逢ふ事を、ひたすら戀ひ望んで居るうちに、はや何年もサ、意外に經つたわい。

評 假初の夜離と思つて待ち戀うてゐるうちに、年月の經たのを歎いたのである。「長柄の橋の」は三句に同音を反復させた序で、「こひ渡る」は橋の緣語である。初句は直に四句にかけて心得てよい。諸註、逢ふ事を無といふに、長柄の橋をかけたと解いたのは、强言にちかい。

うきながらけぬる沫ともなりなむながれてとだに頼まれぬ身は

とものり

釋 ○うき　浮きに、憂きをかけた。○けぬる　「け」は消えの約。○ながれて　流れてに、生存へての約なるながれてをかけた。

大意 せめては長らへての末でなりとも添はれよう、といふ頼さへ無いこの身は、いつその事、水に浮きながら消えてしまふ沫ともなつてほしいわ、憂き身ながらに死んでしまひたいと思ふから。

評「ながれて」から水の沫を聯想して、憂き身のまゝに死ぬるを、「浮きながら消ぬる」と轉義し、憂きをいひかけた。失戀の極死を冀ふは、既に分別を超越したものだから、狂熱が横溢して、語々活躍する筈である。それを彫蟲の小技に拘泥してゐるまに、感興を失つたのは遺憾である。

六帖に、二句きえせぬ沫と、結局賴まれなくにとある。又、家集には、二句消えぬる沫ととある。

○

ながれては妹背の山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中

釋 ○ながれ　流れに、長への意のながれをかけた。○妹背の山　妹山と背山とをいふ。紀伊國那賀郡にある。萬葉集に、「せの山にたゞに向へる妹の山」「木の川のべの妹とせの山」「並びをるかも妹と背の山」「木の國の妹背の山に」など、數多見えてゐる。宣長いふ、「妹山は兄の山あるにつきて、只設けていへる名にて、しかいふ山あるにあらじ。背の山のことはたしかに詠めれど、妹山のことはさして詠める歌見えず。今も背山村あれど、妹山は紛らはしくて定かならず」と。けれども、萬葉に、「木道にこそ妹山ありといへ」と詠み、又は、上の諸例どもを考へ渡すに、全然詞のあやとばかりもいひ難い。又、眞淵は、「妹山は大和、勢山は紀の國にありて云々」といつたが、これも萬葉に「木の國の妹背の山」とあるから從へない。古くは、すべて男性女性の間にも又兄妹の間にも夫婦の間にも、男を背、女をいもといつた。

大意　川も流れては、妹山背山の中へ落ちる吉野川と隔てるやうに、すべて人間の男女の中も、長らへて年久しくなれば、何時までも元のやうに睦まじくは無くて、自然隔てが出來るもその筈のことよ、よしまゝよ、これが世の中の有樣であるわ。

評　されば心の變つた人を怨むのも、よい程にして置かうの餘意がある。世の鹽も十分嘗め盡した人の口吻らしい。が實はかうなるまでには、散々苦勞をさせられたので、もう怨むもおこるも出來ない程に、彈力がなくなつた結果である。だから怨意が幽婉で迫つた點がない。比興を以て立意の骨子とし、「吉野の川のよしや」と同音を反復して、「世の中」と體言にいひ捨てた風姿、無限の含蓄と餘韻とがある。字句にまた一のたるみがなく、聲調も流麗である。

四句、新撰和歌に吉野の瀧のとある。

古今和歌集巻第十六

哀傷歌

いもうとのみまかりける時よめる　小野のたかむら

○泣く涙雨とふらなむわたり河水まさりなば歸りくるかに

釋 ○哀傷歌は、萬葉集にいはゆる挽歌(バンカ)である。悼亡の作を收めた。○いもうとの　小野氏系圖に據ると、篁の異腹の妹にあたる。○雨と　雨の如くの意。○わたり河　三途川をいふ。三途とは、火途及途血途の三つで、卽ち地獄餓鬼畜生の三惡趣を三大河に喩へていふこと、金光明經に見える。僞經十王經には、死出の山の先にある大河で、河中に三所の瀨があるといふ。よつて三瀨川(ミツセガハ)とも直譯して歌に詠まれた。○かに　助辭である。僞にと譯する。

大意 この私が泣く涙よ、いつそこぼれるならば、雨のやうに降つてもらひたい、それで冥土の三途川に、水が增ることであるならば、その川を渡りかけた妹も渡りかねて、再びこの世に立ち歸つてくるであらう爲にサ。

評 一朝の暴雨に動もすれば川止めの悲劇を演出した時代は、「越すに越されぬ大井川」と謠つた。いやこの時代は、洛中洛外でも雨降の川どめはよくあつたものだ。卽ちこれを佛敎思想の三途河に湊合して、涙の雨の川止

めに、亡者が渡りかねて立ち戻つてくることを熱望した。これらの構想は到底現代に見られないものである。更に思ふに、往時は異腹の兄妹の相婚を禁じなかつたから、篁はいたくこの妹君に懸想し、

中に行く吉野の川のあせななむ妹せの山を越えて見るべく

と詠んだ歌が玉葉集にある。骨肉の愛にかて〻加へてこの戀愛を以てしたので、頗る情合の切なものがあつたらうと想像される。それを端なく、香奩人去つて玉堂いたづらに空しい。悲んでなほ悲み、傷んで又傷む。その蘇み返る事を切望したのも無理はない。茲に至つて現世と幽界との見さかひがなくなつてしまつた。さては徒に巧語を弄して眞情を忘れたものでないことが知られる。雨をまで聯想したので、涕涙の千行を拭拂すれば、更に萬行と落つる狀が思はれる。涙の溢れるのを「降る」といつたのは、勿論雨の緣語である。

前のおほきおほいまうち君を、白川のあたりにおくりける夜よめる　素性法師

血の涙落ちてぞたきつ白川は君が世までの名にこそありけれ

釋 ○前のおほきおほいまうち君を云々　前の太政大臣を白川邊に葬送した夜よんだ歌との意。前の太政太臣藤原良房であることは春上「年ふればよはひは老いぬ」の條に既出。良房は貞觀十四年九月二日薨じた。山城國愛宕郡の後の愛宕の墓といふのがこの墓所で、卽ち白河である。爲家抄には今の法勝寺とある。大鏡にも、「白河にをさめ奉る日」とある。○血の涙　涙竭きては血を流すといふ本文による。韓非子に「卞和抱二其玉一哭二楚山下一三日三夜、泣涙盡、繼レ之以レ血」。○白川　志賀山越の傍に白川の瀧があり、その水の末流は洛外を通つて鴨川にそゝぐ。

大意 この薨去の悲しさを泣く、拙僧の血の涙が、落ちてたぎつて流れる事よ、さてはこの川水が赤くならうから、この川の名を白川といふのは、良房公御在世の時かぎりの名でサあつたわい。

評 血の涙と、白川との色相上の對映は、畢竟これ文字の洒落で面白くない。但この皮相の色彩は燦として、當時の人士の素人眼を眩ましめた趣が、大鏡に見えてゐる。誇張に過ぎて殆ど妄想に近い程なのを、斷乎としていひ切つたその眞實に取るべき點がある。かういはれるといかに浸常識の事も、或はさうかしらとつい釣り込まれる。諸註、かくては最早白川にあらずして赤川なりと、餘意をいひ添へたのは甚しい蛇足である。

堀川のおほきおほいまうち君みまかりにける時に、深草山にをさめける後によみける　僧都勝延

うつせみはからを見つゝも慰めつ深草の山けぶりだに立て

釋 ○堀川の云々　藤原基經、京の堀河に第があつて、堀河の太政大臣と稱する。寛平三年正月十三日薨じた。深草山は山城國紀伊郡深草村にあり、稻荷山の尾續きの山である。榮華物語には、木幡をこの公の墓所としてある。上田秋成の考に、「木幡は深草山のうしろにて連絡したれば、深草山と云へるが、卽ち木幡山にや」と。○うつせみ　空蟬の義で、蟬の蛻をいふ。但こゝは蟬のことに用ひた。この語、古來、身の轉じた語のやうにいふが、全然別語と見る方が穩やかであらう。○から　蛻。

大意 蟬ははかなけな物だが、その遺した蛻を見い〳〵して、氣を慰めたわ、然るに、基經公は火葬に附して遺

骸さへもとゞめぬのが餘りだから、この深草山に、せめてその火葬の烟なりとも殘つて立てよ、さらば公の形見と思つて慰まうはサ。

評 深草山の野邊送り、一夜明けると、今は早その荼毘の烟さへ消散し去つて、形見としては一物をもとゞめぬのに感じ、深草山を呼びかけて、その名殘の烟を要求したのに、追慕の情の甚しさが見える。上句は下句の爲に設けた比興の句ながら、蟬に蛻を見て慰む事は、甚だその謂れがない。或は現身(うつせみ)は骸(カラ)を見つゝも慰めつの意に解したらどんなものかとも思ふ。

六帖、又遍昭集に、下句けぶりだに立て深草の山とあつて、四五の句が轉倒してゐる。眞淵は遍昭集を杜撰として、本文を執したがその理由を説明しない。景樹、及び八田知紀は本文を排し、知紀は「もとのまゝにては理のみ聞えて、歎聲の響なし」とまで極言した。景樹、知紀等がいはゆる調(しらべ)とは、どんなものか知らないが、語急に節の促つた句を以て結束した本文の方が、却つてこの歌にふさはしい自然の調であると思はれる。

深草の野べの櫻しこゝろあらばことしばかりは墨染に咲け　　かむつけの峯雄

釋 ○これも同時の作である。○深草の野べ　前にある深草山の裾野をいふ。○櫻し　「し」は强辭。○こゝろ同情の意。○墨染　黑色をいふ。

大意 總べて草木は無情の物ながら、今度基經公を葬送したこの深草の野原の櫻よ、お前に思ひ遣りがあるならば、何時はともあれ、今年ばかりは喪服の色の墨染に咲きなさい。

評 當時の喪服は、橡、鈍色などで、おなじ黑にも濃淡の差があつた。さて花の頃は公の忌日より、まだ五十日にも滿たぬ程だから、御墓に參詣する人のかぎり、我れも人も常の衣とは引き換へて、墨染の袖なのに、墓邊の櫻が例年の通り、花やかに咲き出したのでは、心無しといはずには居られぬ。「心あらば」に櫻は非情の物ながらといひ添へては、分別に着していけない。始から有情の物として扱つて、只同情心があるならといふ激勵の詞と見るがよい。故にこの悲みに同情を有つなら、本來の色相を易へて、悲哀の象徵たる喪服の色に咲けといふ。この沒理趣の要求は、感情の奔馳するまゝに常識の範圍を逸した結果で、そこが詩歌三昧である。人麻呂が「磨けこの山」といひ、業平が「峯も平らになりななむ」といつたのも、亦これに外ならない。ましてや作者はこの公の家人と思はれるから、悲歎の極さう思ひ寄つたのも無理はない。けにこの歌の純眞の情は草木も感じさうである。果して流石の櫻もこの年は黑色に咲いたので、今に藤の森の二町ばかり南の地に、その櫻の故地として、墨染の名稱を存してゐる。信僞は深く辨ずるまでもないが、そんな奇蹟もあつてよさゝうだ。六帖に、二句櫻もとある。意が複雜になり調が弛緩して、却つて妙でない。こゝは一切他事をさしおいて、ただ櫻のうへにのみ就いて、一途にその同情を希つた單調の方が、思ひ入つた情が强く表現される。

藤原敏行朝臣のみまかりける時に、詠みて、かの家に遣はしける　　紀友則

寐ても見ゆ寐でも見えけり大方はうつせみの世ぞ夢にはありける

釋 ○藤原敏行朝臣の云々　敏行は延喜七年卒と拾芥抄にある。すると同五年撰進のこの集に、この歌の載る筈

がない。一説には昌泰四年の卒とある。○うつせみ、現し身の意。

大意　此度の御主人の御不幸に就いて思つて見れば、夢といふものは、寢て居ても見え、寢ずに居ても見えるわい、するともと〳〵この人間の世がサ、はじめから夢であつたわい。

評　あゝ敏行殿の事は、寐ずに見た夢のやうに存じますの餘意がある。身世を夢と觀ずることは、莊子に、

夢飲レ酒者旦而哭泣、夢哭泣者旦而田獵、方其夢也不レ知二其夢一也、夢之中又占二其夢一焉、覺後而知二其夢一也、且有二大覺一而後知二此其大夢一也、

丘也、與レ汝皆夢也。予謂二汝夢一亦夢也、

といひ、維摩經に、

是身如レ夢爲二虛妄見一、

又、金剛般若經に、

一切有爲法如二夢幻泡影一、

などいふ虛無或は無常說に胚胎してゐる。この思想は早く朝鮮文化輸入時代から浸染して、延喜の頃は、社會一般の思想となつてゐたから、別に作者の新案でもない。只この新味は、敏行の面影が起臥に關はらずいつも見える處から、それを旨く夢に撮合した手際にある。初二句の反復漸層は諧調をしてゐる。けり、けるの同辭の重複の如きは、深く問ふ所でない。

二句、一本に見てけりとあるはわるい。六帖、家集、顯本、みな本文の通りである。

夢とこそいふべかりけれ世の中にうつゝあるものと思ひけるかな

紀貫之

釋　○うつゝ　現の義で、實在をいふ。

大意　この度の事に就いて、よく〳〵思ひまはして見れば、世の中の事は、すべて夢とサいふべきであつたわい、それを今までは、世の中に現實といふことのあるものと思つて居た事よ。

評　死に對して觀ずれば、浮世は一切夢といふべきである。人間常住の思をなすことの非をつく〳〵と悟る。かう昨非を甚しく觀ずることは、人生の夢ともいふべき所以を強めたのである。詠歎の風姿にすて難いところがある。

三句、六帖に世の中をとある。拾遺集に再出したのにもさうあるが、それは異傳を採錄したに過ぎない。

あひ知れりける人の身まかりにける時によめる

壬生忠岑

あひ知れりける人のみまかりにければ

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず

釋　○この詞書、家集には「世の中常ならず心憂かりし頃」とある。

大意　睡り居るそのうちに見る夢ばかりを、夢といはう事か、そればかりを夢とはいはれまい、なぜなれば、元來無常の果敢ないこの世の中をも實在とは思はず、皆夢と思ふわ。

評　上の友則の歌の初二句を敷演したやうな歌で、勿論莊子や佛敎の意を踐んだものである。「はかなき世をも」

と始から底を割つてしまつては、「現とは見ず」がよく利かない。こゝの三首皆同想同體の歌で、友則がやゝ勝れてゐるらしい。それすら今から評すれば、陳腐の謗は免れ難い。

三句、六帖に夢といふとある。本文の方が優つてゐる。

姉の身まかりける時によめる

瀬をせけば淵となりてもよどみけり別をとむるしがらみぞなき

大意　水の流れて行く川瀬を、柵を掛けて止めれば、淵になつてまあ、水が暫くは止まるわい、然るに、死に行く人の別を止める柵がサないわ。

評　上句は柵にて瀬をせけば水は淵となりてよどみけりの略筆で、その簡淨さを味ふべきである。とめればとまる水を借りて、とめてとまらぬ死別に對せしめた。かうした反對の事相の配合は、詠歎の味を永くする詩家の慣手段である。別を止むる手段を、淵瀬の縁で「しがらみ」と轉義した。又三句まで一氣にいひおろして詠め捨て、然るにといふ接續詞を用ひず、直に「別を止むる」といひ起した、この緩急相拯す節奏は、今の表情に最も適切なる調を得たといつてよからう。萬葉集卷二に、明日香皇女を悼んで、人麻呂が詠んだ歌、

あすか川しがらみかけてせかませば流るゝ水ものどにかあらまし

に胚胎したかのやうである。人麻呂のは婉曲で、調ものびゝしてゐるが、これは意が明晰で調がまた促つてゐる。親身の姉の死んだ場合としては、おのづからかうあるべきである。まづは佳作であらう。

家集の詞書には、「相知りたる人の、すまひの使に、遠き國へ下るとて」とある。一時の別を惜む作としては、餘り哀傷に過ぎる。無論この集の詞書に從ふがよい。又二句、家集には淵となりつゝとあるが、つゝの語が落着しない。

藤原忠房が、昔あひ知りて侍りける人のみまかりける時に、とぶらひに遣はすとてよめる　閑院

さきだたぬ悔の八千たび悲しきは流るゝ水のかへりこぬなり

釋　○藤原の忠房が云々　忠房が以前夫婦の語らひせし人が歿した時に、その見舞に使を遣るといふのでよんだ歌との意。「とぶらひ」は見舞の意。○さきだたぬ　悔しさの先立たぬの意。○八千たび　幾度といふに同じい。○水の　水の如くの意。

大意　先に立たぬ後悔の、繰り返し〳〵て悲しいのは、なぜかといふに、流れて逝く水のやうに、死んでいつた人が、二度と跡へ戻つて來ぬのであるわ。

評　忠房の許に弔意をいひ入れる爲に、この歌を贈つたのだから、卽ち貴方の御心中は、かやうの御愁傷とお察し申すとの餘意が含んでゐる。かう當事者の胸中を忖度して、悲傷の意を敍するのは、深く同情をその人に寄せた所以で、弔慰の意がおのづからその中に籠つてゐる。これを諸註ともに、忠房が死者に先立たぬ事を悔むと解いたのは當らない。景樹は、

こは「後悔不レ立レ前、流水不レ還レ源」と云へる本文について詠めるにて、もと其の心離れたる古語の二句を取り合はせて、しひて、一首の趣を立てたる歌なれば、甚だ聞え難し。

と評した。この準據は、顯昭も既にいつた事である。「八千たび」は多數の轉義である。

紀友則が身まかりにける時よめる　つらゆき

あす知らぬわが身とおもへどくれぬまのけふは人こそ悲しかりけれ

大意 時の間もあてにならぬ世の習で、今日はかうして居ても、明日は又どうなる事やら知られぬ我が身ぞと思ひはすれど、まだ明日ともならぬ今日のうちは、わが身のあるまゝに、死んだ人がサ悲しく思はれるわい。

評 例の無常思想の歌である。昨日までは、夢にもかうならうとも思はなかつた友則の、今日ははや隔世の人となつたにつけて、わが明日の命もはかり難い有待の身であることを觀ずる。けれどもさし當つては、やはり人の上の悲まれるのは、これ意智が感情を抑制し切れぬ結果で、そこに友則の死を悼む友情の一方ならぬ態が見はれ、覺えず一掬同情の涙を墮さしめる。大作絶唱ではないが情眞の語で、口誦に値するものである。命あるうちはといふべきを、「暮れぬまの今日は」と轉義して、上の「あす」とあるに對應せしめ、又、「わが」と「人」とを對照させたのなど、措辭が工で緻密である。

延喜十四年の泉大將(藤原定國)の四十賀に、友則の歌がある。すると友則の死は同十四年以後の事でなくてはならぬ。この集撰進の延喜五年より少なくとも十年のちの作である。撰進後頗る出入のあつた確證である。拾遺集、及び六帖、家集等に、二句命なれどもとあり、結句、家集にはあはれなりけれとある。

たゞみね

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しきものを

釋 ○時しもあれ　時しもこそあれの略。○ある　生存の意。

大意 一體物事には時節がサあるわ、それに何ぞや、取り分けて秋の時分に、人が死別すべき事であらうか、い、や死別すべき事では無いわ、秋はたゞさへ物悲しい時節で、生きて居る人を見てさへ戀しいものを、死別をされてたまるものではない。

評 秋を悲むことは、文選にも白氏文集にも見え、わが國人も確たる文獻こそないが、夙くよりさう感じもしたと思はれる。そのうへに死別の悲劇を添へては、慘又慘で、

紛々落葉那堪二秋色之摧一、渺々晨星竟逐二流光而逝一、

の儔である。機嫌をえらばぬ死別に對して、この無勘辨者よ、秋はこれその時でないと一喝したのは、既に理趣を超えて詩境に入つたものである。「あるを見るだに悲しき」は、感傷的の作者の人格が思はれる。六帖に「時しもあれ秋やは人に別るべきさるは夜寒になれる頃しも」とあるは、この下句の他のと紛れて、一つになつたものだらう。

母がおもひにてよめる　凡河内躬恒

神無月時雨にぬるゝもみぢ葉はたゞわび人のたもとなりけり

釋 ○母がおもひ　喪を古へは思といつた。○わび人　難儀してゐる人。

大意 この十月の時雨に濡れる紅葉の葉は、只もう母親に離れて、難儀の目を見て泣いて居る者の袖であつたわ

い、あの紅くて濡れて居る所がサ。

評 例の血涙の故事を襲つての聯想で、涙の爲に袂は紅色に變じたと誇張して、時雨の紅葉に混喩した。浮誇その實に遠かつてゐるのは遺憾である。後撰集秋下、

から衣たつ田の山のもみぢ葉は物おもふ人のたもとなりけり

も、全くこの等類である。

父がおもひにてよめる　たゞみね

藤ごろもはつるゝ絲はわび人のなみだの玉の緒とぞなりぬる

釋 ○藤ごろも　喪服をいふ。藤葛の纖維で織りなした疎布で、賤者の服とし、又貴人も喪中には鮮美の衣を憚るので、これを喪服とした。後には、たゞ喪服の稱となつた。○はつるゝ絲　解(ホツ)れる絲。藤布は筬(オサ)の疎いよみの間遠な物だから、その絲が解(ホツ)れ易い。

大意 今喪服に着て居る、この藤衣のほつれる絲は、父親に別れて難儀して居る者の、悲しさにこぼす涙の玉を、珠數繋ぎにする緒とサなつたわ。

評 藤衣の絲のはつれに、たま〳〵涙のこぼれかゝつたのを見て詠んだのだらう。涙を玉と觀ずることはもう久しい事であり、絲には玉を貫くといふ聯想の起るは、この時代相應の慣習であつた。この類想は枚擧に遑がない。纖巧。

三句、拾遺集哀傷部に「服ぬぎ侍るとて」と詞書して、詠人不知として再出したのにも、貫之集にも、君こふるとある。又拾遺集には、結句緒とやなるらむとある。

おもひに侍りける年の秋、山寺へまかりける道にて　つらゆき

よめる

朝露のおくての山田かりそめにうき世の中をおもひけるかな

釋 ○朝露のおく手　朝露の置くに、晩稻(オクテ)をかけた。○山田　山縣(ヤマタ)の田。○かりそめに　苟且(カリソメ)に、山田を刈るといひかけた。

大意 あの朝露の置く、晩稻の山田の稻を刈るといふやうに、假初に只うか〳〵と、この憂い世の中を、さまでとも思はず、今までは思つて居た事よ。

評 この思に中つてこそ、始めて身にしみて憂い世の中といふことを悟つたの餘意がある。上句の序は、山寺へ墓參の途上に於ける實景を應用したらしい。初二句のいひかけ、家集に、朝露のおく手の稻はといふもあり、作者の常套と見える。

二句、一本におくての稻葉とある、わるくもないが、強ひていへば、葉の字が餘り物である。又初句、六帖に白露のとある。

おもひに侍りける人を、とぶらひにまかりてよめる　たゞみね

墨染の君がたもとは雲なれやたえずなみだの雨とのみ降る

釋 ○とぶらひにまかりて　見舞に往つて。

大意　貴方の着てお出なされる墨染の黒い衣の袖は、雨を降らす雲であればかして、絶えず涙が雨のやうに、ひたすら降るわ。

評　涙を雨に比喩し、その縁でこぼるゝことを「降る」と轉義し、さて雨雲と喪服の黒色とを聯想して、袂を雲と假喩した。

拾遺集哀傷部に、詠人不知「墨染の衣の袖は雲なれや涙の雨のたえず降るらむ」とあるは、この訛つたものだらう。

女のおやの思にて、山寺に侍りけるを、ある人のとぶらひつかはせりければ、かへり事によめる　よみ人しらず

あしひきの山べに今はすみ染のころもの袖のひる時もなし

釋 ○女のおやの云々　女は妻である。この詠者が、妻の親の喪に中つて、その追福のため山寺に籠つて居たのを、或る人が使を以て見舞つてくれたので、その返事に詠んだ歌との意。○今はすみ染の衣　今は住むといふに、墨染の衣をかけた。住み初むとまでかゝるのではない。「墨染の衣」は喪服をいふ。

大意　私はお聞き及びの通り、かやうな山邊にもはや住み付いて、亡人の思に泣き暮して、服の墨染の衣の袖が、乾く時も無いのでありますわ。

評　近況報告的の作に近い。上句の口調は、わづか三七日か四七日の山ごもりを、頗る誇大にいひなしたもので、隨つて「ひる時もなし」によく響いてくる。

涼闇の年、池のほとりの花を見てよめる　篁　朝臣

水の面にしづく花のいろさやかにも君がみ影のおもほゆるかな

釋 ○涼闇の年　涼闇にあたつた年。涼闇は展中紀に、ミモノオモヒと訓じてある。天子の崩御で、國中の上下悉く喪に居る稱である。わが古制には十三箇月間である。○しづく　沈み漬くの義。○さやか　鮮明、清亮などいふ意。○み影　御面影。

大意　あの池の水の面に漬つて居る花の色の、いかにも鮮やかであるやうに、あざやかにまざ〳〵と、崩御あらせられた先帝の御面影が、思ひ浮べられます事よ。

評　初二句は、「さやかにも」にかゝる序である。花の色を龍顏に思ひ擬へ奉つたとするは鑿であらう。諸註皆、嘉祥三年三月に崩御せられた仁明帝の涼闇としてある。なほ景樹はいふ、「詞書に涼闇の年と緩びたるを見れば、必ず櫻の時とも思はれず。この頃は櫻は櫻とありて、たゞ花とのみあるは諸木の花なり云々」と。するとあながち仁明帝の涼闇にも限らない事になる。

或時作者がその庭土を逍遙してゐると、池邊の花木は咲き誇つて、あざやかな影を水中に落してゐた。あゝ今年は涼闇なのに非情の草木はと思ふと、君の御面影はまざ〳〵と眼に映じてくるのであつた。「しづく花の色」は卽ち花影なので、隨つて「君がみ影」に脈絡が通じて、その襯染をなしてゐる。影の語が主眼である。然るに

景樹が上句を無心の序と主張したのは、甚だ委しくない。

深草のみかどの御國忌の日よめる　文屋やすひで

草深きかすみの谷に影隱してる日のくれし今日にやはあらぬ

釋 ○深草のみかど云々　「深草のみかど」は仁明帝を申す。山城國紀伊郡深草陵に葬め奉つたので稱する。「御國忌」はミコキと訓む。天皇崩御の御忌日をいふ。御忌日は、嘉祥三年三月二十一日である。御年四十一。

大意　盛んに照る日が、深い霞の谷に隱れて暗くなつたやうに、まだお盛りのお年で、俄かに崩御遊ばされ、草の深い深草山の霞の谷へ葬り奉つたその日が、丁度去年の今日では無いか、いや今日ではあるわ。

評　悲しみに取り紛れて、月日の經つをも覺えぬうちに、早くも御一週忌の今日に逢つたのを驚歎したのである。蓋しこの日に諒闇は果てゝ、世間は平常に復する時なので、特に感慨が深いのである。「草深き霞の谷」とあるに、折ふし三月で霞の深く立つた深草山を暗喩した。日を天子に喩へることは古來の常套であるが、「てる日のくれし」といつて、未だ寶算のお盛りにお崩れになつた事をも思はせたのは巧喩である。これも例のこの作者の口吻。

深草のみかどの御時に、藏人の頭にて、よるひる馴れ仕うまつりけるを、諒闇になりにければ、更に世にもまじらずして、比叡の山にのぼりて、かしらおろしてけり、その又の年、みな人御ぶくぬぎて、あるはかうぶり給はりなど、よろこびけるを聞きてよめる　僧正遍昭

みな人は花のころもになりぬなり苔の袂よかわきだにせよ

釋 ○深草のみかどの御時云々　仁明天皇の御代に藏人頭で、書夜おそばにお馴れ申して、御奉公して居つたのを、御崩御になつたので、一向出仕しないで、比叡山にのぼつて、延暦寺で剃髪してしまつた。その翌年諒闇が果てたので、誰れも皆喪服を脱いで、或は位階の昇進などしてお禮など申すのを聞いて詠んだ歌との意。「藏人頭」は藏人所の長官。四位相當官で、定員二人。頭ノ中將と頭ノ辨とである。藏人所のことは秋上「花にあかで」の條の詞書の解に既出。「比叡の山」といへば延暦寺をいふのであつた。「御ぶくぬぎて」は諒闇の間の喪服を脱ぐをいふ。「かうぶり給はり」は位階を賜はるをいふ。○苔の袂　蘿蔚の衣。隱者の服を稱するので、僧衣に通はせて用ひた。

大意　世間の人は、皆もはや御服をぬぎ換へて、花やかな衣になつてしまつたわい、ひとり自分は花の衣どころか、未だに涙をこぼして泣いてのみ居るので、せめてこの涙に濡れた苔の衣の袖よ、乾きなりともして呉れよ。

評　藏人の頭は殿上の貫首（クヮンシュ）として、威勢は竝ぶ者もなかつた。その下に居る藏人でさへ、枕草子に、めでたき物の中に「うへの、近く仕はせ給ふさまなど、見るには嫉ましくこそ覺ゆれ」といつてゐる。今の大臣に對する祕書官の如き關係で、天子の親昵を主とするから、一旦崩御となると、大概辭任交代する定めであつた。特にこの作者良岑宗貞が藏人頭として、仁明帝の優渥なる寵遇を得た趣は、大和物語などにも見えた如くで、げに諒闇

にあつては、世にも人にも交るまいと思ひ込んだ事であらう。況や好色者の名を取るほどの情に脆い性質は、人生の無常を痛感して暫時も平靜なる能はず、三十五歳といふ年の盛りを、天台座主圓仁に就いて、出家得道したのであつた。曉に星を戴いては花を摘み、夕に月を踏んでは閼伽を汲む。難行苦行もみなこれ君の御菩提の爲と、偏に戀ひ申してゐるうちに、たまたまに事の便りに都を聞けば、今は諒闇が果てたといふので、人は皆鈍色の衣を爭ひ脫ぎ、官位昇進、新恩に浴しつゝ悅びあふさまは、全然先朝の舊恩を忘れたかのやうな有樣なのに慨して、輕薄者流を驚かしたものらしい。皆人の色ある「花の袂」に、わが「露けき苔の衣」を對照させたのを見ても、この間の消息がほゞ窺はれよう。大和物語にも、仁明帝の御大葬の夜、少將宗貞が跡を晦して失せたことを敍べて、

御はてになりて御服ぬぎに、よろづの殿上人河原に出でたるに、童のやうなるなむ、柏葉に書きたる文をもて來たる。取りて見れば、（こゝに本文の歌を擧げたり）とあり。見ればこの良少將の手に見なしつ。いづらといひて、持て來し人を世界に覓むれどなし。法師になりたるべしとは、これにてなむ皆人知りにける。

とあるは、例の作話もまじつてゐるようが、實に如上の意を得て書いたかと思はれる。なほ思ふに、この「皆人は」はおもにわが主管してゐた藏人所の下臈で、藤衣を脫ぎすてたり、五位に敍爵したりして、したり顏な六位の藏人等をさしたらしい。悲哀沈痛、滿紙をして涙とならしめる。四五句の終りに疊用した「よ」の辭、この情趣を助けて、大いに力がある。

河原のおほいまうち君のみまかりての秋、かの家のあたりをまかりけるに、紅葉の色まだ深くもならざりけるを見て、かの家によみて入れたりける　近院右のおほいまうち君

うちつけに寂しくもあるかもみぢ葉も主なき宿は色なかりけり

釋 ○河原のおほいまうち君の云々　河原大臣の薨去された年の秋、そのお邸のあたりを通つたのに、紅葉の色がまだ十分にもならなかつたのを見て、そのお邸の内に詠んで遺つた歌との意。「河原のおほいまうち君」は河原左大臣源融公をいふ。「河原」の下、左ののの二字が脫けたのだらう。上に見えたのにはある。この公の薨去は寬平七年八月廿五日である。「かの家」は有名な河原院である。下の「君まさでけぶり絕えにし」の條にその說明がある。參照されたい。○うちつけ　卒爾の意。○あるか　「か」は歎辭。

大意 主人の歿くなられたこの院に來て見ると、さし當つて俄かに寂しくもある事よ、それもその筈、見事な庭の紅葉さへも、主人の無い宿は、流石に色が無かつたわい。

評 嶋好む大臣（オトド）既に仙し去つて僅かに月餘、鹽竈の烟早く絕え、遺愛の楓樹誰が爲にか紅なるといふ光景、河原院の今昔を思つては、誰れとてこの感愴を起さぬ者はなからう。まして作者源能有公は、次席の大臣として常に院主に昵び、院中に立ち入られたであらうから。三句は、色ある紅葉さへもの意で、結句に反觀してゐる。輕く看過してはならぬ。この一ふしが卽ちこの歌の生命である。

三句、一本にもみぢ葉のとあるはわるい。

藤原たかつねの朝臣のみまかりての又の年の夏、時鳥の鳴きけるを聞きてよめる　つらゆき

ほと、ぎすけさ鳴く聲に驚けば君が別れし時にぞありける

釋 ○藤原たかつね　高經は季吟の抄に、「内藏頭左中辨右兵衛督正四位下、寛平五年五月十九日卒」とある。

大意 今朝時鳥の啼く聲に驚いて、目が覺めて、つく〴〵思ふと、月日の經つは早いものよ、今が去年君が死に別れて往かれた時でサあつたわい。

評 景によつて情を起し、幾聲の杜鵑に故人の別哀を聯想してくる。故人は逝いて返らず、杜鵑は時節を忘れずして、又去年の舊聲に啼く。兩々對映して一段の感愴を生ずる。極めて素直な表現で、感哀が窮りない。四句、一本に君に別れしとある。本文の故人を主として、「君が」といつた方が面白い。

櫻を植ゑてありけるに、やうやく花咲きぬべき時に、かの植ゑける人、身まかりにければ、その花を見てよめる　きのもちゆき

花よりも人こそあだになりにけれいづれを先に戀ひむとか見し

釋 ○植ゑける人　望行の家族か友人かいづれでもよい。伊勢物語には、「昔男、友だちの人を失へるが許にやりける」と詞書して、この歌を擧げた。

大意 櫻の花はもろく散るはかない物だが、今その花が咲く時分に、それを植ゑた人がサ、一足先にはかなくなつてしまつたわい、かねては花と人とは、どちらが先へ仇になつて、戀ひ焦がれようとサ思つたことか、勿論花が先と思つたに、さて〳〵意外な事よ。

評 不定なる人世を、花に對比して說明した。「見し」は思ひしといふべきを、花の方について轉義したのである。下句は洗煉の語で、措辭婉微である。

あるじ身まかりにける人の家の梅の花を見てよめる　貫之

色も香もむかしのごさに匂へども植ゑけむ人の影ぞこひしき

釋 ○あるじ云々　家集には「あるじ失せたる家に、櫻を見てよめる」とある。○ごさ　濃さ。○匂へども　匂ふは、色には光澤のあるのにいひ、香には芬芳の高いのにいふ。

大意 この梅の花を見れば、色も香も昔の通りの濃さに變らず、美しく咲いてよく匂ふけれども、花の賞翫はさし置かれて、これを賞翫すべく植ゑた、昔の亡き人の面影がサ戀しいわ。

評 「濃さ」とあるので見ると、紅梅に違ひない。古へは軒近く植ゑられて、櫻にもまさる程にめでられた花である。家集の詞書に「櫻を見て」とあるは、これを心得かねた者のさかしらであらう。想はやゝ理路にわたつてゐる。

二句、顯本、及び六帖に昔にこさずとあるは、ことわりが通じない。

河原の左のおほいまうち君のみまかりて後、かの家にまかりてありけるに、鹽竈といふ處のさまを造れりけるを見てよめる

君まさでけぶり絶えにし鹽竈のうらさびしくも見え渡るかな

釋 ○「鹽竈といふ處のさまを云々」　河原左大臣融公の河原の院中に、陸前國千賀の鹽竈の浦（今の松島灣）の景を摸して造つたのをいふ。毎月難波の潮二十斛を汲ませて、鹽を燒かせたことが、古本今昔物語や顯註などに出てゐる。續古事談に「河原院は、融左大臣の家なり。臺閣水石風流をつくして、作りみがきて住み給ひけり。失せ給ひて後、その子法皇に奉りて、時々渡り給ひける。云々。その後、佛寺になりにけり。云々」と見え、山城名勝圖會に「今按ニ舊跡一、自ニ六條坊門一至ニ六條一、自ニ萬里小路一至ニ京極一、此内淨德寺鎭守、曰ニ融公靈社一、又、有下稱ニ鹽竈町一所上」とある。○まさで　座さずして。○鹽竈のうらさびしく　鹽竈の浦寂しくに、心寂しくを寄せた。

大意　融君が御座なさらずして、その節から鹽も燒かねば、烟が絶えてしまつたこのお邸の鹽竈の浦は、物寂びて一方ならず心寂しうまあ、見渡される事よ。

評　この好個の詩題に對して、感興がやゝ淺い憾がある。源順の如きは、長篇を賦してその荒廢の跡を歌つたではないか。わづかに「鹽竈のうらさびしく」の秀句など、いひ立てる程の事もない。只その細くからびた風姿はこの題目にかなつてゐる。（古本今昔物語に、この歌をあげて、

今は昔河原院に宇多院住ませ給ひける、失せさせ給ひければ、住む人もなくて、院の内荒れたりけるを、貫之土佐の國より上りて行きて見けるに、云々。

とあるのは時代が合はない。貫之が土佐守の任がはて、上京したのは、のちものち朱雀天皇の承平四年の事である。そんな頃に詠んだ歌が、この集に載るはずがない。

初句、六帖、朗詠、卅六人撰等に君なくてとある。）

藤原のとしもとの朝臣の、右近中將にて住み侍りけるざうしの、身まかりて後、人も住まずなりにけるに、秋の夜ふけて、物よりまうできけるついでに見入れければ、もとありし前栽、いとしげく荒れたりけるを見て、はやくそこに侍りければ、昔を思ひやりてよみける

君がうゑしひとむら薄蟲のねのしげき野邊ともなりにけるかな　みはるのありすけ

釋 ○藤原のとしもとの朝臣の云々　藤原利基朝臣が、右近衛の中將の時住まれた曹司が、利基の逝後は人も住まず空部屋であつたに、作者有輔が、秋の深夜餘所よりの歸途、邸内を窺ふと、もとあつた前栽の甚しく荒廢したのを見て、以前作者は、其處に家人として居つた事があるので、昔を思ひ出して詠んだ歌との意。「利基」

は贈太政大臣良門の子、内大臣高藤の兄で、堤中納言兼輔の父である。「曹司」は部屋、「前栽」は庭前の植込。

○ひとむら薄　一叢薄。

大意　故人が植ゑて置かれた、わづか一叢の薄が、何時の間にか茂つて、蟲の音のしげく聞える野原のやうにまあ、意外にもなつてしまつた事よ。

評　「蟲のねのしげき」に、おのづから一叢薄の繁く生ひ延びた光景が聯想させられて面白い。元來前栽の草木が荒れたとて、何ほどの事もないのを、「野べともなりにける哉」は全く誇張で、一叢薄との對映上、甚しい變化、いみじき荒廢の跡を想見させる手段である。作者は延喜年中に、左衞門の權少志に任ぜられたことが見えるから、もとより武人出身の微官で、利基在世の頃は、その家に出入してゐたのであらう。蒼涼凄酸、體調またよくこの趣に協つて、完作といつてよい。

惟喬の親王の、「父の侍りけむ時によめりけむ歌ども」とこ
ひければ、かきておくりける奥に、よみてかけりける

とものり

ことならば言の葉さへも消えななむ見れば涙のたきまさりけり

釋　○父の侍りけむ云々　父の在世の時に詠んだ歌どもを見せよと請はれたので、書いて贈つた歌卷の奥に、自分がこの歌を詠んで書きつけたとの意。友則の父は有友とて、貫之の父なる望行の弟である。一家悉く歌に名を得て、有友も集中に二首はひつてゐる。されば惟喬親王が遺稿を見せよと請はれたのも、その理由がある。

○ことならば　春上「ことならば咲かずやはあらぬ」の條に既出。○なむ　希望の辭。○たき　四段活の語で、沸る意。これを體言にいひすゑたのが、卽ち瀧である。

大意　自分の親は、とても死ぬる位ならば、詠み置かれた歌までも、一所に消え失せて貰ひたかつた、なぜなれば、なまなか形見の歌などが目にかゝると、一しほ思ひ出されていよ〳〵悲しく、落ちる涙が盛んに湧き立つて來るわ。

評　大事ともてはやすべき形見を、むしろなくなれと希つたのが、この一ふしであるが、類想も可なりあるのがくちをしい。

題しらず

よみ人しらず

なき人のやどにかよはば時鳥かけてねにのみなくと告げなむ

釋　○なき人のやどにかよはば　時鳥を冥途の鳥と稱する本文によつた。十王經に「一切衆生臨二命終時一、閻羅法王遣二羅卒一、(中略)縛二三魂一、至二門闕樹下一、樹有二荆棘一、宛如二鋒刃一、二鳥栖掌、一名二無常鳥一、二名二拔目鳥一、我汝舊里化成二鸚鵡一、示二怪語一鳴二別都頓宜壽一云々」とあるに據つたので、玉篇に「鸚鵡鳥、今之郭公」とある。但十王經は僞經で、郭公の事はかの蜀魄の故事に附會して、更に敷演したものである。その古い僞作なので、夙くから典據として作つた詩歌が多い。「なき人」は世に亡き人。○かけて　心にかけて。

大意　時鳥はこの世に亡き人の所へ通ふ鳥といふ事であるが、果して通ふ事ならば、これ時鳥よ、自分が亡き人の事を不斷心にかけて、聲に出して泣いてばかり居ると、あちらへ知らせて貰ひたいわ。

評 伊勢集に、

死出の山こえてや來つる時鳥こひしき人のうへ語らなむ

と、描寫を反對にしたものである。當時に弘通した佛教思想の結果として味ふ時は、また別趣がある。

○

たれ見よと花咲けるらむ白雲のたつ野と早くなりにしものを

大意 この宿の花は、誰れに見てくれよといつて、このやうに昔に變らず咲いてゐる事であらう、主人が死んだので家は荒れて、早もう白雲の立つほどの、里遠い野原となつてしまつたものをサ。

評 「白雲のたつ」は野の修飾である。輕く見るがよい。重くとる時は、現前に雲の立ち昇ることゝ聞えて、この景致に協はない。眞淵は、火葬の烟に寄せたといつたが、それでは邸内で火葬でもしなければ出合はぬ事になる。無情の花を有情のわれに對へ、有爲轉變の迹を不斷の花に對へた。

式部卿のみこ、閑院の五のみこに住みわたりけるを、いくばくもあらず、女みこのみまかりにける時に、かのみこの住みける帳のかたびらの紐に、ふみをゆひつけたりけるを取りて見れば、昔の手にて、この歌をなむ書きつけたりける

かずかずにわれをわすれぬものならば山の霞をあはれとは見よ

釋 ○式部卿のみこ云々　式部卿親王が、閑院のみこに馴れ染めてゐられたが、間もなく女みこがおかくれになつた時に、その住んで居られた帳臺の帳の飾の紐に文が結びつけてあつたのを、あとで發見して取つて見ると、故人の手蹟でこの歌が書きつけてあつたとの意。「式部卿のみこ」は宇多帝の皇子敦慶（アツヤス）親王のことで、玉光宮（タマヒカルノミヤ）と稱せられ、好色無双の美男であられたといふ。「閑院の五のみこ」は誰れとも定かでない。「帳のかたびら」は御帳臺に懸けた帳の布帛で、帷をかたびらと訓む。「紐」は帷の縫ひ合はせの處に平ぬひの細紐を添へて下げるをいふ。「昔の手」とは故人の筆といふことで、閑院の女五のみこの筆蹟である。

大意 若し在世の砌のお約束に變らず、何につけかにつけ、私の事をお忘れ下されぬものならば、山へ立ちます霞を、何卒あはれいとしやと思し召して、御覽じて下さりませ、山の霞は私が烟になりました名殘で御座りまする程に。

評 大空の霞に紛ふ北邙一片の烟となつて、萬事こゝに休する。わが亡き後に於ける好色無双の玉光の宮に、山の霞をあはれと見るばかりの、些の人情を要求したその裏情は頗る哀れである。

をとこの、ひとの國にまかりけるまに、女俄かにやまひをして、いと弱くなりにける時、よみおきてみまかりける

よみ人しらず

聲をだにきかで別るゝたまよりもなき床に寢む君ぞかなしき

釋 ○ひとの國　他國の意。○まかりける　萬治本まかれりけるとある。○たま　魂魄。○なき床　妻の無き床。

大意 貴方が他國にお出の爲、お姿はさておき、お聲をさへも聞かずに死に別れる、誠に殘念に悲しい私の魂ひよりも、追付け京へおかへりなされて、私が居らぬ跡の床に、獨りお休みなさるであらうと思ふ貴方が、おいとしう御座りますわ。

評 死に當つて靈魂は身體より遊離すとは、古代宗教のひとしく宣明する處である。さてこの生別に更に死別をかさねた悲慘の境遇は、既に他の同情を惹くに十分である。況や自身のこの大きな悲を傍にして、偏に夫の孤愛依る所なき悲境に淪むことを豫想して、氣の毒さに堪へぬといふ。全く純なる人情美の極致を發揮したといつてよからう。死ぬるわれよりもといふべきを、「別るゝ魂よりも」と轉義したのが、いよ〳〵はかなげに聞えて、身を既に亡き物にした口吻が哀れである。結句「悲しき」は露骨の嫌ひがある。

三句、六帖にわれよりもとあるは劣つてゐる。四句も、同書に人ぞ悲しきとある。

やまひに煩ひ侍りける秋、心地たのもしげなく覺えければ、よみて人のもとに遣はしける　大江千里

もみぢ葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり

釋 ○心地たのもしげなく　快癒の覺束なきをいふ。

大意 もみぢの葉を、風の心任かせに吹かせて見るは、何時散るかも知れぬ、頼み少ないはかないことであるが、それよりも優つて、頼み少なくはかない物は、自分の命であつたわい。

評 佛教に所謂飛花落葉の聲聞觀から出てゐる。當時としては殊に珍しくもない著想かと想ふ。上句は病床から作者の見た實景で、それを湊合して、命にはかなさをたくらべたのである。

露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりを　藤原これもと

釋 ○ばかりを　ばかりなるものをの意。

大意 日頃草の葉に置く露を、はかなく消える頼み少ない物などとは、何で思つたのであらう、今から病み勞れて、何時死ぬかも知れぬ頼み少ない事を思ひまはせば、自分の身も、草の葉に置かぬといふばかりであるものをサ。

評 この種の感想は、漢書の蘇武傳に、「人生如二朝露一」、又、文選の古詩に「年命如二朝露一」と見え、金剛經の六喩に「如露亦如電」、南本涅槃經に「是壽命(中略)亦如二朝露一、勢不二久停一」と見え、支那印度を通じて、全く同一軌に出づ。もとより作者の新案ではない。只、わが身は露と殊ならぬものをなど、凡手はいふべきを、露の緣で「草に置かぬばかりを」と、警喩で婉曲に敍したのが奇妙である。

やまひして弱くなりける時よめる　なりひらの朝臣

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりしを

釋 ○つひに行く道　死をいふ。

大意 死の道は、誰れもしまひには是非に行く道ぞといふことは、かね〳〵聞いて居つたけれども、それが昨日や今日の事とは思はなかつたものを、早その時が來て、行かねばならぬ事かまあ。

評 生ある者は必ず死す。これは專らいひ觸れた事だから、「かねて聞きし」とはいつた。死ぬることを「遂に行く道」とは婉曲な措辭である。「きのふけふ」は昨日は知らずに過ぎた事だから、道理のうへからは、けふあすといふべきだが、實はこの頃とは思はざりしをの意を、具體的に轉義したのだから更に差支はない。いや却つて昨日といひ副へたのは、いたく末期のはや過去になりさうな程にさし迫つた趣が躍々として、感慨が深い。流石に一代の才人が最後の嘱吐だけあつて、刻せず劃せず、偶然にこの絶調を成した。自然の聲、純眞の響である。

甲斐の國に、あひ知りて侍りける人とぶらはむとて、まかりける道なかにて、にはかに病をして、いま〳〵となりにければ、よみて、「京にもてまかりて、母に見せよ」といひて、人につけ侍りける歌　ありはらの滋春

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今はかぎりのかどでなりけり

釋 ○甲斐の國に云々　甲斐に居る知人を訪ねようとて下つた途中で、急に煩ひ付いて、臨終の期に迫つたのでこの歌を詠んで、「京に持つて歸つて自分の母に見せてくれ」と人に賴んで託した歌との意。滋春は、業平の次男で、母は右大臣藤原良相公の女、染殿ノ内侍とある。この詞書、一本には、「甲斐の國にまかりて、身まかりける時よめる」とある。○ゆきかひぢ　往反道（ユキカヒヂ）といふを、甲斐路（カヒヂ）に寄せた。

大意 甲斐の國へ行くこの旅を、つい一寸した往き來の道とサ思つて、出て來ましたわ、然るに只今となつては、これがこの世の門出で御座りましたわい。

評 こんな事とは思ひ掛けなかつたがの餘意がある。他國他鄕の旅の空をさすらうて、他人の手に死なうとする。故鄕の慈母の膝下がまづ慕はれて、假初の門出が死別の門出となつたことを悔恨し、遙かに永訣の情を敍べた。事態頗る悲慘である。かうした際に、甲斐路の秀句の如きは、あまりに眞劍を缺いて感心しない。

大和物語に、

この在次君、在中將の東に往きたるけにあらむ、この子どもも、人の國通ひをなむしける。心ある者にて、人の國の哀に心細き所々にては、歌よみて書付けなどしける。（中略）かくて、人の國ありき〳〵て、甲斐の國に到りて住みける程に、病して死ぬとて詠みたりける、

と見え、この歌が擧げてある。事情は大抵そんなものであつたらう。

古今和歌集巻第十七

雑歌上

題しらず　　よみ人しらず

わがうへに露ぞおくなるあまの川とわたる舟の櫂のしづくか

釋 ○雑歌　ザウノウタ、又、クサ〴〵ノウタと訓む。序文に、「春夏秋冬にも入らぬ、くさ〴〵の歌を選ばせ給ひ」と見えて、四季、戀、賀、別離、羈旅の部に入れにくいのを收めた。○題しらず　伊勢物語には、「昔男京をいかゞ思ひけむ、ひむがし山に住まむと思ひ入りて、云々。かくて物いたく病みて死に入りければ、おもてに水洒ぎなどして、息出でて」と詞書して、この歌を擧げた。○とわたる　門渡るの意。門はこゝでは天の川の川門(カド)をいふ。川門は川岸が迫つて、水瀬の一つに流れる處である。○しづくか　「か」は疑辭。

大意　自分の體のうへに、思ひがけず露がサ置いたわ、これはあの空の天の川の渡しを渡る舟の、櫂の雫か知らぬ。

評　契沖いふ「この歌のつゞきは、皆、歡ある歌のたぐひなるを、その始に出せるをもて思へば、七月七日の夕べ

思ひがけず内宴に召されて、祿など賜りし人の御惠のかゝれるを、かく寄せたるにや」といひ、景樹は「この歌の調、いとはかなければ、歡喜の情もて詠めるものならじ。勢語に、面に水洒ぎたるとある、いと似つかはしく聞ゆ。さる傳などありて、それを飾りて作れるも計り難し」といつた。熟ら思ふに、この歌、ア列の開口音が多くて、聲調が頗る花やかであるから、決して景樹のいふやうなものではない。勢語の傳說はわざと表裏に作爲した事が多いから、もとより信ぜられない。よつて假に契沖說に從つておく。「わがうへに」は、天の川の櫂の雫の洒ぎかゝるに恰好の措辭である。袖になどいつては、部分的になつてふさはしくない。落想は奇拔、體格はまた雄渾である。萬葉卷十、

このゆふべふりくる雨は彥星のはやこぐ舟の櫂のちるかも

はこの同想同型である。

○

思ふどちまとゐせる夜は唐錦たゝまくをしきものにぞありける

釋 ○まとゐ　團欒の義。○唐錦　支那より舶載した錦。蜀江の錦、東京錦などをさしたのだらう。「たゝまくをしき」の序に用ひた。○たゝまくをしき　錦は貴重な織物なので、裁斷するのは勿體ないものだから、裁たまく惜しきといひ、それに起たまく惜しきとかけた。「まく」は未來の助動詞のむの延言。

大意　かう心の合つた友達同志うち寄つて、語り合つて居る夜は、唐錦の裁つのが惜しいやうに、座を立ち去らうとすることが、惜しいものでサあつたわい。

評 平凡の想ではあるが、眞實の語である。わづかに「唐錦たゝまくをしき」の剪裁によつて、一首に光彩を生ずる。唐錦は舶載の織物で、後世でも一寸四方を坪と稱して、兩値で賣買したほどだから、當時ではその貴重さが思ひやられる。そこで「裁たまく惜しき」の譬喩が頗る適確になる。

○

うれしきを何につゝまむから衣袂ゆたかにたてといはましを

釋 ○袂ゆたかに　「ゆたかに」はゆつたりとの意。

大意　このやうな嬉しいめを、何に包まうぞ、小さいこの袂には、なか〳〵包まれる事ではない、かうと知つたら、裝束の袂をもつと大きくゆつたりと裁つてくれと、誂へようであつたものをサ。

評 無形の感情を有形に取り扱つて、何に包んだらよいかと躊躇する稚愚の想は、既に詩である。まして況や、「袂ゆたかにたて」の痴呆はいよ〳〵出でて、いよ〳〵面白い。常識からいへば袂ゆたかに裁つたからとて、包まれる譯のものでない。蓋し躍るばかりの嬉しさをつゝみかねる事から出發したので、「つゝむに人目を憚む意と物を包む意との兩意をもたせて剪裁してある。その包むから更に袂を撮合した。景樹が「昔は袖の尺いと長ければ、何くれに用るしなり、今の不用の類にあらず、故に包むといへば、袖の事とをれるなり」といつたのもよい。但長いのは袖だけではない。ゆきである。又、「初句をうれしさをと、體言にいふべし」といつたのは拘はつてゐる。

○

限りなき君がためにとをる花はときしもわかぬ物にぞありける

ある人のいはく、「この歌は、さきのおほいまうち君のなり」。

釋 ○伊勢物語に、「昔おほきおほいまうち君と聞ゆるおはしけり。仕うまつる男、長月ばかりに、梅の作枝に雉をつけて奉るとて」と詞書して、この歌を擧げた。○限りなき　壽命の限りなき。○ときしも　時しも。「し」は強辭、「も」は歎辭。

大意 御壽命の限りない君に、さし上げませうと思つて折る花は、流石に何時といふ時節の分ちも無しに、咲くものでサありましたわい。

評 御壽命の限りもない故に、花も時節の限りなしに何時も咲くといひ、こんな奇蹟も皆君の御勢ひゆゑと讃へ奉つた。反り咲の花などを折つて、御門、或はわが主君などに奉つたのであらう。勢語の詞書によれば、「ときしも」に、雉を隱してある譯だが、例の作物語だから、それでこれを說いては却つて間違ふ。

六帖には、形見の題に收めて、二句君が形見にとある。勢語には、初句わが賴むとある。左註は、勢語によつて後人の書き添へたものだらう。この集に、「前のおほきおほいまうち君」とあるは忠仁公藤原良房なので、これをも忠仁公の作とするは、左註に泥んだものである。

○

紫のひともとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る

釋 ○武藏野　武藏の國中央の大平原、紫草の產出を以て名高かつた。紫草のことは、戀三「戀しくば下にを思へ紫の」の條に既出。○みながら　皆ながらの略で、悉皆の意。

大意 色深い紫草の一株を、あはれなつかしい物と思ふ爲に、その緣にひかされて、限りもない廣い武藏野中の草が、皆殘らずあはれになつかしいとサ思ふわ。

評 全然諷喩らしい。すると、わが愛する妻一人ゆゑに、そのゆかりの人は、悉くなつかしく思はれるといふ裏面の意が出てくる。武藏野には數多あるべき紫草を、必ず「一本」といつたのも、この意をたしかに强く表現する爲の手段と見えた。「武藏野の草は皆がら」は誇張で、ゆかりの者は盡くの意を、强く印象させたい爲である。さて、この歌よりして、紫を、「ゆかりの色」といひ慣つた。

妻のおとうとをもて侍りける人に、うへのきぬを贈るとて、よみてやりける　なりひらの朝臣

紫のいろこきときはめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

釋 ○妻のおとうと云々　妻の妹に連れ添つてゐる男に、袍を贈るとて詠んでやつた歌との意。「妻のおとうと」は、妻の妹をいふ。おとうとは乙人の義で、男女ともに齡の劣つた者にいふべき語である。「うへのきぬ」は袍である。袍は朝服で位階に應じて服色の制があつた。伊勢物語の詞書には、姉の夫を貴人、妹の夫を卑しい者とし、師走の晦日に、妹は手づから夫の袍を洗濯したが、慣れぬ事とて袍の肩を張り破り、せむ方なしに泣いて居たのを、姉の夫が聞いてあはれに思つて、位に合つた緣袍を贈つてやるとて、この歌を添へたとある。

○めもはるに　見えも遙かにの意。見えの約「め」である。

大意　紫草の花の色濃く咲く時は、見渡し遙かに野にある草木までが、おなじ野にある物と思ふせゐか、差別もなくなつかしいわ、といふが表面の意で、古歌に、「紫の一本ゆゑに云々」と詠んであるが、いかにもその通りで、私も妻一人を思ふ心が深い時は、それにひかされて、そのゆかりの人は誰れでも皆サ、妻同前にかけ隔てなしに、大切に存ぜられますわ、といふが裏面の意。

評　まして貴方はおなじ由緣でもごく近いお方だから特に懇切に存じますので、失禮を顧みずこの袍をお贈り致しますの餘意がある。「野なる草木」とあるので見ると、この袍は綠色であつたらしい。妻の寵愛の深いのを紫の色濃きに喩へて、上の「紫の一本」の歌の意を下に踐んで仕立てた。必ず紫草の生えてゐる武藏野の實景に對しての歌とは思はれない。

又いふ、必ず勢語の所說の如くならば、姉の夫は四位以上の人で、その服色は紫なので、「紫の色こき時は」といひ、妹の夫の六位の綠袍をよそへて、「野なる草木」といつたとも見られる。

大納言ふぢはらの國經の朝臣、宰相より中納言になりける時に、染めぬうへのきぬの綾をおくるとて　近院右のおほいまうち君

いろなしと人や見るらむ昔よりふかき心にそめてしものを

釋　○大納言ふぢはらの國經云々　藤原國經が、宰相より中納言に昇任したのは、寛平六年五月五日である。「宰相」は參議の唐名、「染めぬ云々」は袍の料に白綾を贈るとて、この歌を詠み添へたとの意。○いろなし　色相のない意に、物の風情やおもむきなどのないのをいふ色なしの意を寄せた。

大意　これは白綾だから、何も色がなくて、風情のないやうに、貴方は思ひなさらう、しかし私は以前から、貴方に大層深切な志を深く染めて置いた、この綾であるものを、不興には思つて下さるな。

評　袍の料にすべき白綾を贈つたのは、官途昇進のお祝なのである。位色相當に染めて贈つてもいゝけれども、色の染めあがりがむづかしくて嗜しかつた時代だから、その家々の好みに任せる爲、白のまゝで贈つたと見える。それに就いては何とか一言の挨拶せねばならぬので、この歌が出來た。色の有無に對して、志の淺深を反對にかけ合はせた構想は、語言の技巧に多く傾いてゐる。

いそのかみの並松が、宮づかへもせで、石の上といふ所にこもり侍りけるを俄かにかうぶり賜はりければ、喜びひ遣はすとて、よみて遣はしける　ふるの今道

日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里の花も咲きけり

釋　○いそのかみの云々　石上の並松が仕官もせずして、大和の石上に籠つて居たが、急に五位に敍せられたに就いて、賀詞をいひ遣るとて詠んだ歌との意。「かうぶり賜はり」は敍爵とて、五位に敍せられるをいふ。三代實錄に、「仁和二年正月五日、授二從七位石上朝臣並松從五位下一」と見えた。○やぶし　「やぶ」は藪である。草深き處をいふ。今、筆をさしてのみいふは轉つたのである。「し」は强辭。

大意　日の光は、どのやうなる草深い藪原をもサ、分け隔てなしにお照らしなされるから、石上の荒れてさびれてしまつた里にも、流石に春が來て、花も咲いたわ、といふが表面の意で、お上のお惠は、何處までもサ行き渡つて、分け隔てが無いから、世に舊された貴方のお身の上にも、名譽の花が咲きましたわ、といふが裏面の意。

評　單に表面の意のみで味ふと、やはり理筌に着する嫌ひがあるが、譬喩の巧はそれを償つて餘りがある。比喩渾然として、斧鑿の痕もないのは老手である。新撰姓氏錄に據れば、布留氏は宿禰姓で、布留の神主である。その族人として、當時造酒正（ミキノカミ）たる作者は、同鄕の好に並松の昇敍を賀したものと思はれる。從七位下は過分の越階で、しかも仕官もしてゐなかつたとしたら、實に不思議な昇敍としか思へない。何か特殊な功勞があつたには相違ないが、しかし天恩の辱さは如何にしても感謝せずには居られぬ。今道同鄕人を以てこの喜を賀するに、措辭まことにその體を得てゐる。

二條の后の、まだ東宮のみやす所と申しける時に、大原野（オホハラノ）

にまうで給ひける日よめる　　なりひらの朝臣

大原やをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいづらめ

釋　○二條の后の云々　二條の后がまだ女御で、東宮の御生母の御息所と仰しやられた時に、大原野の神社に御參詣遊ばされた日よんだ歌との意。「二條の后」は淸和天皇の女御藤原高子である。「大原野」は山城國乙訓郡。「まうで給ひ」とは、閑院左大臣藤原冬嗣が、氏神春日の社が大和の遠地にあつて、氏の婦人達の神拜に不便なのを憂へ、この地を相して、春日の神を勸請し、文德天皇の仁壽元年から祭儀が始つて、藤氏の后妃は必ず行啓があつた。二條后の大原野詣は、同后の東宮の御息所と稱せられた貞觀十一年から同十八年までの間であらう。伊勢物語には、「昔、二條の后の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神に詣で給ひけるに、近衛司にさむらひける翁、人々の祿給はりける序に、御車より給はりて、詠みて奉りける」との詞書がある。○大原やをしほの山　「をしほの山」は、大原野の神の鎭座しましましてゐる小鹽山。○神代の事も　古事記に天照大神の御孫邇々藝尊（ニニギノミコト）の天降（アモ）ります條に、「爾天兒屋命云々、幷五伴緒矣支加而天降也（セノヲクマリクハヘテ）」と見え、日本紀、古語拾遺にも天つ神の御孫のこの國にお降りなされた時、輔佐なされた神の中では、天兒屋命が特に重臣であつた趣が見える。この天兒屋命は、卽ち春日の祭神の一つで、卽ち藤原氏の祖先である。

大意　かやうに、御子孫の藤原氏の御息所が、東宮の御母儀として御參詣あるなれば、この大原野の小鹽山に御鎭座あらせられる氏の御神も、かの神代に天照大神から、天孫を輔佐すべき勅定を承つた昔の御事も、何時はともあれ今日こそは思し召されて、御滿足に思はれるで御座らう。

評　作者は近衛司として今回の行啓に際し、路次の警固に候うたものと思はれる。嚴肅な行粧を引き繕つて、小鹽の社頭に東宮の御母儀たる盛儀をつくされる。誰れしもこの際この時に、直覺的に藤氏の祖神と御息所と皇室との關係を思ひ寄り、深い感慨に打たれぬ者はなからう。作者も全くその一人であつた。只その感想を敍するにあたり、一轉語を下して、祖神の意中から捻出したことは、やはり尋常でない。しかも「をしほの神もといはず、「山も」と轉義して、「思ひ出づらめ」と擬人した修辭の巧を加へたのは、自在な口吻である。「山も」はわが神代の事を思ひ出づるに對へ、「神代の事も云々」は眼前の盛儀に滿足するに對へたのである。眞淵は、「い

と安らかにめでたし」と評した。舊説の、勢語に據つて、「山も」は二條后を喩へた物とし、作者と密事のあつた昔の事を思ひ出すだらうといふ意に解いたのは從ひ難い。勅撰の集に恐れ多くも、御息所密通などの隱事を歌つたものを掲ける筈がない。勢語の方は、もとより傳説から生まれた一場の作話である。

三句、大鏡にはけふよりは、六帖にはけふしこそとある。又勢語には、四句神代の事を、同塗籠本には、二句をしほの松もとある。

五節の舞姫を見てよめる　　よしみねのむねさだ

あまつ風雲のかよひぢふきとぢよをとめの姿しばしとゞめむ

釋 ○五節の舞姫　五節の舞姫は、陰暦十一月中の丑の日、豐明節會に臣下に酒饌を賜はる儀式があつて、その時行はれる女樂である。舞姫五人或は四人、公卿國司などより美しき少女を奉つて、御前に舞はせる。後には大嘗會の時のみに行はれた。續日本紀　天平十五年五月、橘諸兄の太上天皇に傳奏し給ふ詔に、「天武天皇、禮樂なくしては世を治むる事缺けたりとて、この舞樂を作らせ給ふ」とある。政事要略に、「五節舞者、淨御原天皇之所レ制也、相傳曰、天皇御二吉野一、日暮彈レ琴有レ興、俄爾之間、前岬之下、雲氣忽起、疑如二高唐之神女一、髣髴應レ曲而舞、獨入二天闕一、他人無レ見、舉レ袖五變、故謂二之五節一、其歌曰、平度綿度茂邑度綿方備須茂可良多萬乎多茂度邇麻岐氐乎度綿左備須茂」と見え、三善清行の意見封事にも、「按二舊記一、昔神女之來舞、云々」とあるから、神女が五變の舞を象るといふが、古い傳説であらう。宣長いふ「この古傳説は、古事記に、雄略天皇吉野に行幸して、吉野川の濱に美麗なる童女にあひ給ひ、御みづから御琴を彈じて、そをして舞はしめられし事見えたるに據りて作れるものならむ」と。五節の義については別に音樂上からの説がある。○雲のかよひぢ　雲の中の通路。

大意　空を吹く風よ、あの天女が歸り上らうとする雲の中の通路を、雲を吹き寄せて塞げてくれい、さうして、あの面白い天女の舞姿を、もうすこしの間なりとも、留めて置いて見ようわ。

評 五節の舞の古傳説によつて、丁度所がらが禁中で雲の上の稱があるので、今の舞姫を直にその天女と看なし、その舞ひ果てゝ引つ込まうとする名殘を惜んで、「雲路を吹き閉ぢよ」と天つ風に命令した比興は業平朝臣の、

あかなくにまだきも月の隱くるゝか山のは逃げて入れずもあらなむ

と共に、同巧異曲の妙作である。殊に五節は四五日連續した宮中の大宴會で、舞姫はいづれも未婚の少女の器量よしを擇んだものだから、當時の若殿原は勿論上達部までも、血道をあげて夢中になつたものである。作者宗貞もその一人で、黑酒白酒の醉心地に、舞姫の姿に見とれて恍惚としてゐるさまが思ひ遣られる。色卽是空、これが法德四海に遍照した花山僧正の前身と觀ずると、更に一段の面白味が加はる。

五節のあしたに、かむざしの玉の落ちたりけるを見て、たがならむと、とぶらひて上によめる　　河原の左のおほいまうち君

主やたれとへど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

釋 ○五節のあした云々　五節舞のあつた翌朝、舞姫の簪の玉の落ちてあるのを見て、これは誰れの物だらうと落し主を尋ねて詠んだ歌との意。○いはなくに　いはぬにの延言。○あはれ　可憐の意で、いとしいと思ふを

いふ。

大意　この簪の白玉の落し主がなつかしさに、これの主は誰れぞと、簪の白玉に問ふけれど返辭をせぬによつて、それならばいつそ、夜べの舞姫を、誰れ彼れといふ事なしに、總體にあゝかはゆいと思はうかな。

評　五節の最終夜は、舞姫はなほ常寧殿中の五節所に泊り込んでゐる。作者は翌朝禁庭を立ちなして、測らずその簪の玉を拾つた。玉にその主を聞いて見たが返辭がないのでといふのは、實は舞姫等に尋ねても、いづれも若い娘の事とて羞かしがつて、それは私のといふ者がなかつたのを喩へたのである。詞書の「とぶらひてよめる」は、その經過を說明してゐる。「なべてやあはれと思はむ」の狂痴がこの生命である。「さらばなべてや」の頓挫の筆法も面白い。

寛平の御時に、うへのさぶらひに侍りけるをのこども、瓶を持たせて、きさいの宮の御方に、「大御酒のおろし」と、きこえに奉りたりけるを、くら人ども、わらひて、瓶をお前にもていでて、ともかくもいはずなりにければ、使のかへり來て、「さなむありつる」といひければ、くら人の中におくりける

としゆきの朝臣

玉だれの小がめやいづらこよろぎの磯の浪わけおきに出でにけり

釋　○寛平の御時に云々　寛平の御時代に、殿上に詰めて居た殿上人達が、酒瓶を使ひ持たせて、后の宮の御方へ、「御酒のおさがりを下さりませ」と申し上げたのを、女藏人共がその瓶を后の御前に持ち出しながら笑ひこけて、折角の口上を何ともいはずにしまつたので、使が立ち歸つて來て、しかくと復命したものだから、その女藏人の中にいひ送つた歌との意。「寛平」は宇多帝の御代の年號。「うへのさぶらひ」は清涼殿の殿上の間、「きさいの宮」は皇后藤原溫子。「大御酒のおろし」は大御酒の下しで、御酒のおさがりといふこと。「ときこえに」のあたりは誤寫があらう。顯註には、きこひにとある。きはを文字の誤寫で、大御酒のおろしをこひにとあつたのであらう。それでこそ事狀も明らかに、歌の趣にも協ふ。「くら人」は女藏人をいふ。皇后宮の御方に侍ふ卑い女官である。○玉だれの小がめ　「小がめ」は小瓶で、小龜を寄せた。眞淵いふ、「玉簾の緒と續けたる枕詞なり。されば、小がめは小がめと訓むべし」と。顯註には「玉だれとは小瓶をいふ。瓶の上に塗りたる物の、玉のやうにさがりたればいふ。玉だれのみすとも續くるは、玉すだれとて、玉を貫きても簾には懸くれば、玉を垂るといふなり」と。清水光房は、玉簾の鉤とかけたので、玉垂の小瓶、玉垂の小簾と訓むべしといつた。鉤は簾を捲き上げた時かける曲つた金物である。諸證本及び六帖にコガメとあるから、光房說に隨つておきたい。○いづら　どれどこに。○こよろぎの磯　小洶の磯で、相模國中郡。今の大磯小磯邊の古名。○おきに　沖に置きにをかけた。

大意　先程の小瓶はサどれ何處にあるぞと、使の者に問へば、風俗の謠物にある小瓶とは違つて、小瓶といふ小龜は、小洶の磯の浪を分けて、存外に沖に出てしまつたわい、卽ち后の宮の御前に置きにサ。

評　瓶など持たせて、后宮の御方に大御酒のおろしをひに遣はすは、若殿上人等が、女藏人に向つての打解け業

で、内證の事である。されば后宮の御前に、女藏人がその小瓶を持ち出したのは、殿上人等の意外とした所であらう。卽ち風俗の謠物なる、

多萬多亂乃、乎加女乎奈加仁須惠天、阿流之者毛也、佐加奈末幾二、佐加奈止利仁、己由流木乃、伊曾乃和加女加利阿介二。

を捉へ來つて典據とし、かの小瓶は主客の中に据ゑられたが、この小瓶は飛んでもない后の宮のお前に置き放しになつたといふ事を、小龜が沖遠く出でたよ、と秀句を以て洒落れたのである。玉垂の風俗は、當時誰れも知つてゐる謠物だから、この機智頓才は大喝采を博したらしいが、もと〳〵語言の巧で、興味は索然としてゐる。結句、千秋が田中道麿の說によつて、「けり」をけむの誤寫だらうと定めたのはわるい。意釋を見て承知されたい。

二三の句、六帖にこがめはいづらこゆるぎのとある。

女の見て笑ひければよめる　けんげい法師

かたちこそみ山がくれのくち木なれ心は花になさばなりなむ

大意　女中達よ、さうお笑ひなさるな、この通り形こそ見る影も無い、深山の奥の朽木のやうではあれ、しかも心は花にしようならば、花にもならうはサ。

釋　馬鹿になさるなよの餘意がある。古木倚二寒巖一、三冬無二暖氣一の消極的禪とは異なつて、一道の春風が常に心頭に存するのは、この作者なか〳〵只の凡でない。「朽木なれ」の隱喩、及びその緣で、心は美しくといふべきを、「花に」と轉義した對映、意箇に詞約やかである。「なさば」の一語大いに深味がある。すればなる、然し求めない、自然の結果に放任しておく。そこに枯淡の眞味がある。作者はいよ〳〵達者である。

方たがへに、人の家にまかりける時に、あるじのきぬを著せたりけるを、あしたに返すとてよめる　きのとものり

蟬のはのよるの衣はうすけれどうつり香こくも匂ひぬるかな

釋　○方を違へに或人の家に往つて泊つた時に、主人の著物を夜の掛物にしてくれたのを、翌朝歸るに當つてそれを返すとて詠んだ歌との意。「方たがへ」は源氏物語河海抄に、「金櫃經云、天一立二中央一、故號二中神一、賊、件方、古來所二違來一也」と見え、この中神は日毎に巡行するから、また一夜めぐりの神ともいふ。物へ行かうとする時家へ歸らうとする時など、その方角がこの神の塞りの方だと、一夜他家に假寢して歸る、これを方違へといふので、中古の習俗である。○蟬のはの　蟬の羽の如きの意。○よるの衣　夜著をいふ。

大意　昨夜拜借したこの衣は、時節がら蟬の羽のやうに薄いけれど、移香が濃くまあ匂ひました事よ。

評　時はこれ夏であらう。かくその餘香を賞愛するのは、卽ちその人柄を稱へて、その親切を感謝する所以である。立意が理窟なうへに、「濃き」と「薄き」との對照が、餘りに露骨親粘に過ぎて、却つて淺膚を感ずる。

題しらず　よみ人しらず

遲くいづる月にもあるか山のはのあなたおもても惜むべらなり

釋 ○あるか　「か」は歎辭。

大意　待てども〳〵、遲く出る月でまあある事よ、これを思ふと、此方でかう待つやうに、あの東の山のあちら面でも、山へ入るのを、人が皆惜むさうなわい。

評　この著想は地平説の行はれた昔時においては、實に破天荒の没理想であつた。今日は既に學理上立證されて、空想ではなく事實となつてゐるから、詩味は一半を減ずる心地がする。けれども、なほ月が人に惜まれて、その運行を躊躇する有情の取り成しは、詩としての價値を十分に存してゐる。全く月に愛を傾倒してゐる人の言で、いひ知らぬ情味に滿ちてゐる。四句の「も」は、わが月出を待つことを本としての辭である。二句、六帖、及び新撰和歌に月にもあるかなとあり、また六帖の再出のには、三句以下山のはのあなたの里もをしむなるべしとある。本文のに比すれば大いに劣る。

○

わがこゝろなぐさめかねつ更科やをばすて山にてる月を見て

釋 ○更科やをばすて山　信濃國更科郡にあり。姨捨山と書く。その所在については煩はしく説がある。

大意　自分の心が、何となく物悲しくなつて、慰めかねたわ、この更科の姨捨山に照る月を見てサ。

評　遊子秋月を姨捨山に見る、折柄處がら、その境遇と相俟つて、この愁思が催したものだらう。「てる」の語が眼目である。なまじなまなかさやかな光の爲に、感哀はいよ〳〵そゝられてならぬのである。敍述は極めて單純で、技巧も何も用ひないが、詠歎の味ひが永い。姨捨の名によつて解いた説もあるが、諾ひがたい。大和物語に、「この山に、姨を捨て置きて歸るとて、朔が詠める」とて、この歌を擧げてあるが、記事の意と歌の意とは矛盾してゐる。のみならずこれはもと、雜寶藏經の棄老國緣第四に見えた印度の傳説を、わが國の事めかして作り設けたるものと思はれる。令の集解に、信濃の古俗に老人を捨てる事があつたとあるも、皆この誤を傳へたので、信じられない。

おほ方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの　　なりひらの朝臣

釋 ○伊勢物語には、「昔いと若きにはあらぬ、これかれ友達ども集りて月を見て、それが中にひとり」と、詞書がある。○おほ方は　大概の事ならばの意。○これぞこの　「これやこの」などの類で、「この」は下の「老」といふ語に跨續する。○なるもの　の下、なりけるが略かれてゐる。

大意　月は面白い物であるが、大概の事には、さうその月も餘り賞翫すまいわ、なぜなれば、この月をめでることがサ、段々とたび重なると、何時か光陰が經つて、この人間の老となるものであつたわい。

評　一年の盈虛を數へると幾何もない。これ月に狂し月に執して、老のまさに到らんとするをも知らぬ所以である。その詩的生活は眞に羨ましい。ふとわれから二毛の白いのに愕いて、「月をもめでじ」といふ。必ず月は老に關し、老は月によつて催されるものとした没理想の構想、これこの作者が擅場である。「大方は」となほ微溫的の語を冠せてゐる處は、作者が月に對しての未練執着を語るもので、理窟らしく強い事はいつても、風流情味に勝ち得ない處が頗る面白い。あゝこの作者は、よく花に狂し月に狂し、女に狂し世に狂してゐる。彼れは

全く熱血の男兒である。結句のいひさし、體調勁健の素を成してゐる。

初句、勢語の眞字本に大方のとあるを、眞淵は采つたがわるい。結句、家集には老といふものとある。

月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによめる　紀貫之

かつ見れど疎くもあるかな月影の到らぬ里もあらじと思へば

釋 ○月おもしろし　月がいゝといふに當る。○かつ　片一方の意。

大意 あの月を片心ではめでて見はするけれども、疎くまあ思はれる事よ、なぜなれば、あの月の光は、此處ばかりに心あつて照るのではなくて、何處もかも行き渡らぬ處もあるまいと思へばサ、といふが表面の意で、躬恒の來たのを親切には見るけれども、一方には疎くも思ふ事よ、なぜなれば、面白い月故に來たのだから、月の照るかぎりは、躬恒の往かぬ處もあるまいと思へばサ、といふが裏面の意。

評 月を躬恒に擬へての諷詠である。詞書の「月おもしろしとて」とあるに、心を注ける必要がある。躬恒の來たのは月が主で、主人は附けたりだからと、一寸嫌味をいつてみたのは、素より親しい間柄の戯謔である。夏部に、

時鳥ながなく里のあまたあればなほ疎まれぬ思ふものから

とあると、構想が同じで、歌柄も大抵同等の佳作である。

二句、新撰和歌に疎ましきかな、四句、新撰和歌には里の、六帖、及び家集には里はとある。

池に、月の見えけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならでいづる月影

大意 月は二つ無い物で、山の端からばかり出る物と思つてゐたものを、それにまあまあれ、山の端では無い、池の水底にも出る月影よ。

評 「山のはならで」は水底に出た月と山の端に出た月とを對映させた筆法で、影の月をも實在と見たのが、この痴呆の想の好處である。秋下に、友則が、

一もとと思ひし菊をおほさはの池の底にもたれか植ゑけむ

と同型の構想で、尖新である。「月影」は月といふに同じい。影に意はない。

題しらず　よみ人しらず

天の川雲のみをにてはやければひかりとゞめず月ぞながるゝ

釋 ○みを　水脈。水筋をいふ。

大意 天の川は、下界の川とは違つて、雲の水脈で瀨が早いので、光を暫くも留めずに、月がサ早く流れて行くわ。

評 今少し光が淀めばいゝにの餘意がある。天の川の名に據つて、くだち行く月を「流るゝ」といひ、さて「雲のみをにて」と混喩を用ひた。空想に走つてや、的實でない。貫之が土佐日記に、

照る月のながるゝ見れば天の川いづる湊は海にざりける

とあるも、これらに胚胎したものか。

○

あかずして月の隠るゝ山もとはあなたおもてぞ戀しかりける

輯 ○山もと　山麓をいふ。

大意 まだ見飽かずしてあるうちに、山に障へられて、早くも月の隠れるこの西の山本では、月の入るこの山のあちら面がサ、戀しい事であつたわい。

評 上の「遅くいづる月にもあるかな」と、その場合を反對にして、同巧異曲の觀があるが、これは遙かに劣つてゐるらしい。蓋し「戀しかりける」と道破したのは露骨で、かの「惜むべらなり」と、詩的想像を逞しうしたのに遠く及ばない。

三句、新撰和歌に山里はとある。

惟喬のみこの狩しける供にまかりて、やどりけるに、歸りて、夜ひと夜、酒のみ物語をしけるに、十一日の月も隠れなむとしけるをりに、みこ醉ひて、うちへ入りなむとしければ、よみ侍りける　　なりひらの朝臣

あかなくにまだきも月の隠るゝか山のはにげて入れずもあらなむ

輯 ○惟喬のみこ云々　業平が惟喬親王の狩をなされたお供になつて、親王の御別邸に宿つて居たが、武日狩から歸つて一晩中酒を飲み話をしたが、十一日の月ももう隠れようとした折に、親王は醉うて座に堪へず、奥に引き込まうとなされたので、詠みました歌との意。伊勢物語には、惟喬親王が、年毎の花盛りには、山城國水無瀬の別業におはして、常に右馬頭なる人を供につれて遊ばれたが、河内國交野に狩して渚の院に至り、天の川を經て、再び水無瀬の宮に還られて、酒宴なされた折の事として、「還りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで酒のみ物語して、主人のみこ醉ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬の頭のよめる」と詞書して、この歌が出てゐる。○あかなくに　あかぬにのぬの延言。○隠るゝか　「か」は歎辭。

大意 面白くて見てもく〳〵見足らぬのに、入るべき時刻よりも早くまあ、月の隠れる事よ、あの月の隠れる山の端が、脇へ逃げ退いて、月を入れずにまああつてほしいわ、といふが表面の意で、この興宴の愉快の盡きぬのに、早くもまあ親王様の席を辭して、お奥にお入りなされる事よ、あのお姿をお隠し申す御簾や御帳やが無くなつて、お入れ申さずにまああつてほしいわ、といふのが裏面の意。

評 月を親王に比興したのは巧は巧であるが、さほどの高手でなくても、いへばいはれる。只この「山のはにけて」の一語は、實に超凡の大手腕である。高情の極、遂によく一切の理筌を脱し得て、こゝに天外の痴想を現じ來つた。李長吉が、「黑風吹レ山作二平地一」と作り、人麿が、「妹が門見む靡けこの山」と詠んだのと共に、豪宕の奇作である。「逃げて」の擬人、論者往々雅馴でないとして退けてゐる。所謂、駱駝を見て馬の肉腫を病むものと考へる儒、むしろ滑稽である。すこし業平朝臣の膽玉でも煎じて飲ませたい。十一日の月がはや入方になるまで夜が更けたのに、酒宴は興なほ酣に、玉山まさに頽れて、親王は殆ど座に堪へ給はず、この時、この

人、この歌があつたとすれば、情味興會は果してどんなであつたらう。紀有常親王に代つて歌ふ。おしなべて峯もたひらになりなゝむ山のはなくば月も入らじを

二句、新撰和歌にまだきにとあるはわるい。

田村のみかどの御時に、齋院に侍りけるあきらけい子の
みこを「母あやまちあり」といひて、齋院を易へられむとし
けるを、その事やみにければよめる　　あま敬信

大空をてりゆく月し清ければ雲かくせどもひかりけなくに

釋 ○田村のみかどの御時に云々　文德天皇の御世に賀茂の齋院に立たせられた慧子内親王を、その生母に過失があるといつて、齋院を罷められようとしたのを、それが中止になつたので詠んだ歌との意。「田村のみかど」とは文德帝のことで、山城國葛野郡田村に葬め奉つたのでいふ。「齋院」はもと伊勢の齋宮に倣つて置かれたもので、山城の上下賀茂の神に奉仕する齋女で、内親王を以てこれに充てる定であつた。「慧子」は文德帝の皇女である。かく慧子の齋院を廢せられる事はやんだが、しかしその後、また他の事によつて慧子が廢された事が、文德實錄にある。いはく「天安元年二月、廢二鴨齋内親王慧子一、更立二述子内親王一、遣二右大臣正三位藤原朝臣良相一於神社一、告二事由一、其事祕者、世無レ知レ之也」と。○けなくに　消えぬにの延言。

大意 あの廣い空を照つてゆく月がサ清いによつて、いくら雲が隱しても、光は消えはせぬにサ、といふが表面の意で、素より曇の無い御身は、一旦人がいろ〳〵と無き名を立てゝも、ぢきに明りが立つわ、といふが裏面の意。

評 所謂晴天白日の譬喩を、月にかへていつたまでのやうであるが、自然の景象を借りて感懷を寄せた處に、喜氣が楮表に溢れてゐる觀がある。

題しらず　　よみ人しらず

石の上ふるからをのゝ本がしは　もとの心は忘られなくに

釋 ○石の上ふるからをのゝ本がしは　「もとの」にかゝる序。石上布留のことは、夏歌「石の上ふるき都の時鳥云々」の條に既出。「ふるからをの」は「古幹斧」即ち柄の古い斧にて、本は手元の意」とは、寄居歌談にある和田正主の考である。又契沖は「布留枯小野にて布留野の冬枯れたる時をいふ」といひ、眞淵もこれに從つた。景樹は「古幹なる小野の略」といつた。又大和の地名とするは、舊註の說である。「本がしは」は景樹が、「若生に對へたる名にて、元木の柏なり。野には古木若木立ち交りて、實に然るものなり」と解したのに從つておく。雅嘉は「柏は梢の方は散りても、本の方に葉の殘りてあるものなれば本柏といひ、本の心を忘れぬといへる譬喩の序に用ゐたり」といつた。

大意 石の上ふるからをのゝ本柏のもとゝいふやうに、もとの即ち以前の貴方のお心は忘られぬにサ、さう思つて下さい。

評 秋上、躬恒の歌、

秋はぎのふる枝に咲ける花見れば本のこゝろはわすれざりけり

といふは、これを本歌として詠んだらしい。景樹いふ、「この歌、その頃もてはやして唱へたりしならむ。孫姫式に、難波津の歌と並べていへるにて知らる、その歌ざま、實にめでたければなり」と。石の上をいひ、布留をいひ、もと柏をいふ。これでもかく〳〵といふやうに、ふるい感じを跡から〳〵追かけに與へようと試みたことは、丁度「足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し」と續けたのと似てゐる。さうした程もとの心は忘られないとあるので、故舊を懷ふ情の深さが窺はれる。作者は眞實な人である。

○

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ

釋 ○野中の清水　舊くは播磨國印南野にあるといひ、十六夜日記にもさうある。又、一説には大和國布留野にありといひ、貫之集、「石の上布留野の道の草分けて清水汲みに[illegible]も歸らむ」。寂超法師、「昔見しふる野の澤のわすれ水なに今更に思ひいづらむ」。堀川太郎百首、「いにしへの布留野の道を尋ねきて清水をなほもむすびつる哉」などを證として、「布留の社は、崇神帝の時の鎮坐にて、瑞垣の[illegible]しき所なれば、昔より舊き心にいひなし來れるより、古野といふ意になして、いにしへの野と續けたるか」[illegible]後説やゝましか。但布留野の社云々は從へない。たゞ布留の野中に、いゝ清水があつて、遂に野中の清水[illegible]にいはれたのを、こゝは、その水のなかつた昔をかけて、「いにしへの」といつたとする。○ぬるけれど　温けれど。水は冷清冽なのがよいので、温いのは下である。

大意　つめたいよい水といふので名高かつた、昔の野中の清水は、今はもう生温いけれども、やはり昔の事をおぼえて居る人はサ、今でも汲んで飲むわ、といふのが表面の意で、この節衰へたけれども、以前繁昌であつた時の事を忘れぬ人は、やはり訪らうてくれるわ、といふが裏面の意。

評　昔榮えてよかつた人の詠であらう。今は世に侮りすてられたものゝ、なほ二三、故舊の情を忘れぬ人のあるのを嬉し喜んで、みづから慰藉したその衷情は憐むべきものがある。[illegible]如きは第二である。やゝ理路におちた敍述が多少殘念にもある。

○

いにしへのしづの苧環いやしきもよきも盛りはありしものなり

釋 ○いにしへのしづの苧環　「いにしへのしづ」は上代の倭文布をいふ。青と白とを織りまぜたので、今いふ縞織に似てゐる。これをシヅリとも、シドリともいふは、倭文織の義である。苧環はその倭文を織る料の絲を卷く卷子である。この「しづの苧環」を、「卑しき」の序とするに就いて、正義に引ける榎並隆璉の説に、「卷子はいやが上に卷くものなれば、彌繁といへるを通はせたるらむ」と。この説甚だ穩當である。

大意　身分のよい者ばかりでは無い、我等がやうな賤しい者でも、一度は男盛りはあつたものであるわ。

評　年寄つたとて、さのみ侮り給ふなの餘意がある。身柄卑い老人が世を慣つての作と思はれる。第二句は序である。「よきも」は只いひ添へて、調を諧へたまでの語。自負の言は、次の「今こそあれわれも昔は」といつたのと、その趣が同じである。

結句、六帖にありこしらのをとある。

○

今こそあれわれも昔はをとこ山さかゆく時もありこしものを

釋 ○今こそあれ　今こそかくてあれの略。○をとこ山　秋上「女郎花うしと見つゝぞ」の條に既出。○さかゆく　榮行くの意。

大意　今こそこのやうに、年も寄つて老い朽ちたれ、自分とても昔は男山の神威の榮行くといふやうに、一廉の男と榮え行く、若盛りの時節もあつてきたものを、あゝくち惜しいことよ。

評　清和の朝の頃の人の作であらう。老人の感懷、何人と雖もその頽齢にあたつて、この感愴を抱かぬ者があらうか。「今こそあれ我れも」の口吻は、なほ幾分の壯氣をのこして、自負の氣慨に滿ちてゐるのが面白い。この作者の若い時は、頗るの活動家でゝもあつたらう。初句を字餘りでいひ切つた強い語調、「ありこしものを」といひさして殘した餘情、皆これ無量の感慨を惹く所以である。「われも」の、もは人に對へていひ、「時も」の、もは今衰へたのに當てゝいつた。四句は、男山は山上に社殿あれば、阪行くにかけたのだといふ說もあるが、俗解である。

○

世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋とわれとなりけり

釋 ○津の國の長柄の橋　長柄の橋は戀五「あふ事をながらの橋」參看。元明帝の和銅六年に、國郡の名を二字に定めて、好名を用ゐしめられた時、津の國を攝津の國と稱せられた。けれど、うち解けた假名物や歌などには、昔のまゝに、「津の國」といつた。

大意　この世の中に、段々舊くなつて衰へ行くものは、よく〳〵思ひまはして見れば、外には無い、たゞあの津の國の長柄の橋と、自分とであつたわい。

評　老人の感懷である。文德帝の仁壽三年十月、攝津國よりの奏言に、

長柄三國兩河、頃年橋梁斷絶、人馬不レ通、請准二堀江川一置二一艘船一、以速二濟渡一、許レ之。

と見えたれば、この歌は仁壽より以前、長柄の橋梁の、いまだ斷絶しなかつた時代の人の作であらう。なほ思ふに、「頃年云々」とあるから、橋梁の腐朽も年久しいことで、當時物の舊い例には、いつもこの橋をいひならしてゐたらしい。よつて、「われ」の對比に、この橋を取り出して、聽者の記憶と聯想とを喚び起し、彼の事態を借りて、我が感愴を映帶せしめた。蓋し作者の巧手段である。長柄に存在の意を寄せたとする說もあるが、穿鑿に過ぎる。

○

さゝの葉にふりつむ雪のうれを重み本くだちゆくわが盛りはも

釋 ○さゝ　小竹。○うれ　末。今うらといふ。○くだち　くだりの古言。○はも　歎辭。

大意　笹の葉に降りつもる雪が、笹のうらの方が重さに、しなひ靡いて、その爲に本の方のが段々にさがつて行くが、まづそのやうに段々に傾いてゆく、自分の若盛りであるはまあ。

評 四十に近い人などの、老の將に來らうとするに對する述懷であらう。四句までは序である。「くだちゆく」に非常に手數をかけた敍述である。抑も笹の葉が雪の重みでさがつてゆくのは、おひ〳〵段々で、その急激でない經過が丁寧に映出され、作者の年盛りも、いつか知らぬ間に過ぎ去つた趣がよく表現されてゐる。初二句、一本にわが宿の竹の白露とある。結句、六帖にわが心かなとあるは一向に聞えない。

○

大あらきの森の下草おいぬれば駒もすさめず刈る人もなし
又は、櫻あさのをふの下草おいぬれば

釋 ○大あらきの森　萬葉卷十一に、「大荒木の浮田の杜」とあるも同處か。神名帳に、大和國宇智郡荒木神社がある。そこの森か。能因歌枕には、「山城國にあり、尤もあらはなる森なり」とある。○すさめず　「すさむ」は進むこと。○左註の「櫻あさ」は、櫻の色した花のさく麻とも、櫻の花の色に似た麻ともいつて一決しない。「をふ」は麻生で、麻畑をいふ。

大意 大荒木の森蔭の草も、盛り過ぎてからは、馬も喰ひたがらず、又刈る人も無いわ、といふが表面の意で、人もこのやうに年が寄つてからは、皆厭がつて、寄りつく人もないわ、といふが裏面の意。

評 大荒木の森を取り出したのは、作者の住んでゐる附近なのであらう。草も馬にすさめられぬとなつては、はや論外で、傷心の語である。「老いぬれば」の擬人は、直に作者の老境を想及する楔子となる。四句で意は完結してゐるのに、五句を更に歌ひ添へたので、その漸層の反復に詠歎の意が力強く表現される。

作者を、六帖に小町とあるが、更にかの娘子の風調でない。しかも、婦人の口氣でない。櫻あさ、六帖には櫻麻とある。

○

數ふればとまらぬ物をとしといひて今年はいたく老いぞしにける

釋 ○とし　疾しに、年を寄せた。

大意 よく數へて見れば、暫時もとまらずに過ぎ去るものを、疾いといふ名の年といふので、忽ちの間に、今年は存外にひどく年寄にサなつたわい。

評 あまり說明的でつまらない。

○

おしてるや難波のみつにやく鹽のからくも我れは老いにけるかな
又は、大伴のみつの濱べに

釋 ○おしてるや　難波の枕詞。「おしてる」は、襲ひたてるの約で、波の高く寄せて立つをいふ。難波は、神武紀にある如く、浪の速い處だつたので、「おしてる波」と續けた。○難波のみつ　「みつ」は御津の義。官船の出入する津なので、貴んでいつた。○左註、「大伴の」は御津の枕詞である。古語に、才德勇威のあるのを、稜威又みづといつた。古事記に、「みづ〳〵し久米の子らが」とあるがそれである。往古大伴氏は武勇の家柄で、み

づく〳〵しいといはれたので、大伴の御津と續けたのだらう。

大意　あの難波の御津でやく鹽は辛いものであるが、そのからくも卽ちつらくもまあ、自分は年が寄つてしまつたことよ。

評　三句までは序である。當時難波の製鹽は著名なもので、これを序としたことは、「からく」の印象を與へるに好都合な表現であつた。四句の促調は詠歎を深刻にする。

二句、六帖に難波の浦にとある。又、和歌九品に荒汐の汐の八百會にとあるは意が通じない。

○

おいらくのこむと知りせば門さしてなしと答へてあはざらましを

この三つの歌は、昔ありけるおきなのよめるとなり。

釋　○おいらく　賀、業平、「櫻花ちりかひくもれ」の條に既出。

大意　この老といふものが、自分を尋ねて來ようといふことを、早く知りもしたならば、門をしめて置いて、留守といつて、逢はずに居ようであつたものを、さうしたならば、このやうに年も取るまいに。

評　昔でも老のくるといふ擬人の辭樣は、殆ど平語の如くに使用されてゐたものだらうと思ふ。それを修辭上の本義にたち返つて、ます〳〵敷演誇張して、「門さしてなし」とまで、居留守を使ふ場面を展開した狂痴の想は覺えず破顏される。業平の「櫻花ちりかひくもれ」の歌よりは、やゝ古い頃のものか。さうしたら、これを據として、業平は「來むといふなる」と取り成したと見てよい。

左註は、もとより信ずるに足りない。

○

さかさまに年も行かなむとりもあへず過ぐる齡やともにかへると

大意　月日がまあ、逆にあとへいつてもらひたい、何する間もなく經つて行く齡がサ、その月日と一所にあとへ戻つて、若がへるかと思へば試にサ。

評　あとへ年を取りたいとは、よく人のいふことである。しかし、當時では尖新の語であつたかも知れない。

○

とりとむる物にしあらねば年月をあはれあなうと過しつるかな

大意　月日のたつのは、取り止められる物でサないから、仕方がなさに、あゝさて憂いことぞと、歎きながら過したことよ。

評　あきらめ切つたやうで、なほあきらめ切らぬ歌である。

○

とゞめあへずうべもとしとはいはれけり しかもつれなくすぐる齡か

釋　○とし　疾しに、年を寄せた。○か　歎辭。

大意　年のたつのは早くて、止めようと思つても、止める間もない、道理でまあ疾しといふ名をつけられたわい、それは仕方が無いとしても、そのうへにまあ年につれて、氣強く過ぎてゆく自分の齢であることよ。

評　年ゆゑには、重ね〳〵難儀な目を見る趣である。諸註「しかも」の意がよく解けてゐない。

○

鏡山いざ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

この歌は、ある人のいはく、「大とものくろぬしがなり。」

釋　○鏡山　近江國蒲生郡。古へは野州郡のうちであつた。

大意　鏡山といふ山なら、人の影がよく映るであらうほどに、年をひどく久しく經てゝきたこの身は、老いくちたかどうかと、どれ立ち寄つて見てゆかうわ。

評　初老の程の人の、鏡の宿あたりを過ぎての作であらう。山口ながら年寄の部に入つたので、鏡山の名を聞いては、面影も變つたかしら、「いざたち寄りて」と洒落れてふざけて見たのである。全くの老人ならば、「老いやしぬる」と、疑ふまでの事はない。前人等皆、箇中の消息を曉りかねて、耆老の人の作としてゐる。甚だ疎漫である。鏡山の名稱に發足した構想は、やゝ浮誇の感じがする。

左註に就いて、眞淵は例の採らぬから、これは論なしで、景樹は、「黒主は近江の滋賀郡大友鄉の人なれば、立ち寄りて見むとやうに珍しむべからず」といひ、又「この歌は老いて後の意なるに、黒主の滋賀にありしは若き程なり。女と戯れたるにて知るべし」といつて、黒主説を否認した。しかし假令同國同郡でも、未見の地ならば珍しがらう。況やこれは、狂痴の想を主としたもので、まことに珍しがつて詠んだのでもなからう。女と戯れたる云々は、既にいふ如く、四十の聲を聞いたばかりの初老の人ぐらゐなら、普通あることである。されば、景樹の論據は極めて薄弱である。たゞ必ず黒主のといふ證もなく、又でないといふ證もない。姑く左註を存しておく。

業平の朝臣の母のみこ、長岡にすみ侍りける時に、業平宮仕すとて、時々も、えまかりとはず侍りければ、しはすばかりに、母のみこの許より、とみの事とて、文をもてまうできたり。あけて見れば、詞はなくてありける歌

おいぬればさらぬ別もありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな

釋　○業平の朝臣の云々　業平朝臣の母の内親王が、長岡に住んでゐられたが、業平は公の勤務の爲にたまさかにも往つて見舞ひかねてゐたので、師走時分に、母の内親王の許から、急用といつて、書簡を持つて來た。業平がそれを開いて見ると、文句は書いてなくて、歌ばかり書いてあつた、その歌との意。この詞書は伊勢物語にもあつて、異なつたところが多いが、長いから略く。「母のみこ」は桓武帝の皇女伊登内親王で、阿保親王の妃である。長岡は山城國乙訓郡鶏冠井にあつて、桓武帝の延暦三年奈良から一旦遷都された地で、古來この地を大極殿と稱してゐる。「とみ」は頓の字音で、急用の意。○さらぬ別　「さらぬ」はえ去らぬことで、遁れ難い

別卽ち人世に於ける死別をさす。

大意　今は親子が、都と長岡とに別々で居るが、そればかりかこのやうに年寄つては、世の中に是非とも遁れぬ別もまたあるといふことなれば、それが氣になつて、常々逢ひたく思ふ其方に、いよ〳〵この頃は逢ひたく思はれることよ。

評　作者伊登内親王は、夫阿保親王とは、叔母甥の關係であるが、阿保親王は父帝の壯時の初孫で、承和九年五十一歳にて薨ぜられ、内親王は御姉甘南美内親王が、弘仁八年に十八歳であられたのから推算すると、承和九年に、四十三歳よりはお若かつたことは著しい。されば貞觀三年薨去の御時は、六十歳程と見て誤がなからう。業平はその時に三十七歳である。「とみの事とて」とある詞書と、この歌とを併せて考へると、内親王が薨去に近い頃の師走、御病氣の爲にこの度はと思し召された折のことゝ思はれる。夫親王に後れてから、父帝の一旦遷都された長岡の舊土に寡居すること、殆ど二十年にならうとする。その愛子は、世過ぎ身過ぎの京住居、公務に忙殺されて、僅々一里内外の道ながら、往省する遑さへなく、殆ど生別れに等しい觀がある。然るに御自身は、さらぬ別の死に目に近い頽齡の病身であり、況や今は師走で、又しも一箇の老を加へようとする。何で「いよ〳〵見まくほしき」感が起らなからうぞ。眞にこれ心の聲である。純眞の聲である。尋常彫琢の語の遠く及ぶところでない。「さらぬ別も」と婉曲にいひなしたのに、凄愴の意が殊に活躍する。「も」は離居の生別に對へた辭で、下の「いよ〳〵」の語も、その響を受けてこそ落着するのを、諸註、別のといふも同じやうに解いたのは粗い。

「別も」を、一本、及び伊勢物語に別のとある。恐らくは次の返歌の詞のまぎれたのであらう。

かへし　　なりひらの朝臣

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため

大意　何卒世の中には、遁れぬ別などいふことの、無いやうにしてほしいことよ、親の壽命を千年もあれかしと歎いて願ふ息子の爲にサ。

評　單に「子の爲」といつて聞えることを、「人の」と修飾したのが、世の中の人の子にかけていつたやうに聞えて、その中に自然とわが事は含まるのである。萬葉集、「人の祖の立つること立て」、「人の子は祖の名絶たず、大君にまつろふものと」、又、後撰集兼輔、「人の親の心は闇にあらねども」の類、皆それである。歌は眞情眞詩。四句、伊勢物語に千代もと祈るとある。又眞字本伊勢物語には、齋の字を書いてあるから、千代もといはふと訓むのである。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　ありはらのむね梁

白雪の八重ふりしけるかへる山かへるぐも老いにけるかな

釋　○かへる山　離別「かへる山ありとは聞けど」の條に既出。○かへるぐも　かへりくといふべきを、かへる山の語調を承けていひかへた。

大意　自分の頭はまあ、雪の幾重〳〵も降り積つた北國の鹿蒜山のやうに、眞白になつて、その山の名のかへる

がへるも、ひどく年寄つたことよ。

評 山に寄せて頽老を歎いた。山の雪を白髪の頭に喩へ、しかも「八重ふりしける」は、「かへる〳〵も」にかけ合つてゐるから、うち任せた序歌ではない。さて、寛平后宮の歌合の歌は、寛平五年の撰なる菅家萬葉に收められてあるから、歌合は寛平の初年に行はれたものと見られる。作者の父業平は、寛平元年より十年前なる元慶四年に、五十六で卒してゐるから、假令業平が存命してゐたとしても、寛平歌合の頃には六十五六の齢である。その子たる作者棟梁は取つても四十位だから、歌の趣がその年配に適はない。さりとて擬人して、山のけしきを詠んだものとも思はれず、前後の部立にもかなはぬ。古人は題詠でも、述懐などに虚構して詠むことはなかつた。されば棟梁の歌ではないかも知れぬ。姑く疑ひを存する。

四句、顯本にかへすがへすもとあつて、定家も異存がないが、かへる山を打ち返したことは明らかだから、どうあらうか。新撰萬葉にも、「白雪之八重降敷留還山。還々曾（茂の字の誤か）老丹藝留鉈」とあるので、本文の正しいことが知れよう。

おなじ御時、うへのさぶらひにて、をのこどもに、大御酒給ひて、大御遊ありけるついでに、仕うまつれる　としゆきの朝臣

老いぬとてなどかわが身をせめきけむ老いずばけふにあはましものか。

釋 ○前と同じ寛平の御時、殿上の侍所で、侍臣に御酒下されがあつて、管絃の御遊があつた折につけて詠んであけた歌との意。「大御遊」は專ら管絃の御遊をいふ。○せめきけむ　「せめき」は迫めきで、迫めくと活く。せめくは毛詩に、「兄弟鬩于牆、外禦其侮」とある。鬩の字を訓ませてある。鬩は、註に「鬩很也」とあつて、爭ひもとること、いさかふことである。責め來けむの意に解くも一説である。

大意 ひどく年寄つたといつて、我れとわが身を、これまでなぜに責めたげたことであつたらうぞ、よく思つて見れば、年の寄つたのは嬉しい事よ、かう年の寄るまで生きて居ずば、めでたい今日に逢はうものか、いや逢はれるものでないわ。

評 老を讃して今日の光榮を喜ぶ、仕うまつゝた歌としては、その體を得てゐる。然しその内面的心理から見ると實は老を歎いた矯語である。面に笑つて心に泣いてゐるのである。二つの「か」、上のは疑辭、下のは反動辭だから差支もないが、「老」の語の重複したのは、洗煉を缺いてゐるものではあるまいか。作者はわざとしたのであらうが。

二句、六帖になどやとあるは誤であり、家集にわが身などてかとあるも、意がとほらない。

題しらず　よみ人しらず

ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば

釋 ○ちはやぶる宇治　「ちはやぶる」は秋下「千早ぶる神代も聞かず」の條に既出。こゝは「宇治」の枕詞に用ひた。冠辭考に、「宇治は、稜威と同音にて通へば、千早ぶる宇治といひ下したり」といひ、萬葉古義に、「宇治は、俗に、いぢある人、いぢはる、いぢわるきなどいふと同音にて、（意地とかくはあて字）平穏ならず、烈しき意

ある言なる故に、ちはやぶる宇治と續けたり」といひ、古說は、「物部の八十氏人は逸早ぶるが故に、千早ぶる氏と續け、さて宇治にいひかけたり」とある。「宇治」は山城の宇治川のある地。○橋守　野守、山守、關守などの類で、宇治に橋守のあることは、天武紀に、「令下兎道守橋者一遮中皇太弟宮舍人運二私粮一事上」とあるので知られる。○なれ　汝。

大意　宇治の橋守よ、外の人よりは其方をサ、取り分けて不慣な者ぞとは思ふわ、自分と同じやうに、ひどく年寄つた者と思ふによつてサ。

評　わが老によつて、人の老を憐む。所謂相見互の同情である。橋守を憐むのは卽ち自分を憐むのであつた。昔から山守だの橋守だのいふ者はおほく隱居役で、老人の掃溜であつたと見える。打聽の或說に「才德ある人の、世に沈みてあるを憐みて、橋守に寄せていへるか」といひ、眞淵は、「宇治に住める人の、宇治の橋守に寄せて、そのいふかひなくて年老いたらむを、高貴の人の憐み給へるにてもあるべし」といつた。それも一寸面白いが、この前後の歌が、皆老人自身の感懷をついでてあるから、從ひ難い。

○

われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ

釋　○住の江の岸の姫松　「住の江の松」のことは、賀部「住の江の松を秋風」の條に旣出。「姫」は細小で愛すべき物を形容するに用ひる語であるが、こゝは單なる美稱と見てよい。

大意　この住の江の岸の姫松は、自分が見はじめてからも、もう久しいことになつて居るが、一體抑もの始からは、いか程年を經てきたことであらうぞ。

評　それほど久しく松を見てきたことは、卽ち自分のいゝ老人であることを暗證する。萬葉卷七、

いにしへのことは知らぬを我れ見ても久しくなりぬあめのかぐ山

を踏襲してはゐるが、松が生物であるだけ、しかも「姫」といふ人稱が冠してゐるだけ、作者の生活に近い感じがして、同感がはやく起る。語調も流暢で、姿も亦清い。初句を、わがと讀むがよいとの景樹の說は、僻言である。

○

住吉の岸のひめまつ人ならばいくよか經しと問はましものを

釋　○住吉　住の江と同じい。攝津國住吉郡（今東成郡）。吉の古訓はエであるから、住吉と書いても、なほ「スミノエ」と訓むべきを、夙くこの頃は「スミヨシ」と訓むことが起つてゐたのである。下にも「住みよしと蜑はつぐとも長居すな」とある。

大意　住吉の岸の姫松は、大層年久しい物のやうに噂されるが、これが人間ならば、いかほど年を經たかと尋ねて見ようものを、人間ではないから、仕方がないわ。

評　この種の構想は、先型のあることである。景行紀に日本武尊の御歌、

尾張にたゞにむかへる、をつの崎なる一つ松あはれ。一つ松、人にありせば、きぬ着せましを、太刀佩けましを、一つ松あはれ。

これが最も古く記述に見えた、しかも立派な作であらう。

をぐろ崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを　（本集大歌所）

くり原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを　（伊勢物語）

などはまた、その響をつぐものである。この住吉の松は、やゝ狂熱が乏しく、「人ならば」と假設した詮がやゝうすいやうである。但これは吹毛の難をいふだけで、格調はすべておなじ儔のものである。

初二句、六帖に玉津島入江の小松とある。

○

あづさ弓いそべの小松たが世にか萬代かねて種を蒔きけむ

このうたは、ある人のいはく、「柿本人まろがなり。」

釋 ○あづさ弓　春上「梓弓おしてはる雨けふりぬ」の條に既出。こゝは「磯」にかゝる枕詞。梓弓射[イ]といふに磯をいひかけた。○かねて　かけてと同じい。

大意 この磯の上の小松は、ひどく古びて居るが、昔いつの誰れの時代に、ゆく末何萬年もかけて生ひ茂れと思つて、種を蒔いて置いたことであつたらうか。

評 この小松は二葉ではない。巖に根ざした老樹の矮松である。宣長の「小松はたゞ松なり、小さきをいふにあらず」といふ說は强言である。樹こそ古りたれなほ小さいから、普通の長立となるには、萬年も經なければと思はれるので、さては、たが世にかく萬代かけて、かう蒔いておいたかと訝つたのが、この趣向なのである。

又左註の妄りなことは、この風調を知る者の、誰れも點頭くところであらう。

○

かくしつゝ世をやつくさむ高砂のをのへに立てる松ならなくに

釋 ○世をやつくさむ　一生を暮らしてしまうかしら。○高砂　播磨國加古郡高砂。「高砂」はもと普通名詞で、高いさごの義である。どこにもせよ、濱風の吹き上げた砂の積つて山となつたのをいふ。それに松など生えて、眞の山とも見られる。播磨の高砂もさうした景色の所なのが一轉して、固有名詞に呼ばれたものだらう。序文に、「高砂、すみの江の松も相生のやうに覺え」とあるのは、この歌に據つて書いたと思はれるから、この集の撰者も、播磨の名所と見たことは無論である。

大意 自分はこの年になるまで、何一つ仕出した事もないが、毎日毎日このやうにして、つい一生を送つてしまふであらうか、あの高砂の山の上に立つて居る松こそ、何の役にも立たずに年久しくある物だが、自分はその松でもないのにサ。

評 世に無用の長物たることを慚悔した對比に、高砂の松を取り出したのに、無量の感慨が寓せられた。松でもないのに松と同じ始末では、全く言語道斷である。或は、世に大材を抱いた者の、老境に至るまで時に合はず世に淪んだのを嗟傷したものか。これは試にいふのみ。

たれをかも知る人にせむ高さごのまつもむかしの友ならなくに

藤原興風

釋 ○たれをかも　「か」は疑辭。「も」は歎辭。○知る人　故舊知己などの意。○高さご　山の意としても通ずるが、撰者はこれも地名として採つたと思はれる。

大意 自分はかう年寄つて、今では生き殘つて居る友達も無いによつて、誰れをまあ近付として交りをしようか、あの高砂の松も年久しい物ではあるが、それも昔からの友達ではないによつて、話相手にならぬサ。

評 上句を下句で解釋した敍法である。松の有をいつて、故舊の無を歎ずる對照の間に、無限の感愴を生ずる。白居易の「十人酬和九人無」と同じく、故舊親朋は次々に凋零して、ひろい世界に只一人取り殘された。昔の友なら松でも知る人にして話したくなる。老境に於ける孤獨の酸味は、實に思ひやると慄然とする。

○

わたつみの沖つ潮合にうかぶ泡の消えぬ物からよる方もなし

釋 ○わたつみ　次の歌の條參看。○潮合　さしひく潮の滿ち合ふところをいふ。○物から　物ながらの意。

大意 海の沖の潮合に浮く泡は、消えずにはありながら、寄りつく場所もないが、自分もその泡のやうに、命は消えずにはありながら、何處といつてたよる所もないわ。

評 おなじはかない物ながら、磯邊の泡は、なほ寄りつく所があらう。然るにこれは沖の潮合の泡で、寄り付く處もなしにふは〳〵浮いてゐる。老大なほ志を得ないで、世に浮沈する意を寄託し得た。眞淵が「上句は消えぬものからといはむ序なり」と解したのは精しくない。全然譬喩である。

四句、六帖にたえぬ物からとあるはわるい。美成いふ、「この歌、或人の本に、『よみ人しらず』とあり、興風集にも、以下三首ともに見えず」と。さうした證本があるなら、それに從つてもよい。

○

わたつみのかざしにさせる白たへの波もてゆへるあはぢ島山

釋 ○わたつみ　海神の名。陰陽二神が國產みませる次に、海神を產まれたことを、古事記に、「次生二海神一名大綿津見神」、日本紀に、「又生二海神等一號二少童命一」と見えた。古事記傳に、「師說(眞淵)に、綿は海、津は助辭、見は毛知の約りたるにて、海津持の意なり。これ海を持つ神なればなり」とあるに從つておく。海をワタといふのは、渡る意から出たといふ。轉じては、直に海のことにも用ひた。○かざし　秋下「露ながらをりてかざさむ」の條に既出。○ゆへる　結へる。

大意 海の神が、簪に刺してお出なされる白波を以て、くるりと結ひまはして居る淡路島であることよ。

評 海越に淡路島を見渡しての作である。海神の挿頭の波、おのづから崇高の觀念を與へる。萬葉集卷一人麻呂の長歌に、

山つみのまつる調と、春べは花かざしもち、秋くれば紅葉かざせり。云々。

とあると同調である。「白妙の」は枕詞ながら、こゝはその本義に立ち返つて、白い色相を聯想させる。二句の「させる」、四句の「ゆへる」、同語形の重複は、いさゝか不快である。

○

わたの原よせくる波のしばゝも見まくのほしき玉づ島かも

釋 ○波の　波の如くの意。○見まくの　「まく」は未來の助動詞のむの延言。○玉づ島　紀伊國海部郡若の浦（今の和歌の浦）にある。三代實錄に玉出島とかゝれ、空穗物語に玉出づる島ともある。されば「つ」は濁つてよむのが正しい。玉津島明神の社があり、衣通姫を祀る。

大意 あの海原から、絶間もなく、しば〳〵寄せてくる波のやうに、何遍も來て見たいと思ふ玉津島であることよ。

評 上句は有心の序で、玉津島の背景を形作つてゐる。「しば〳〵も見まくのほしき」といふは、しば〳〵も見られない人の言で、和歌の浦遊覽に來た他國人の作である。玉津島の景色は、聖武帝がいたく愛でられて、

登レ山望レ海、此間最好、不レ勞三遠行一足二以遊覽一、故改二弱濱一、名爲三明光浦一、云々。春秋二時、差二使官人一、祭二玉津島之神一、明光浦之靈一。

との勅があつた。爾來奈良人の賞翫する處となつて、以てこの朝に至つた。惜しいことに桑滄の變は海水の減退を來たして舊時の觀を失つてしまつた。もとは今の岡陵のもとまで海水が灣入して、玉津島は海中の孤島であつた。赤人が「潮みちくれば」といひ、「あしべをさして」といつた處は、今の畑や人家のあたりと思はれる。

○

なには潟潮みちくらしあま衣たみの〻島にたづ鳴きわたる

釋 ○あま衣たみの〻島　「あま衣」は雨衣（アマゴロモ）で、「たみの」のみのにかゝる序に用ひた。和名鈔に、「蓑、和名美能、雨衣也」とあるを思ひ合はせると、この續きが明瞭になる。「たみの〻島」は攝津で難波のうちとは思はれるが、場處が不明である。秋成の說に、「今大わたと呼ぶ里あり、近昔までは、みのわたと呼びしなり。これたみの〻わたりなるべし」と。

大意 あゝ難波の浦の干潟に、潮が滿ちてくるらしい、その證には、あのたみの〻島へ、鶴が飛び騷いで鳴いて渡るわ。

評 神韻を以て勝る作である。又、ア列音が多くして、聲韻が爽快である。

難波潟汐干に立ちて見わたせば淡路の島にたづ渡る見ゆ　（萬葉卷七）

わかの浦に汐みちくれば潟をなみ蘆邊をさしてたづ鳴きわたる　（萬葉卷六）

の如きは皆同型の同調である。もしこれを當代の作とすると、萬葉の糟粕、奈良人の餘唾であるが、恐らくこの歌は平安朝の作ではなくて、奈良朝の遺調だらう。神樂歌の大前張（オオバリ）に收められてあることは、その適證である。

序にいふ、難波の地形も非常な大變動があつたもので、昔の面影は全くなくなつたのである。今の大坂の丘陵高地は或は島であつたり、水涯の陸地であつたりして、海水が遠く灣入し、淀の河水は幾派にも分流して、頗る風趣に富んだ水鄉であつたらしい。そのつもりで難波あたりの歌は味はれたい。

貫之が、いづみの國に侍りける時に、大和より越えまうできて、よみてつかはしける　藤原たゞふさ

君を思ひおきつの濱になくたづのたづねぐればぞありとだに聞く

釋 ○いづみの國に侍りける　和泉の國守の任にありましたの意。○思ひおきつの濱　思ひ置くに、沖津の濱をかけた。この濱は和泉にあるといふ。

大意 私は貴方のことを、心にかけておいて忘れずに、この沖津の濱に鳴く鶴の名のやうに、尋ねて來たればこそ、御無事でお出なさるといふ事だけでも聞きましたわ。

評 それに引き換へ、貴方からは一向音信も下さらぬことよと、自分の親切さをいひ立てたのは、暗に貫之の不沙汰を怨じた諷意をもつ。忠房は大和守、貫之は蟻通明神の社頭で、「かきくもりあやめも知らぬ」の歌を詠んだことを思ひ合はせると、これも和泉守であつた當時、公務などで、和泉の沖津の濱までは來たが、私に閑を偷んで、貫之を國衙に訪ねることが出來なかつたので、歌だけ贈つたものだらう。

かへし　つらゆき

おきつ浪たかしの濱のはま松の名にこそ君を待ちわたりつれ

釋 ○おきつ浪たかしの濱　沖つ浪高しに、高師の濱をかけた。「高師の濱」は和泉國泉北郡(もと大鳥郡)高石の海岸、今濱寺といふ處。

大意 あの沖つ浪の高いといふ高師の濱の、そこの松の名の通りにサ、自分はとうから、久しく貴方をお待ち申して居りましたわ。

評 私の方でもお待してゐたのですと應酬し、向ふから「なくたづのたづねくればぞ」といつてきたのを受けて、こちらも「高師の濱の濱松の」と、疊音の巧を闘はせたのは、時に取つての興がある。作者は流石に老手である。松を待つに取り成すことは、うるさい程類例がおほい。「こそ」が輕い用法であることにも注意するがよい。この歌、拾遺集雜戀に再出したのには、詞書「和泉の國に侍りける程に、忠房の朝臣大和よりおくれる返し」とある。けれども、上なる忠房の歌に「尋ねくればぞ」とあるから、却つて事實が相違する。

難波潟おふる玉藻をかりそめの海士とぞ我れはなりぬべらなる

釋 ○玉藻をかりそめの　玉藻を刈りに、假初をかけた。

大意 たまく京地から來て、この難波潟の風景を見れば、さてく珍しく面白くて、歸ることも忘れて、當分玉藻を刈る海士にサ、自分はなつてしまひさうだわ。

評 面白さに長居されるを、「海人になりぬべらなり」と誇張したのを、巧手とする。然し萬葉集に、

あら拷の藤江の浦にすゞき釣る海士とかみらむ旅ゆく我れを　(卷三)

うち麻を麻績のおほ君あまなれやいらごが島の玉藻刈りをす　(卷一)

などから、胚胎してきたものである事は爭はれない。「かりそめの」の一句、分別に著して面白味を殺ぐ。上句、六帖浦本に生の浦におふる玉藻のかりそめにとあるは、本文のに劣つてゐる。

あひ知れりける人の、住吉にまうでけるに、よみてつかはしける　みふのたゞみね

○住吉とあまはつぐとも長居すなひとわすれ草おふといふなり

釋 ○住吉　地名の住吉に、住み好しの意を寄せた。○人わすれ草　人を忘るに、わすれ草をかけた。「わすれ草」は戀五「わすれ草種とらましを」の條に既出。

大意　貴方が住吉に行かれたなら、「所の名の通りに住みよい處である」と海士は申さうとも、必ず長居をなさいますな、あの住吉の岸には、人を忘れるといふ名の忘草が、生えて居るといふことですわ。

評　何分早く戻り給への餘意がある。「相知れりける人」は必ず戀人である。その住吉の神詣、假初の旅ながら、風光明媚で長居しさうな處がらなので、ふと考へると、處の名が住みよし、生えてゐる草が忘草、さあ心配になつて溜らない。で「長居すな」といひやつた。「人」は大やうにいつて自分を含めた例の辭樣である。「人わすれ草」は一寸面白いが、この作者のはじめた造語でもあるまい。既に萬葉にも、戀わすれ貝があり、この集墨滅の歌にも、戀わすれ草と詠んだ貫之のがある。

難波へまかりける時、たみのゝ島にて、雨にあひてよめる　つらゆき

雨によりたみのゝ島をけふゆけばなには隱れぬ物にぞありける

釋 ○たみのゝ島　上に既出。○なには　名にはに、難波を寄せた。

大意　雨が降るによつて、蓑といふ名をあてにして、この難波のたみのゝ島を今日行くと、やはり雨に濡れてしまつた、存外に名には身體の隱れぬものでサあつたわい。

評　俄雨に遇つて立ち寄つた所が「たみのゝ島」なので、「名には隱れぬ」と大發見をしたやうにいつた。「本の句は雨の降るによりて、もしやとわざと田蓑に行きたるさまに構へなせり」と、景樹の解いた如くである。緣語の仕立を基想としたかうしたよみ口は、自分はあまり感心しない。

三句、顯本にけふゆけどとあるのは、意は聞え易いが、本文の方に含蓄がある。

法皇、西川におはしましたりける日、「つる洲に立てり」といふことを題にて、よませ給ひける

あしたづの立てる河べを吹く風に寄せて返らぬ波かとぞ見る

釋 ○法皇西川に云々　「法皇」は宇多の上皇。「西川」は大堰川のこと。京都より西に當るのでいふ。「つる洲に立てり」は、鶴立洲の漢字題を譯したのである。日本紀略に、「延喜七年九月十一日、天皇幸二大堰河一」と見えて、その前日に、「法皇召二文人一、賦二眺望九詠之詩一」とある。鶴立洲は眺望の題の一つであらう。序文は貫之、歌人はこの序者、及び躬恒、是則、賴基等であつた。○河べを　河邊なるを。

大意　あれは白い鶴の立つて居る河邊であるものを、自分はついしては、吹く風につけて寄せたまゝ、返らずにゐる波かとサ思ふわ。

評　色相上の聯想から浪を點出し、その動かぬさまを婉曲に敍して、「寄せてかへらぬ」の巧を添へた。正敍すれば、動かぬ波が世にあるかと見れば鶴のゐたのであつたといふことを倒敍したのである。題を上手にこなしたものである。

この歌は延喜七年の作だから、この集奏進後のものである。

中務のみこの家の池に、舟をつくりておろしはじめて、遊びける日、法皇御覽じにおはしましたりけり。夕さりつ方、かへりおはしまさむとしける折に、よみて奉りける

伊勢

水のうへに浮べる舟の君ならばこゝぞとまりといはましものを

釋 ○中務のみこ云々　中務卿親王の家のお池に舟を造つて初進水をやつて、遊宴のあつた日、御父宇多法皇がそれを叡覽に御幸があり、夕方御還幸なさらうとする折に、詠んで法皇に奉つた歌との意。「中務の親王」は宇多法皇の御子で、玉光宮といはれた敦慶親王であらう。この親王は延長八年二月に四十四歳で薨ぜられた。それから逆算すると、延喜の初年頃は十七八歳でおありなさる。元服なさるとすぐに中務卿に任ぜられ、のち御弟敦實親王に中務卿を讓つて、式部卿に轉任なされた。中務卿時代にまうけた御女を中務と稱して、名譽の歌人である。諸註こゝを敦實親王としたのは差つてゐる。敦實親王は、この集撰進後の延喜七年に元服なされ、尋いで中務卿となられたので、この時はまだ小兒であられた。「おろしはじめて」は新造の舟を始めて進水すること。「遊び」は例の管絃の遊。○とまり　舟泊。

大意　水の上に浮いて居る、今日お召になつた舟が、もし法皇樣であるならば、「こゝがその泊所であります」と申し上げてお留め申さうものを、舟でない法皇樣には、さやうにも申し上げられず、お留め申さぬことが殘多いことに存じ上げます。

評 「舟の君ならば」といつた空中樓閣、幻化の手段は頗る妙である。作者伊勢は中務の君の母だから、この頃は敦慶親王の妻で、亭主方として、法皇の御駕を迎へ奉つたものか。さては法皇との關係は、すでに絶えてゐたものと看做される。物の音名殘おもしろく池の中島に響き、ま新しい朱のそほ舟は乘りすてられて、汀の波にたゞよつてゐる。見送仕うまつると、御車のほとりに侍ふ一雙玉の如き人、御心ゆきて笑ましげに見おこせ給ふ法皇の御顏、それらがすべて夕蔭に榮えたこの時の情景は、思ひやつてさへ限りなくおもしろい。況や「こゝぞとまりと」と名殘を惜んだこの三十一字が、今日の掉尾の興を添へたではないか。

この歌及び上の歌の詞書に、「法皇云々」とあるのが、他の例に差つてゐるのを訝つて、廣蔭が、後人の書入だらうと推定したのは、却つてよくない。それは宇多帝御在位中にかゝつたものは、「寛平の御時」と書き、御讓位後にかゝるものゝうち、御出家後のは、「法皇」とのみ書いたのである。史によると、「この帝御讓位の後、朱雀院太上天皇と稱せられ、昌泰二年太上天皇の尊號を辭して、單に朱雀院とのみ稱せむことを請ひ給ひしかども、醍醐帝きかせ給はざりしかば、これより、法皇と申す」とある。この集の詞書の書體は正にこれに符合する。その差別の嚴なことが知られる。なほ同じ人の作を、一は良岑宗貞、一は僧正遍昭と書きわけてあるのと同じい。

唐琴といふところにてよめる　眞せい法師

都までひゞきかよへるからことは波の緒すげて風ぞひきける

釋 ○唐琴　備前の國の名所で、船どまりである。○すげて　附けての音轉。

大意 京まで名の響いて聞えてゐる唐琴の浦は、どうしてさう響いたかと見れば、波の緒をすげて、風がサ彈いて音をたてるのであつたわい。

評 これは無理のないこと、人間業でないからの餘意がある。「唐琴」の名稱から「響かよへる」といひ、さて、波の緒に風の彈手の空想を案出したのは、恰も春蠶が絲を吐くやうである。只その緣語にからまれて、狂歌めいてゐるのが飽き足らない。

四句、六帖に波の緒よりてとある。

布引の瀧にてよめる　在原行平朝臣

こきちらす瀧の白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる

釋 ○布引の瀧　攝津國、今の神戸市の北端、布引山の半腹にある。雄瀧十五丈、雌瀧七丈餘。伊勢物語には、「この山の上にありといふ布引の瀧見にのぼらむといひ、のぼりて見るに、その瀧物よりことなり。高さ二十丈、廣さ五丈ばかりなる石の面に、白絹岩を包めらむやうになむありける。さる瀧のかみに、藁蓋の大さしてさし出たる石あり。その石のうへに走りかゝるは、小柑子（ヒウカウジ）栗の大さにてこぼれ落つ」とある。

大意 丁度緒につないである玉を引きしごいて撒きちらすやうな、この瀧の水玉を拾つておいて、世の中の憂い時節の自分の涙にサ、借りてつかはうわ。

評 百尺の素練絶壁に翻つて、大珠小珠を瑠璃盆に跳らせる。今こそこの絶景に對して、暫時慰んでゐるが、自分はもと〳〵胸中に萬斛の愁を抱いて、世の憂さに涙も盡きてしまひさうに、常は泣いてゐる者だから、幸ひこの瀧の水玉を涙に拜借しますといふ。對象の壯快なのにも關らず、こんな感傷的な愚痴をこぼす、作者の心境には、よほど入り組んだ事情があるに違ひない。抑も作者がこの布引に來たのは、下に、「田村の御時に、事にあたりて、津の國の須磨といふところに籠り侍りけるに」とある時の事で、須磨からあまり遠くもない同じ國の内の名所だから、排悶かた〴〵の遊覽かとも思はれる。四句は獨定の語で、「ひろひおき」とあるにその意が相應する。すると結句はからむと未來にいふべきを、「かる」と現在にしたのは、强く確かにいひ詰めたものである。卽ち刹那の現在は憂思を忘れてゐられる趣が暗映してゐる。

布引の瀧のもとにて、人々あつまりて、歌詠みける時によめる　なりひらの朝臣

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

釋 ○散るか　「か」は歎辭。

大意 誰ぞ繋いである緒から拔いて、ばら〳〵に散らす人がサあるらしいわ、このまあ狹い袖に包まれもせぬ程、うつくしい白玉が絶間なしにまあ、散りかゝる事よ。

評 例の玉の緒のこき散らし、著想に珍しけもないが、「ぬき亂る」人を捉へたのは、時に取つての思ひつきか。詞書もその心して、「人々あつまりて」の一句を加へて、上の歌のとわかつてある。瀧のしぶき面を撲つて、衣袂皆沾ふあたりの歌まとる、興に乘じては、同行者にそんなわるさする戲者（イタヅラモノ）がないとも限らないといつた調子、

その如何に打ち解けて遊び耽つたかゞ想ひやられる。伊勢物語にこの歌を掲げて、「かたへの人、笑ふことにやありけむ」と注したのは、正にこの意を得て書いたものである。「袖のせばきに」の一語は、「まなくも散る」白玉の夥しい事を反映する。景樹は、勢語に、作者の兄行平も同伴したとあるのを見て、上の行平の歌をも同時の詠とし、この詞書を後人の書入といひ、殊にその説を立てる爲に、「人々あつまりて」を、無用だとまで論じたのは、歌の趣を無視したる説である。何も同時の詠とすべき確證もなく、またその必要も見ない。彼れこれ更に相渉らぬ事と見てよい。

六帖に、四句間なくもふるか、結句袖のせばさにとある、いづれもわるい。

よし野の瀧を見てよめる　承均法師

たが爲にひきて晒せる布なれや世をへて見れどとる人もなき

釋 ○よし野の瀧　萬葉集に、「鮎はしる吉野の瀧」など詠んで、吉野河の早瀬となつて落ちたぎつ處である。多分宮の瀧であらう。

大意　誰れの著物にする爲にと云つて、引つ張つてほしてある、あの布であればかして、年月へて久しく見るけれども、いまだにそのまゝで、別に取り入れる人も無いわ。

評　不思議なることよの餘意がある。瀑布の語すらあつて、瀧と布とは珍しくない比喩だが、これは更に一層の趣向を立てゝ、何年經つても晒しばなしはをかしい、一體誰れの使料かと訝つたのが、この趣向である。六帖に、二句かけて晒せる、結句きる人ぞなきとある。季吟の抄には、結句とる人のなきとある。「かけては垂水のさまなれば、吉野の瀧にはかなはず」と景樹のいつたのはよい。又、結句は六帖のも、抄のも、本文のに劣つてゐる。

題しらず　神たい法師

清瀧の瀨々のしらいとくりためて山わけ衣おりてきましを

釋 ○清瀧　水の清い瀧つ瀨。その固有名詞になつたものでは、山城高雄山の麓の清瀧川が最も有名である。○山わけ衣　山をわけ行く時の衣。殊に山ごもりする僧、又は隱士などの服をいふ。

大意　この清瀧の瀨々の水は、宛も白い絲のやうであるが、これを澤山繰りためて、山わけ衣を織つて著ようものをサ、さうもならぬのが惜しい事よ。

評　作者の身上相當の構想である。瀧の絲の混喩から山わけ衣を織り出した巧は、例の弄語に屬するが、後人みだりにこれを踏襲して陳腐となつた。

龍門にまうでて、瀧のもとにてよめる　伊勢

たちぬはぬ衣きし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ

釋 ○龍門に云々　龍門は大和國吉野郡なる龍門山の龍門寺である。山は高さ三千二百餘尺、二條の瀑布がある。一を龍門の瀑、一を白倉の瀧といふ。いづれも高さ三丈、濶さ三尺ばかり、寺は今は退轉して、跡かたもない。扶桑略記に、

古老傳、本朝往年、有三三人仙一、飛二龍門寺一、所レ謂大伴仙、安曇仙、久米仙也、有レ基無レ舍、餘兩仙室、今猶在、云々。

懐風藻に葛野王遊龍門山一絶、

命レ駕遊二山水一、長忘冠冕情、安得三王喬道一、控レ鶴入二蓬洲一。

など見えて、龍門に仙人の住んだ傳説があつたのである。○たちぬはぬ衣きし人　仙人をいふ。天衣無縫などいつて、仙人の衣は、裁ちも縫ひもする必要がないさうである。○山姫　山を守る女神。

大意　裁縫のいらぬ著物を著た仙人も、今は居もせぬのに、何の爲に山姫が、あのやうに、布を晒すのであらうぞ、不思議な。

評　垂水や瀧つ瀬を布と見立てることは、套語で何の奇もない。それを基礎としては、いかに構想を逞しくしても、徒に織巧に流れるだけで、詩味はいよ〳〵索然とする。このわたりの作者達は皆語言の末をおふに急がしくて、かの自然の大觀を忘れてゐる。銀河の九天より落つる李青蓮が胸吐はとても〳〵。しかしこの歌の仙衣をさらすを、山姫の仕業とした詩的空想、「なに山姫の」といつた一番の譏笑、一寸面白い點もある。龍門寺に詣でた懐古の作として、その體を得てゐる。

朱雀院のみかど、布引の瀧御覽ぜむとて、ふむ月のなぬかの日おはしましてありける時に、さぶらふ人々に、歌よませ給ひけるによめる　たちばなのながもり

ぬしなくてさらせる布を棚機にわが心とやけふはかさまし

釋　○朱雀院のみかど云々　これは宇多上皇が、大に遊幸せさせ給ひし昌泰元年、二年の間の出來事であらう。○棚機　例の織女星のこと。なほ、秋上「あまの川紅葉を橋に」の條參看。

大意　主なしに晒してあるあの白布を、織女に自分だけの取計ひで、借されるものならば、外の日はともかく、七夕の今日は貸さうかしら。

評　織女に貸さうといふ想は詩的であるが、これは七夕祭に物を手向くるにいふ套語で、作者の新案ではない。只、主なき瀑の布を、けふの祭に取り合はせた機才が認められるだけである。

おちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老いにけらしな黒き筋なし　ひえの山なるおとはの瀧をみてよめる　たゞみね

釋　○ひえの山なる云々　山科の音羽瀧と區別する爲に、「比叡の山なる」と冠せた。空穗物語に「住みわたりける處は、そのあたりは比叡の坂本小野わたり、音羽川近くて、瀧の音水の聲あはれに聞ゆる處なり」とある瀧の音は、この音羽の瀧であらう。六帖及び源語に、小野山に、音なしの瀧をよみ合はせてある。○おちたぎつ水の落ちてたぎること。

大意　たぎつて落ちる、この瀧の水上が久しくなつて、年寄つてしまつたさうな、見るところ白髪ばかりで、黒い筋は一筋も無いわ。

評　水の白瀧を擬人して年寄つたせるで、白髪ばかりだといふ。元來、國歌に擬人を運用することは少ないから

耳なれぬ心地からは、俳諧に近く思はれさうである。初二句の聲調はよろしいが、これは萬葉にいくらも見えて、一種の成語である。只、全體の調の勁健なのを、この特色とする。「水上」に皆髮をかけたとするは、この歌を俗了するものである。

三句、打聽本に年をへてとあるは、語調がやゝよわい。

おなじ瀧をよめる　　みつね

風ふけど處もさらぬ白雲は世をへておつる水にぞありける

釋 ○さらぬ　去らぬ。

大意 風が吹けども、同じ所を去らずにゐるあの白雲は、不思議の事とよく〳〵見れば、昔から落ちる瀧の水でサあつたわい。

評 忠岑、躬恒の兩歌仙の歌によつて想ふに、この音羽の瀧は山腹の木繁きあたりに、白泡立ちておちる溪流であらう。この二首、同時の詠か否かは明らかでない。

結句、六帖に瀧にざりけるとある。

田村の御時に、女房のさぶらひにて、御屏風の繪御覽じけるに、瀧おちたりけるところ面白し、これを題にて、歌よめ」と、さぶらふ人に仰せられければよめる　　三條の町

思せくこゝろのうちの瀧なれやおつとは見れど音のきこえぬ

釋 ○田村の御時に云々　文德帝の御世に女房達の侍所で、そこに立てゝある御屏風の繪を御覽遊ばされた時に

この瀧の流れ落ちる處が面白い、これを題にして歌を詠めと、おそばの人々に仰せられたので詠んだ歌との意。

「田村の御時」は文德帝の御時で、この帝の陵が山城國葛野郡田邑鄕にあるので申す。「女房のさぶらひ」は女房達の詰所で、卽ち臺盤所のこと、淸涼殿中、朝餉の間の南、鬼の間の北にある。○思　こゝは名詞。

大意 人が物思を怺へて居る心のうちは、音こそしないが、瀧のやうに湧きかへる物であるが、この繪の瀧は、その心の內の瀧であればかして、落ちるとは見えながら、一向に音が聞えぬわ。

評 繪の瀧に音がしない、これが著想の起點になつてゐる。水はせくと瀧を成す、戀の心を瀧によそへて詠みなすことは、古歌にも集中にも、例が多い。たゞこれは心のうちの瀧の隱喩を一ふしとする。題畫の詠は自然過巧になるのが普通だが、これは又「思せく」の「心のうちの瀧」のと、何か作者自身の鬱悒の情を託しものゝやうに聞かれる。果然この作者は更衣であつた。それで帝を思慕し奉る情の切なさを、折よしと題畫に託してほのめかしたものである。

屏風の繪なる花をよめる　　つらゆき

咲きそめし時よりのちは、うちはへて世は春なれや色の常なる

釋 ○うちはへて　打ち延へて。時の長く續くをいふ。

大意 咲きはじめた時から後は、長くうち續いて、世の中はいつも春であればかして、この花は色が常住おなじ

事であるわ。

釋 屏裏常に春風を藏するの詩味であるが、措辭がやゝ冗漫である。繪にゆづつて、花の字を着けない。「色の」は題畫としては必要な文字と思はれる。いづれその畫は極彩色の花が模樣のやうに描かれてあつたらう。

屏風の繪によみあはせてかきける　坂上これのり

かりてほす山田の稲のこきたれてなきこそ渡れ秋のうければ

釋 ○繪によみあはせて　繪の趣に歌をよみあはせての意。卽ち畫讃である。○こきたれて　戀三「あけぬとてかへる道には」の條に既出。

大意 この繪にかいてあるやうに、刈つてはほす山田の稲をこきおろすやうに、涙をはら〳〵流して、雁のなくやうに泣いてサ、月日を送るわ、秋がつらいによつてサ。

評 繪樣は、刈りほした稲塚があつて、賤の夫が稲をこきおろすところで、空には雁が列を成して、鳴き渡るさまであつたらう。初句「かりて」に、雁をよせてある。秋上、躬恒、

うきことを思ひつらねて雁が音のなきこそ渡れ秋のうければ

と全く同意ながら、一段理趣におちて、措辭も簡淨でない。

古今和歌集卷第十八

雜歌下

題しらず　よみ人しらず

世の中は何かつねなる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀨になる

釋 ○飛鳥川（アスカ）　冬「きのふといひけふと暮して」の條に既出。

大意 飛鳥川を見れば、昨日まで淵であつた所がサ、今日はもう淺い瀨になるわ、あの川でさへさうである、世の中では何がいつも變らぬ物か、いや變らぬ物といふは無いわ。

評 飛鳥川は高市郡の稲淵山から發源して、郡の傾斜地を貫流し、大和平原に注ぐ。しかも甚しい屈折をなしてゐる。だから一寸急雨でもあると、昨日の淵は今日の瀨であつた。殊に飛鳥朝廷時代から、大和人はこの川の案内に熟して、その變化の急激を意識して居つたと思はれる。一寸考へると「きのふけふ」と按排すると、必然に明日が聯想されるので、それがため飛鳥川が點出されたやうだが、それは本末顚倒の見で、飛鳥川が地理的に不常住な的證を提供してゐるので、その明日（アス）の語響からきのふけふを聯想し、淵瀨の變化を撮合したのである。初二句は主要の總說であり、三句以下はその解說に屬する。もとより世間の無常なことは、佛敎の力說してゐる處で、一向平凡な思想であるが、飛鳥川を引例にした解說が、この拍案の妙を成したのである。餘り變轉の

ない物と、誰れも思ひすてゝゐた地象に屬する物だけに、餘計にさもと諾かされる。「きのふの淵」「けふの瀬」、相對的に極端な變化が意識され、感慨が強く印象される。措辭奇巧に調は渾然として、浮辭漫辭は一つもない。その千古人口に膾炙されるのも偶然でない。

廣蔭が「淵瀬の變らぬ喩に古歌に詠まれたる飛鳥川すら變るなれば」と解したのも面白いが、古歌にさう詠んだ例を見ない。萬葉を檢すると、山川で瀬の早いこと、淀のあること、玉藻のはえてゐること、蛙の鳴くこと、身そぎすることなどばかりがある。恐らくは杜撰だらう。

○

幾よしもあらじわが身をなぞもかく蜑の刈る藻に思ひ亂るゝ

釋 ○幾よしも　「幾よ」は幾世、「し」は强辭、「も」は歎辭。○刈る藻に　刈る藻の如くにの意。

大意 いか程長生すればとて、千年萬年もはサまあるまいと思ふこの身であるものを、なぜまあかう海士の刈る藻の亂れるやうに、とつおひつ思ひ亂れて苦勞するのであるぞ。

評 浮世はまゝの皮にせよやの餘意がある。理窟は知りぬいてゐる。感情は感情で走つてゐる。この撞着が「なぞもかく」と、自分ながら自烈たく思はれるので、その悶々の情を味ふべきである。人生はもとよりいくばくもない。李白が、

處レ世若二大夢一、胡爲勞二此生一。

と、その想がほゞ同じい。蜑の刈る藻の譬喩は器用である。二三の句、あらじと思ふわが身なるものをとあるべきを略いた。諸註、今は幾ばくもあるまじきわが身をと解いて、はや盛り過ぎた人の述懷とした。今はの語は勝手な補足語で、作意を曲解してゐる。

初句、新撰六帖にはいくばくもとあり、四句、六帖にかる藻のとある。

○

雁のくる嶺のあさ霧はれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ

大意 雁のくる時分の、その嶺の朝霧の曇つてゐるやうに、心が晴れずにばかり、常住おもひ事の盡きぬ、この世の中の憂さよ。

評 初二句は序で、時節の景物をあしらつたのである。想においてはきまり切つた厭世觀ではあるが、序詞が背景となつて、孟郊が「出レ門皆有レ礙、誰言天地寬」の如く、餡酸の氣の迫るにたへない。

結句、六帖にうきとある。

しかりとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中

小野たかむらの朝臣

釋 ○背かれなくに　世を遁れられぬのに。○世の中　の下との辭が略かれてある。

大意 さうであつたとて、世を捨てられもせぬのに、何ぞ事がサあれば、まづ一番に、あゝ憂い世の中だと歎かれたわい。

評 これも矛盾撞著を扱つてゐる。こゝに悲觀し、こゝに厭世する。しかりとて背かれない。人間の心弱さが暴露されてゐる。流石の野狂その人も、境遇の不平は、遂にこの凡人らしい愚痴に墮ちた。

六帖に、初句しかありとて、四句歎かるゝとある。新撰和歌には、結句あれば世の中とあるが、これは誤であらう。

甲斐の守に侍りける時、京へまかりのぼりける人につかはしける　をのゝさだき

みやこ人いかにととはゞ山高みはれぬ雲ゐにわぶと答へよ

釋 ○京へまかりのぼり　「まかる」は退出の意であるが、この頃は、行くと同意に用ひた。

大意 もし京の人が、自分の事をどうして暮らして居ると尋ね問うたならば、「山が高くて、常住雲の晴れぬやうに、心もはれぬ遠い國に難儀して居る」と答へてくれい。

評 事にあたつたさすらひの身でもない、又、住むべき國もとむるのでもない。大君の御委任のまゝに、事取り持つ牧民の官人で、處がらとはいへ、餘りに女々しいいひ草である。高山のかひの國、當時の都人の心地としては、ほんに島流しにでも遭つたやうな氣もするだらうが、實の處は同情を求める狡獪手段で、わざと旅愁を誇張したに過ぎない。下なる行平の「わくらばにとふ人あらば」と全く同一の樣式である。どちらか踏襲であらう。

文屋の康秀が、三河のぞうになりて、あがた見にはえいて立たじや」といひやれりけるかへりごとによめる　小野小町

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

釋 ○文屋の康秀が云々　康秀が三河椽になつて赴任の時、小町に「田舍見物にお出掛けなさいませんか」と誘つてきたその返事によんだ歌との意。「ぞう」は椽をいふので、國衙の三等官である。「あがた見」は田舍見物といふこと。「あがた」は上田（アガリタ）の略で、田舍にある御料地をいつたのが、轉つて縣主の治める地の稱となり、又轉つて地方官の任國をいひ、更に田舍の稱となつた。眞淵いふ「斑田の義」と。「えいで立たじや」はよう出掛けまいかどうかの意。

大意 自分は今ではひどく難儀にくらして、身を憂いつらいと思つてをるので、丁度浮草の根がきれて、水のゆく方へ誘はれるやうに、誰れでも誘つてくれる人があるならば、どちらへなりと往かうとサ思ひますわ。

評 康秀が「田舍見物には」といつてきたのを承けて、田舍見物位の洒落ではない、誘ふ水さへあらば、何處へなりとも往き切に參りませうと答へた。これは一時の辭令で、康秀の好意に對する挨拶である。詞のうへにのみ泥んで、眞に田舍住ひを希望するものと速斷してはならない。又、落花流水の風流消息あるものと忖度してもならない。さはいへ彼れが當時失意の境遇にあつた事は勿論である。春下、

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

後撰雜一に、定めたる男もなくて、物思ひける頃、

蜑のすむ浦こぐ舟のかぢをなみ世をうみ渡るわれぞ悲しき

などを思ふに、漸く縮緬皺の小鼻に寄るに驚き、さて生涯の苦樂を托すべき、眞面目な戀瀨を思はなかつた不覺に想到して、懊惱煩悶に堪へなかつた折も折、康秀が誘ふ水にあつたものらしい。本居内遠が考に、當時康秀五十餘歳、小町三十七八歳だらうとある。身世如浮萍で、浮草の寄る方ない事は支那の詩にこそよくいふが、わが歌には從來なかつた。あまり婦人が漢學をせぬ時代だから、恐らく作者獨自の取材だらう。それに誘ふ水の比喩を撮合した措辭の巧慧さ、作者の才思が見られる。詩の鄭風に、

籜兮籜兮、風其吹レ女、叔兮伯兮、倡レ予和レ女。

と、全くその體製をひとしくして、聯璧の觀がある。

題しらず

あはれてふことこそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ

よみ人しらず

釋 ○あはれてふこと　あはれといふ言。○うたて　春下「散ると見てあるべきものを」の條に既出。○ほだし　古語ふもだし。馬の足を繫ぎとめる綱をいふ。

大意 人があゝいとしいといつてくれる詞がサ、この憂い世の中を、生憎によう思ひ切つてすてられぬ、羈絆であつたわい。

評 厭世觀を實行にうつらうと考へてゐる折の作である。けれどもいざとなると、妻子親朋などの懷かしい心持を思ひ出さずにはゐられぬ。愛着心は厭離の妨となる。これは佛教の口頭語で、何でもない想だが、「絆なりけれ」の譬喩が多少の詩味を搖曳させる。それも後世あまりにいひ舊してしまつた。

新撰和歌には、二句ことこそうけれ、結句けりとある。

○

あはれてふ言の葉ごとにおく露はむかしをこふる涙なりけり

よみ人しらず

大意 昔の事を思ひ出して、あゝと歎くたび毎に、涙がこぼれる、するとそのあゝといふ言の葉に、ひとつくおく露は、涙であつたわい。

評 言の葉の混喩から、涙を露に取り成した隱喩、意は功に、詞は簡淨に、調は流暢であるが、つまりは語言の末のものか。

○

世の中のうきもつらきもつげなくにまづしるものは涙なりけり

大意 世の中の憂いことも、つらいことも、いつて聞かせもせぬのにまあ、存外に一番に知るものは、涙であつたわい。

評 憂いにつけ、つらいにつけ、先立つて涙がこぼれる。それを涙が「まづ知る」と擬人したのが、この一ふしである。感傷的な氣分は受け取れるが、「つげなくに」は理をいひ詰めて面白味を殺ぐ。しかし告げても一向同

情してくれぬ他人に對した諷刺の語とみれば却つてよいかも知れぬ。

○

よの中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらずありてなければ

大意 この世の中は夢か正眞か、いや正眞とも夢とも知られぬわ、といふのは、世の中はあつて、しかもないのであるからサ。

評 想は天台にいはゆる三諦の理である。萬有の現象、有と觀ずればうつゝであり、無と觀ずれば夢である。有の假諦である、無の空諦でない實相、これが中諦である。「現とも夢とも知らず」は中諦をいつたものである。この眞如の妙諦を三十一字に寫し得たのを、作者の技倆とする。初二句は自問、三句以下は自答で「ありてなければ」の一句椁尾の傑句である。促句まじりの四段切の中に、漸層法と反轉法とを用ひて、語調の勁健をたもち、同時に同語を反復させて、聲調の和諧をはかつたなど、作者苦心のところであらう。

○

世の中にいづらわが身のありてなし哀れとやいはむあなうとやいはむ

大意 この世の中に、どれどこにわが身があるぞ、今日明日にも死なうも知れねば、あつてないものである、さればあゝ悲しいといはうか、あゝ憂いといはうか。

評 平々凡々の無常觀で、一向冴えない。四段切の促句仕立で、下句、同型の語を反復したうへに、アの頭韻を

押したのが、一寸異色である。

○

山里は物の寂しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり

釋 ○寂しき事こそあれ　寂しい事こそあるいが、それでも世の中の憂いのよりは、存外に住みよい事であるわい。

大意 山家は物さびしい事こそあるいが、それでも世の中の憂いのよりは、存外に住みよい事であるわい。

評 塵界にゐる人の想像を裏切つた宣言である。境は卽ち心を移す、人生の行路に蹉跌し、世をすて世にすてられて、山里に思ひ入つた時、卽ちこの感じがあるであらう。山里の缺點は寂しい。浮世の缺點はういつらい。相對的に比較して團扇を山里に擧げて見せた。

六帖、小町集に、二句物のわびしきとあるのを、「しまりて優れり」と景樹はいつたが、うなづき難い。この作者は山里がわびしいのではないので、頗る安住してゐる。但しひて疵を穴ぐつて寂しいといつたまでだ。又、朗詠に物さびしかる事はあれどとあるは拙い。

白雲のたえずたなびく嶺にだにすめば住みぬる世にこそありけれ　これたかのみこ

大意 雲の不斷たなびく高山の峰でさへ、住めばかうして住んで居られる世の中でサあつたわい。不思議なものサ。

評　この親王の御事に就いては、既に春上「世の中にたえて櫻のなかりせば」の條下に、委しい説明をしておいたから參照されたい。失意の極遂に出家して、山城國愛宕郡小野山に住まはれた。場處は叡山の西山で麓の村は大原村である。都から三里半高野川の上流で、それは〳〵寂しい白雲のたなびく峯である。伊勢物語に、

む月に拜み奉らむとてまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでて拜み奉るに、つれ〴〵といと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事など聞えさせけり。

とは、この間のことである。金殿玉樓にのみ起臥させられた御心地に、はじめは住み遂け難く思し召された山住であつたが、自然の成行に抗しかねて、そこにあきらめが湧いたやうなお歌で、御心の中を察すると、實に畏くも悲しい。「住めば住みぬる」の同語の反復、わが行爲を間接にわれと讃歎したので、沈痛の意が深まる。六帖には、よみ人しらずとある。四句、古本貫之集には住めばすまるゝとある。

しりにけむきゝても厭へ世の中は浪のさわぎに風ぞしくめる　ふるのいまみち

釋　○しくめる　「しく」は頻りの意の動詞。

大意　これ世間の人達よ、もう知つてしまつて居るであらう、もし知らずば、今自分がいふことを聞いてなりとも、この世を厭つて捨てゝしまいなさい、この世の中は、丁度海ならば浪の騒がしく、風がサ吹きかけ〳〵するやうなものと見えたわい。

評　法華經の偈文、

三界無レ安、猶如二火宅一、衆苦充滿、甚可二怖畏一、

の意をのべた。下句は、古物語などに、疫病などで人の數多死ぬるを、「世の中騒がしき頃」と書いたと同意で、無常迅速の物安からぬ貌を、浪の立ち騒ぎ、風の吹きしきるに喩へた。風が吹いて、浪の騒ぐといふのが順序だけれど、こゝはそれに拘はらず、たゞ關聯した事項を排對した譬喩である。「知りにけむ」「聞きても」と漸層法を用ひたことは、警告の意を強く印象させる筆法で、迷夢を打破するに必須な表現である。

いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ　そせい

大意　どちらの方へ、この世を捨てゝ往かうか、この心といふものがサ、野に往つても、山に入つても、やはり惑ひさうな樣子だわい。

評　我ながらわが心には、愛想のつきた事かなの餘意がある。作者が桑門の人だけに、その迷悟の境に彷徨する苦惱が、しみ〴〵と同情される。人間ばなれのした坊さんの方が、却つて本音でない事が多い。華嚴經にいはゆる、「三界唯一心、心外無別法」の理は、かくて暗示された。四句は、野にても山にてもの意だが、やゝ明快を缺くが、かうした辭樣はまさに存在してゐる。雜部下の古本に、初句いづこにかとある。

世の中は昔よりやはうかりけむわが身ひとつの爲になれるか　よみ人しらず

釋 ○やは　「や」は疑辭、「は」は添辭。

大意　世の中は昔からこの通りにまあ、憂いのであつたであらうか、それとも又自分の身ひとりの爲に、このやうに憂い世の中になつてあるのであらうか。

評　「わが身ひとつの爲」といふことは絶對にない事なのを、しかも疑つて、兩端を叩いたその愚痴を聞いてやるべしである。

○

世の中をいとふ山べの草木とやあなうの花の色に出にけむ

釋 ○あなうの花　あな憂に、卯の花をかけた。「あな」は歎辭。

大意　あゝ憂いと思つて、世の中を厭つて引つ込む山邊の草木といふことでか、憂いといふ名の卯の花が、かう色にあらはれたのであつたらう。

評　正義に引いた赤尾可官の說に、「うつ木の一種を、今比叡の山人あなうつといへり。色も濃紅なれば、色に出にけむといふか」と。この說よろし。うつ木には、常いふうつ木と、山うつ木と、箱根うつ木との三種がある。比叡山のは、山うつ木であらう。白いのばかり見馴れた目に、その淡紫紅色な花を訝つて、處がら非常の草木も、なほかつ、あな憂の色に出たものかといふ。うつ木は草ではないのに、「草木とや」は變なやうだが、これは熟語法である。

○

三吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ

釋 ○かくれが　隱處。隱家とかくはあて字。

大意　吉野山は深い山であるが、その吉野山のまだあちらの山奥に、家がまあほしい事よ、そこを世の中の憂いと思ふ時の隱れ所にしようわ。

評　到底憂き世と見なして、早手廻しの隱宅穿鑿、大覺の眼から見れば、唯これ一箇の痴案である。さはいへ人は環境によつて支配される。凡夫はこの詩的方案もなければならぬ。吉野を取り出したことは、往時から隱遁場所として聞えた土地だからである。故に吉野といへばすぐ隱處が聯想された時代で、この心持でこの歌を見る必要がある。

○

世にふればうさこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてむ

釋 ○岩のかけ道　和名鈔に、棧道を「山のかけみち」と訓んだ。こゝも棧道か。崖をガケといふもこの語から轉じたのである。一說に、岩の陰道とある。○ふみならし　踏み平しの意。

大意　世にかうして居れば、次第に憂いことがサ增るわ、これではかなはぬ故、いつそ吉野山の難所をも踏み開いて、奥深く引き籠らうぞ。

評　四五句、山ごもりせむといふことを轉義したので、婉曲味もあり、その態度も想はれて面白い。しかもかく

辛い岩のかけ道をも厭はぬ事によつて、ます〳〵世の憂さのはげしさが見える。

○

いかならむいはほの中にすまばかは世のうき事は聞えこざらむ

釋 ○いはほの中　岩窟の中。又岩の立ちめぐつた山中。○かは　「か」は疑辭、「は」は添辭。

大意　どのやうな岩山の中に住んだらまあ、この世間の憂い事が聞えてこぬ事であらうか。

評　作者は大きな憂き事のある人であらう。尋常の山住などでは、やはり憂き事は聞えてきさうなので、「いかならむいはほの中に」と思案にくれたのである。苦樂は心一つで、山にはひらうが、地にもぐらうが、のがれ難い道理を忘れて、ひたすら他に向つて安住の處を求めようとあせつてゐる。その焦燥と痴愚とに人間味のあはれさが漂ふ。山の中をいはほの中と轉義したのが面白く、後人の踏襲するところとなつた。

三句、この部の古本にすまばかもとある、結句、六帖にたづねこざらむとある。

○

あしひきの山のまに〳〵隱れなむうき世の中はあるかひもなし

大意　山のあるについて、何處へでも往つて、隱れてしまはうわ、なぜなれば、このやうに憂い世の中は、住んで居る詮もないわ。

評　すなほにさつぱりした歌柄はわるくない。想はきまつた厭世觀だけれど。

○

世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれるゆきやけなまし

釋 ○うけく　憂くの延言。○ゆきや　雪に行きをかけた。

大意　もう〳〵世の中の憂いのに飽きはてたわ、いつそ奥山の木の葉に降つた雪が消えるやうに、自分も其の奥山へ往つて、跡をかき消してしまはう。

評　厭世のあまり、まづ奥山の隱處を思ひよせ、次に木の葉の雪を聯想して、「ゆきや消なまし」の一案を立てた。秀句仕立ながら、思ひ入つたところも見える。「消なまし」はこゝでは、死んでしまふ意ではない。或說に、行倒となつてしまはうと解いたのは失笑にたへない。

おなじもじなき歌

世のうきめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそ絆なりけれ

釋 ○おなじもじ云々　一首のうちに同字のない歌との意。歌の意によつて、こゝには序でた。

大意　世の中の憂い事の、見えも聞えもせぬ山の中に這入らうとするには、戀しく思ふ人がサ、その邪魔立するきづなであつたわい。

評　思愛の羈絆をいふは常套で、陳腐である。只一首のうちに同字のないなど、畢竟文字の遊戲に過ぎない。

ものゝべのよしな

山のほうしの許へつかはしける

九二〇　　凡河内躬恒

世をすてて山に入る人山にてもなほうき時はいづちゆくらむ

釋 ○山のほうし　山住の法師。或は、平安京時代のならひで、「山」は比叡山をさしたかも知れない。家集の詞書には、「世を怨みて、山寺にまかる人につかはす」とある。

大意 世の中が憂いとて、山に引き込む人よ、その山でもやはり憂い時は、どちらへ行くのであらうぞ。

評 詩としての妙味は少ないが、頗る好皮肉で、驚くべき機智を藏してゐる。對手が坊さんだけに、餘計に刺笑が鋭く聞える。

家集に、初句世をうしと、三四の句山ながら又うき時はとある。

物思ひける時、いときなき兒を見てよめる

今さらに何おひづらむ竹の子のうきふし繁き世とは知らずや

釋 ○おひづ　生ひいづの略。○うきふし　憂き場合をいふ。竹の節をかけた。○知らずや　知らぬかい。

大意 生えずともの事を、竹の子が今更に、何とて生えて來たのであらうぞ、憂い事のある折節のおほい世の中とは知らぬのかどうか。

評 この稚き子はわが兒か人の兒か、いづれでもよい。これを竹の子に擬へていひはてた。「ふししげき」も竹の緣語である。「世」も或は竹の節を寄せたかと思はれる。「物思ひける時」は、恐らく五月の竹の子時分であつたらう。輕薄で、しかも人生の半面を說明し、人情の機微に觸れ、うたゝ感愴を深からしめる。この作者時々かうした手柄がある。當代の歌仙たるにはぢない。

題しらず　　よみ人しらず

世にふれば言の葉しげき吳竹のうきふし毎にうぐひすぞなく

大意 世にあれば、人に何のかのといはれる事が多いが、その憂い折節毎に、繁つた竹のふしぶしに、鶯がサあれなくわ。

評 「なく」は鳴くに泣くをよせたのである。譬喩と緣語の修飾で、煩瑣に堪へない。

○

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり

釋 ○竹のよ　「よ」は節と節との間をいふ稱。○はし　半とおなじい。何方へもつかぬにいふ。

大意 木でもない、草でもない竹の節のやうに、どちらつかずの物に、自分の身はなつてしまひさうな。

評 上句は、晉の戴凱之の竹譜に、

植之中有レ名曰レ竹、不レ剛不レ柔、非レ木非レ草、云々。

とあるに據つたものと思はれる。木にも草にもと、兩端をたゝいた句法に、姿致があるばかりではない。對映

の妙があつて、竹のよのはしたな事を歎ずる意が頗る深まる。抑も作者の境遇はどうした事情であつたかしら。左註にいふ高津の皇女は桓武帝の皇女で、大同四年六月嵯峨帝の妃となり、幾ばくもなく廢められたことが、續紀に見えてゐる。後撰集に、この皇女の御歌として、

なほき木にまがれる枝もあるものを毛をふき疵をいふがわりなき

その本文をひかへて詠んだ歌ぶりは、相同じである。當時は漢學隆盛の世だから、わが國風も自然かうしたよみ口が行はれたものか。すると左註の說も信じてよささうである。密勘に「内親王の身、思ひかけぬ入内をして、又その本意あるさまにもなかりければ、木にも草にもあらず、はしたなる身とよみ給へるなり」とある、或はさうであらう。が「なほき木に」の詠を湊合して考へると、別に餘程込み入つた事情が伏在して、人言の繁さに殆ど堪へかねての折のお作であらう。

○

わが身からうき世の中と歎きつゝ人の爲さへ悲しかるらむ

釋 ○わが身から　「から」はよりの意

大意 自分の身から、憂い世の中ではあると、歎き〳〵して居れ、人はさうもあるまいのに、何で人のうへまで身につまされて、悲しくあるのであらう。

評 頗るおせつかいらしく感じた口吻、作者は自家の解嘲とするつもりか。何故にを三句の下に含めて聞く格。

おきの國に流されて侍りける時によめる　たかむらの朝臣

思ひきやひなのわかれに衰へてあまの繩たぎいさりせむとは

釋 ○おきの國云々　羈旅「わたの原八十島かけてこぎいでぬと」の條に既出。○ひな　ひろく都の外の國をいふ。田舍。○繩たぎ　「たぎ」は手繰ること。○いさり　漁。

大意 都にゐた時分に、思ひ寄つたことか、いや思ひも寄らなかつたわい、このやうに遠い田舍に流された別の悲みにくづをれて、その日のたつきには、海人の釣繩をたぐつたり、魚など釣つたりしようとはサ。

評 今昔境遇の劇變は、たゞですら無量の感慨にうたれるであらう。況やこれは勅勘となり、流人となる。當時三十七八歳の元氣旺盛な、しかも硬骨野狂の名を負うた作者も、幾多の感愴に打たれぬ譯には往くまい。殊に名家の子弟として、弱冠から順調の徑路ばかり踏んで來たので、一旦この逆境に臨むと、心膽俄に沮喪したに違ひない。下句、海人のしわざをせむとはといふべきを、具象的に轉義したのに、大いに詩味を生ずる。元來蠶烟蜃雨、磯臭いあたりに住み馴れたことを、海人の所業をみづからするやうにいひなしたのも、誇張である。萬葉卷一麻續王の、

うつそみの命ををしみ波にぬれ伊良古が島の玉藻刈ります

と同趣で、詩人の慣手段である。

田村の御時に、事にあたりて、津の國の須磨といふ所にこ

もり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける

在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよる

釋 ○田村の御時云々「田村の御時」は文德帝の御世。「事にあたりて」は敕勘を蒙るをいふ。津の國の須磨は、攝津國武庫郡の須磨である。眞淵いふ、「今はいさゝか御氣色のあしかりけるを、しばし避けて、須磨に籠り居られしなるべし。罪ありて流されしこと、文德實錄に見えず。この天皇の御在位はわづか十年が程にて、その間官位昇進年々にこそあらね、滯なく見えたり」といひ、秋成は更にこれを敷演して、「須磨に避け給ふは、御父阿保親王攝津守に任ぜられしこと見えたれば、そのよせなどのなほ彼處にありけるにや。業平も津の國に遊びしことのあるも、いづれ在原氏の領地ありし故なるべし。今も菟原の郡打出の里に、御父親王の遺蹟と稱ふる寺院あるによりて、しか思はるゝなり」といつた。しかし、これも勅撰集だから、事に當らぬ者をさう書く筈もない。國史はいくらも脫漏があるから、悉くは信ぜられない。○わくらばに　たまさかにの意。○藻鹽たれつゝ　藻鹽に、鹽垂るをよせた。「藻鹽」は海藻の鹽水より採る鹽をいふ。海藻を簀の上に搔き集めて、鹽水を汲みかける。その鹽の染みついた藻を燒いて、水に攪拌し、上澄を釜に煮て鹽とする。「鹽垂る」はその鹽水を垂らすことから轉じて、涙に濡れそぼつにいひ、又、歎に沈むにいふ。

大意　もしたまさかでも、問うてくる、人もあるならば、その時貴方は、私が須磨の浦で、海士のする仕事をしてしほたれて、ひどく難儀をして居ると應へてください。

評　日陰のさすらへ人、今は誰れ問ふべきでもない。しかも鍾情の昔を忘れぬ人が萬に一もあつて問はば、云々と答へよとは、蓋し假託の言である。まことは「宮の内に侍りける人」にわが現況を報告して、その同情を求めるのを、その本旨とする。その「宮の内に侍りける人」とはどんな身分の人か。いづれ宮中奉仕の婦人とは思はれるが、甚だ事が廣くて判然しない。然し后妃をさしたらしくもないから、まづ主上のおそばに侍ふ、いはゆる上の女房と見たがよからう。かねて知合の女房の許に、かう詠んで贈つたとすれば、「わくらばに問ふ人」はいはずして主上の御事を暗にさしたので、「答へよ」は卽ち行平はかくの如く苦辛を嘗めて居りますと奏上してほしいといふのである。「藻鹽たれつゝ」は、上の歌の「あまの繩たぎ」と同趣の誇張で、唐の章莊の、

若見二青雲舊相識一、爲言流落在二天涯一。

の詩に比して、更に一段の感愴と、幾層の巧趣とをそなへてゐる。

この歌業平集に見え、又後世の或寫本に業平とある。杜撰が杜撰をひいたので、源氏物語にも既に立派に行平の作としてゐる。

左近將監とけて侍りける時に、女のとぶらひにおこせた

りける返事に、よみてつかはしける　　をのゝはるかぜ

あま彦の音づれじとぞ今は思ふわれか人かと身をたどる世に

釋 ○左近將監とけて云々「左近將監は左近衞府の判官(三等官)で、從六位上に叙せられる。五位に進んで、中には殿上を許されるのもある。「とけて」は解官されたこと。「女」は妻。「とぶらひに」は見舞に。○あま彦の天彦の字をあてる。山彦とおなじで、彼を神格視した名。こゝは「音」にかけた序である。集中、貫之の長歌

にも、「あま彦の音羽の山」と詠まれ、又、貫之集にも散見してゐる。宣長の「天上の人をいへり。物語どもにこれかれ見えたり」との說はいかゞ。物語にあるは、天人といふので天びことあるのは誤寫から來てゐる。○世に　世にての意。

大意　貴女へも便りはすまいとサ、もはや思ひますわ、この頃の不仕合に當惑のあまり、心も空になつて、自分のからだを、人のか自分のかと、辨へかねて居る時節でして。

評　この時代の習慣として妻は無論親里にゐて、作者は通つてゐた折である。妻女の消息には、久しく音信のないことをば怨んだ文句があつたらう。そこで音づれぬ理由を具陳したのである。蓋し作者の解官されたのは喪解でもなく、病解でもない。藤原保則の奏議中に、

前左近將監小野春風累代將家、驍勇軼レ人、前年頻遭二讒謗一、免レ官家居。

とあるから、讒言によつたのである。「われか人か」と身をたどるまでに歎かれたのは尤もである。當時の免官免職は、今日の人の考へるほど輕い事ではない。あの時代には絶對の官吏萬能で、金があらうが財産に富まうが、無位無官は士人の齒ひしなかつたものである。されば免官の打擊は容易ならぬもので、家の爲にも身の爲にも悲傷すべき大事件である。隨つて妻女訪問などは、思ひよる餘裕もなくなる。歌は格別よいともいへないが、武辨の人として是等の文字のあるのは頗るゆかしい。

初句、新撰和歌に山彦のとある。

つかさのとけて侍りける時よめる　平さだぶん

うき世には門させりとも見えなくになどかわが身のいでがてにする

釋　○つかさのとけて　免官をいふ。

大意　自分の家こそ閉門して居れ、この憂い世には門をさしてあつて、出入のならぬものとも見えもせぬのに、なぜまあ自分の身が、この憂世を遁れて、出家しにくうすることか、さても合點の行かぬことわ。

評　失意の極厭世の念はおこしたものゝ、とかく執着する處があつて、いさぎよく思ひ立てなかつた述懷である。「憂き世には門させり」の假構の隱喩も面白いが、「などか」の疑問の痴呆もこの詩趣を煽揚する。「には」の助辭を味ふに、作者は既に閉門して籠つて居たものである。さらばその司の解けたのは、何かの過失などに因つたらしい。諸註多く、立身出世しがたいのを歎く意と見たのは、皮相の見である。且すでに「憂き世」とあるからは、出家遁世を願ふ意に見るが至當である。後世の、無意味にうき世といふとは異なつてゐる時代である。拾遺集雜上に再出したのには、詞書「つかさとられて侍りける時、いもうとの女御の許につかはしける」とある。けに事實はこの詞書の如く、妹の女御に愁訴して、その救解を求めたのであらう。年代をおすに光孝天皇の女御平等子は、この妹の女御か。

○

ありはてぬ命まつまの程ばかりうきごとしげく思はずもがな

大意　とてもこの世に生きどほしにはせられぬ、僅かな命の終るのを待つあひだぐらゐ、どうぞ憂い事を、多く思はぬやうにしたいことよな。

評 浮生の須臾なることは、電光石火である。されば、「命まつまの程ばかり」はせめて一生との意にも解せられるが、これは老境に臨んだ人の作と見るが至當で、せめてその餘生だけでも氣樂で過したいといふ希望である。然し理世は到底苦の世界で、希望の滿足は望み難い。そこに心の葛藤がある。

三句、古本に程だにもとあるがよい。

みこの宮のたちはきに侍りけるを、宮仕つかうまつらずとて、とけて侍りける時に　みやぢのきよき

筑波ねのこのもと毎にたちぞよる春のみやまの陰をこひつゝ

釋 ○みこの宮の云々「みこの宮のたちはき」は東宮の帶刀である。この東宮は醍醐帝の皇子保明親王（文獻太子）を申す。延喜四年二月立太子、延長元年三月、廿一歳にして薨じ給ひき。帶刀のことは、春下「はる風は花のあたりを」の詞書の解に既出。「宮仕つかうまつらず」は帶刀の官にありながら、不奉公であるをいふ。○筑波ねの　常陸國新治郡にある名山。「ね」は嶺の上略。○このもと　木の下。○春のみやま　春の宮に、深山をかけた。春の宮は、皇太子、又は皇太子の座す御所をさしていふ。

大意 筑波山のひどく茂つてあるやうに、惠深い方々へ、おわびを賴みにサ立ち寄ることわ、春宮樣のお蔭を戀ひ慕ひ〳〵申してサ。

評 集中、大歌所の東歌、

つくばねのこのもかのもに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし

を本歌として詠んだ。しかもこのもの響を踏んで、「このもと」と洒落れたのなど、輕い手際だ。「春のみ山」のいひかけの譬喩は、既に當時の套語であつて、要するに東宮の官人、又は女房達に贈つて、復職を歎願した作である。

時なりける人の、にはかに時なくなりて歎くを見て、みづからの、なげきもなく、よろこびもなきことを思ひて、よめる

清原ふかやぶ

ひかりなき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思もなし

釋 ○時なりける云々　權勢のあつた人が、急に權勢を失つて歎くのを見て、自分のはじめから權勢がないのだから、歎きも喜びもないことを思つて詠んだ歌との意。「時なりける」は時を得て權勢のあること。

大意 日の光の當らぬ谷では、春も餘所の事であるから、花の咲く事もなく、そのかはりに又、早く花が散つて悲しい思もしないわ、といふが表面の意で、自分のやうに、はじめからお見出しにも與からず、花も咲かぬ身は、あの人の今度のやうな歎きも無いわ、といふが裏面の意。

評 結句これが增しだの餘意がある。時も得ず沈んでゐるのを、みづから慰藉したので、官位の高いのを、日のよくあたる高嶺に、數ならぬ身を日影もさゝぬ谷に譬へ、花を權勢に見立て、その得喪を開落によそへた。表裏の二面各よく意が徹つて、諷意明白である。巧手。

初句、六帖に光まつとある。

かつらに侍りける時に、七條の中宮とはせ給へりける御返りごとに、奉れりける　伊勢

久方のなかにおひたる里なればひかりをのみぞ頼むべらなる

釋 ○かつらに侍りける云々　「かつら」は山城國葛野郡桂の里。「七條の中宮」は昭宣公藤原基經の女で溫子と申し、宇多帝の女御である。醍醐帝卽位の後、尊んで皇太夫人と爲し、中宮と稱し奉り、延喜七年六月三十六歳で崩ぜられた。家集の詞書には、「この女は、これかれいへど聞かず、宮仕をのみしてけるに、時のみかど召し仕ひ給ひけり。ようぞ人の言を聞かざりけると、心にも親なども思ひ渡りけるうちに、孕みにけり。さて男みこをぞ生み奉りける。わが親みづからも嬉しと思ひけり。仕うまつりし御息所も、后になり給ひにけり。生みたりける男みこは、桂の宮といふ所におきて、みづからは后の宮に侍ひけるに、雨のふる日打詠めてゐたりければ、后の宮のよみて給へりける。

月のうちの桂の人を思ふとて雨に涙のそひてふるらむ

御返しとて、本行の歌があり、次に「かくて、みかどおりゐさせ給ひて、云々」とある。文體を案ずるに、勢語に倣つて作つたものらしい。事實は大體は合つてゐるが、部分的には間違ひもありけである。○久方のなかにおひたる里　月中に生ひたる桂といふ名の里の意。月桂の故事は、秋上、「久方の月の桂も云々」の條に既出。但、「久方」は天象に關する多くの物の枕詞だから「久方の中に」を必ず月の中にの意と解するのは、すこし無理があるやうだが、足引の、を山、百敷の、を宮の意とする類の轉用としよう。眞淵は「中」を月の誤寫とした。

大意　この里は、月の中に生えてあるといふ桂の里であるから、月の光ばかりをサ、一途に頼むべきであつた、といふが表面の意で、自分は、中宮樣の御内に成り出た者ですから、中樣宮の御餘光を、ひたすら頼みには致しませうと存じますわ、といふが裏面の意。

評　地名から構想した諷喩である。中宮のお蔭を月の光に喩へたのも、旨く當てはまつてゐる。桂の語をつけずして、廻護し得たのも巧である。作者が中宮の女房として、帝寵を得たことは、中宮に對して背信の行爲であらねばならぬ。それ故作者はつとめて謙虛の態度を守り、中宮も寛假なされたことゝ見える。で作者が皇子のゐます桂の宮に居る折には、中宮から御存問のお使があつたので、そのあり難い思召に感佩の餘り、この歌を奉つたとすると、美しいこの交情に涙を催さぬ者はなからう。

二句、六帖に月のかつらのとある。意は明らかである。景樹は、これを執していふ、「本文は土佐日記に、『久方の月におひたる桂川底なる影もかはらざりけり』とあるを、後人の取り入れたるなるべし。紀氏のいと近く名高き伊勢の御の歌をとりて詠まれむも、いかゞなり」と。けれども、「里なれば」と婉にいつたのと、桂川とあらはにいつたのとは、既に大きな相違がある。況やこれは、「生ひたる」に、多樣の意趣を生じてゐる。意釋を味つてよくこの分寸を曉るがよい。

紀利貞が、阿波の介にまかりける時に、うまのはなむけせむとて、けふといひおくれりける時に、こゝかしこにまか

りありきて、夜ふくるまで見えざりければ、つかはしける　なりひらの朝臣

今ぞしる苦しきものと人またむ里をばかれずとふべかりけり

釋 ○紀利貞云々　紀利貞が阿波の國の介となつて、赴任するにつき、餞別するから今日來いといつてやつたのに、利貞はあちこちあるきまはつて、その日夜ふけまで待つたが、顏を見せなかつたので歌をよんでやつたとの意。利貞が阿波介に任ぜられたのは、元慶五年二月である。○かれず　離れず。

大意　人を待つは苦しいものといふことを、貴方が待てども〳〵來ぬにつけて、今サ始めて知りました、これではすべて、人を待つであらう所をば、不沙汰をせずに、早く往つて遣るべきでありましたわい。

評 諷刺の妙、殆ど人をして羞死せしめる。「今ぞ」の一語、實に骨に徹する冷語である。初二句は轉倒して問く敍法。

惟喬のみこの許にまかりかよひけるを、かしらおろして、小野といふ所に侍りけるに、正月にとぶらはむとて、まかりたりけるに、比叡の山の麓なりければ、雪いと深かりけり。しひて、かの室にまかりいたりて、をがみけるに、つれづれとして、いと物悲しくて、歸りまうできて、よみておくりける

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

釋 ○惟喬のみこのもとに云々　「かしらおろして」は三代實錄に、「貞觀十四年七月十一日、四品彈正尹惟喬親王、寢ヒ病、頓出家、爲ニ沙門一」とある。「小野」は山城國葛野郡小野鄕。上の「白雲のたえずたなびく」の條を參照ありたい。「室」は庵室のこと。この詞書は、勢語に、

かくしつゝまうで仕うまつりけるを、思の外に御ぐしおろし給ひてけり。む月に拜み奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでて拜み奉るに、徒然といと物悲しくおはしましければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事など思ひ聞えけり。さても侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、えさぶらはで、夕暮に歸るとて、

とあつて、この歌を擧げてあるが、文辭高妙を極めてゐる。比較すると、この集の文の拙處病處が歷々と數へられよう。全く後人が勢語の文をいろつて、書き入れたものとより思へない。景樹も同論である。

大意　あまりのことに、ふと忘れては、これは夢ではないかと思ひますわ、この深い雪を踏みわけて、かやうの山里にきて、君にお目にかゝらうとは、ほんに思ひがけたことか、いや思ひもかけぬことでありましたわい。

評 「ふみわけて」とあるに、その雪の淺くないことが暗示され、從つてその深い山里であることも推想される。とすると、これは賤山かつの住處にふさはしい場所で、なま貴人でも更に立ち舞ひがたい處である。然るにこゝで、先帝第一の皇子として、あはよくは儲貳の位にそなはり、遂に天位をも踐ませ給ふべき君惟喬を、御年

二十九の一若僧として拜み奉ることは、人生の有爲轉變のあるが中にも、餘りに痛ましい出來事ではないか。」なる程親王御自身は「住めば住みぬる」と、この白雲のたゞよふ峯の庵に、安住のお心持をお示しになつたとはいへ、人情から見ればとても堪へ得る處でない。況や、時はいつぞ正月である。世にあられた時は、年頭拜禮の廷臣等の出入で頗る繁華なものであつたのを、徒然として今は雪の中におはしますではないか。こゝに多感なる近昵の士臣業平が參りあはせては、いかに斷腸の思がしたであらう。その夢か現かとたどられたのも尤もである。要するに、親王が境遇上の變化に着想して、今昔二面の兩極端を、暗に對映させたのが、無量の感慨を搖曳させる所以である。二三の句のうつり、「思ふ思ひきや」の疊語、藕斷えて絲斷えざる趣がある。さはいへ、この種の作は、技巧ばかりのよくする所でない。全く眞情から流露した同情の熱語で、詩美の極處に到達してゐる。單にこの作者の歌中において、白眉たるばかりでなく、眞に千古の絶唱である。

深草の里にすみ侍りて、京へまうでくとて、そこなりける

人に、よみておくりける

年をへてすみこし里をいでていなばいとゞ深草野とやなりなむ

釋 ○深草の里に云々　深草の里に住んで居りまして、出京するといふので、深草に一緒に住んで居た人に詠んで贈つた歌との意。「深草の里」は哀傷「深草の野べの櫻し」の條に既出。○いとゞ深草　里の名の深草に、草の深い意をよせた。

大意　今私が、年久しく住んで來た、この里を出て去なうならば、たゞさへ深草の里が、いよ〳〵草深くなつて野となるであらうか。

評　あとに住み殘つて居られる貴方のさびしさを、御推察申すの餘意がある。蓋し官途などに就いての京住居となつたので、しばらく閑居の軒を竝べた深草の里人を驚かしたものであらう。初二の句、下句の襯染となつてゐる。「いとゞ」の一語を眼目とする。これによつて、もとから草深く住みなしてゐたことも明らかに、「野とやなりなむ」の誇張も、唐突でなくなる。

二句、伊勢物語塗籠本に宿をとある。

かへし　よみ人しらず

野とならばうづらと鳴きて年はへむかりにだにやは君はこざらむ

釋 ○うづらと鳴きて　鶉と共に鳴きての意。この「と」の助辭、雪と散る、花とちるなどのとの意と見ては穩やかでない。○かりに　狩に假初にをよせた。

大意　貴方のお詞によれば、この里が野となるまでも、わざ〳〵尋ねて來ては下さらぬらしいが、まこと野となつたらば、私はその野に住む鶉と一緒に、怨み泣きに泣いて、月日を送つて待ちませう、さすれば獲物のある野が出來たといふので、せめて狩ぐらひには、貴方はお出でなさらなからうか、いやお出でなされようわサ。

評　「野とやなりなむ」の一語、料らずこの奇怨を釀した。隣人の口舌はけに縱横で、在五の君が詩敵たるに愧ぢない。さて鷹狩は當時流行の遊技で、百敷の大宮人は、休沐の暇さへあれば、卽ち肥馬輕裘に郊野をあさり、遂には雉の產地を味ひわけるほどの通人もあつた。さればこそ、「かりにだにやは來ざらむ」と下待つ理由があ

るのである。「うづら」を、憂を寄せたとか、憂辛を寄せたとかいふ説は甚しい横入である。又この贈答を、勢語に、「深草に住みける女を、やう〳〵飽き方にや思ひけむ、かゝる歌をよみける」として、色めいた男女の贈答に作りなしてある。それに拘はつてはならぬ。

二句、勢語、六帖ともに鶉となりてとある。聞えやすいが、今は本文に據つて解した。結句、六帖、業平集には人のとある。

題しらず

我れを君なにはの浦にありしかばうきめをみつのあまとなりにき

この歌は、ある人、「昔をとこありけるをうなの、をとこ訪はずなりにければ、難波の三津の寺にまかりて、尼になりて、詠みてをとこにつかはせりける」となむいへる。

釋 ○なには　何に難波をかけた。○うきめ　憂き目に、浮布をよせた。○みつ　見つに三津をかけた。三津は、難波の御津の名によつた三津寺のことで、大福院と號して、今に大阪にある。○あま　海人に尼をよせた。

大意　貴方は私を、何のとあるかなしになされたこと故、私は憂い目を見まして、かやうに難波の三津寺の尼とまでなつてしまひましたわ。

評　この口氣を味つて、事相を斷ずると、けに左註にあるやうな事情であつたらう。眞淵は「いもせのことによりてならば、戀の部に入るべし」といつて、これを否認したが、この前後はみな閑居隱遁の詠を擧げてあるから、これも出家遁世のおもい意について、こゝに收めたのである。歌は緣語仕立の煩はしいものだが、甚だ口達者で、すべてを過去にいひなしたのが、悔恨の追懷を促す間接の力があつて、感哀がある。

かへし

難波潟うらむべきまもおもほえずいづくをみつのあまとかはなる

釋 ○うらむ　恨むに、浦見るをよせた。○みつ　見つに、三津をかけた。○あま　海人に、尼をかけた。○かは「か」は疑辭、「は」は歎辭。

大意　自分は貴方に、そのやうに恨まれさうな、折節も覺えないわ、それだのに自分の心の、どのやうな所を見つけて、愛想をつかして、三津寺の尼となつたのか知らぬ。

評　浦を見るべき間もないのに、いづれの所を見るぞといふ理窟から仕立てた。この贈歌に對しては、かう細やかにいひなすより外に法がなからう。

○

いまさらにとふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ

釋 ○八重葎して　八重葎を以ての意、「八重」は多數を意味す。「葎」は雜草で、今いふかなむぐらのこと。○門させりてへ　「てへ」はといへの約。

大意　今になつてから、尋ねて下されさうな人があらうとも思はれませぬわ、こちらは、八重に生ひ茂つた葎

で、門口もさしこめてあつて、はひれないといつてくれい。

評 殆ど忘れるほどうち絶えた人が、訪問するといふ使をよこしたか、或は言傳などしたかの折に、その返事としていひやつたものである。「八重葎して門させり」の誇張は、いよ〳〵その人の久しく訪はなかつたことを反映して、諷刺の妙を見る。

この歌拾遺集戀二に再出してゐる。

友だちの、久しくまうでこざりける許に、よみてつかはし　みつね

水の面（オモ）におふるさ月の浮草のうき事あれや根をたえてこぬ

釋 ○浮草　萍。根はあつても水面に漂ふので、根のないやうに、歌にはよみならつてゐる。○あれや　あれば。やの意。○根を　「を」は歎辭。

大意 貴方は何ぞ私に對して、浮草の憂いと思し召すことがあるかして、浮草の根の絶えてあるやうにうち絶えて、近頃はとんとお出がないわ。

評 さもなくばお出がありさうなものをの餘意があつて、人の久濶を諷し、かねて思慕の情を寓した。「五月の浮草」は折からの景物を借りたので、三句までは、「うき」にかゝる序であることは、既に萬葉集に、

時鳥なくをのうへの卯の花のうきことあれや君がきまさぬ　（卷八）

うぐひすのかよふ垣根のうの花のうき事あれや君がきまさぬ　（卷十）

とあるに同じい。「根を絶えて」の比喩を用ひて、一層の巧を加へたのに、時代の風調の相違が見られる。たゞし、内容の主想が既に作者の物でないから、どうもならぬ。

人をとはで、久しうありける折に、あひて怨みければよめる

身をすてゝ行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり

釋 ○あひて怨みければ　出會つて、その疎遠を咎めたのでの意。「て」文字は一本によつて補つた。

大意 自分は不斷お尋したいとばかり思つてをるが、今に御無沙汰してをるところを見れば、あの心奴が、とかく餘所事に紛れて、この身を打ち捨てゝ、わきへ往つてゐるのであらうか知らぬ、まことに思の外のものは、あの心奴でありましたわい。

評 作者の狡獪さ。私は知らぬが、心外なる奴は心よと空恍（トボ）けて、辯疏の詞を咄嗟に作つた、その機智には驚かされる。心と、思ふとの體用を、しばらく別箇の物に取り成した没理想を、この詩味のある處とする。二句、古本にいにやとある。この方が妥貼であらう。

宗岳（ソガ）の大頼（オホヨリ）が、越（コシ）の國よりまうできたりける時に、雪のふりけるを見て、「おのが思は、この雪の如くなむつもれる」といひける折によめる

君がおもひ雪とつもらば頼まれず春より後（ノチ）はあらじと思へば

釋 ○おのが思は云々　私が貴君をおもふ思は、この雪のやうに積つてをりますの意。これは大賴の詞。

大意 お詞のとほり、貴君の思がこの雪のやうに積ることならば、それはとても賴みになりませぬわ、なぜなれば、この雪のやうに、貴方の思も春からのちは、もうあるまいと存ずればサ。

評 がやうの座興的の歌は、不易不變の味ひを缺くが、その場では、出で榮えのするものである。後撰集戀六に、

兼輔朝臣の契りける女の歌とて、

しら雪のつもる思も賴まれず春よりのちはあらじと思へば

とある。初二の句、おのづから剛柔の差があつて、男女の性格が現はれてゐる。但いづれも同時代なので、後先が定めにくい。

かへし　宗岳大賴

君をのみ思ひこし路の白山はいつかは雪のきゆるときある

釋 ○思ひこし路　思ひ來しに、越路をかけた。

大意 いやく〳〵雪も雪によること、私は貴方の事ばかり思つて、はる〴〵と來ましたその越の白山は、何時まあ雪の消える時があるか、あの雪は春でも何時でも、消えはしません、私の思はその雪なのです。

評 雪ではあてにならぬと突つ込まれて、さそくに私のは白山の萬年雪ですと遣り返した。懸歌に比べると、ややふつくりした味ひに乏しい。いづれも機智の作で、感情のものではない。

結句、古本にきゆる時のあるとある。

越なりける人につかはしける　きのつらゆき

思ひやる越のしら山しらねどもひと夜も夢にこえぬ夜ぞなき

釋 ○思ひやる　想像すること。こゝは排悶の意ではない。

大意 貴方の事を、不斷都から思ひやつて居るので、あの北國の白山は、どのやうな山かは知らぬが、一夜さたりとも、夢に越えぬ夜はサないわ。

評 夢中の山川をいふことは、詩にあまた例があつて、あながち作者の物ではない。たゞ筆路の暢達自在のが、その特色であらう。「しら山しらねども」「一夜も」「夜ぞ」などの疊語反復が、聲調の圓滑な所以であらう。

古本に、二句越の白嶺の、四句夢のとある。

題しらず　よみ人しらず

いざこゝにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし

釋 ○こゝに　菅原や伏見の里をさす。○へなむ　經ようの意。「なむ」は希望ではない。○菅原や伏見の里　大和國添下郡。今菅原寺のある附近の地をいふ。山城の紀伊郡にも伏見の里があるが、この歌には交渉がない。

○あれまく　荒れむの意。「まく」はむの延言。

大意 どれ料簡をきめて、こゝに自分の一生は住んでくらさうぞ、この菅原の伏見の里はよい所であるのに、今もし自分まで餘所へ移つて行けば、荒れてしまふであらう事がまあ、をしいわ。

評 菅原の里は、萬葉集に、

大きうみの水底ふかく思ひつゝ裳ひきならし、菅原の里（卷二十）

と詠んで、奈良時代の西の京だから、宮人等は勿論、民庶の住まつてゐた所である。一旦延暦の遷都にあつて、世にある人、又はその蔭を憑むほどの人は、皆われ勝に新都に移住して、奈良の故里は、殊に西偏の菅原伏見のあたりは、瞬く間に淺茅が原と荒れたであらう。舊都の親しみを忘れかねた餘り、せめて自分だけなりとも踏みとゞまつて、殘年をこゝにして終へようとの決心、頗るやさしい情緒のものである。その實は作者が宮仕など辭して、年老い世に餘された憤を託したものではあるまいか。格調蒼古で、神韻悠長である。春上、「故里となりにし奈良の都にも」の詠と共に、奈良の舊都に寄懷した作での双璧である。

○

わが庵は三輪の山もとこひしくばとぶらひきませ杉たてる門

釋 ○三輪の山　春上「三輪山をしかも隱すか」の條に既出。山の麓に大物主神を祀つた大神（オホミワ）神社がある。○山もと　もとの下なりが略かれてある。

大意 私の家は三輪の山の麓であります、逢ひたくば尋ねてお出でなされ、杉の立つてをる門が、それでありますぞ。

評 三輪山のほとりに跡を晦まし、世を避けた人の、流石に人戀しさの思に堪へかねて、親しい友達などにいひおくつたものだらう。「戀しくば」と人事のやうにいつて來訪を催促してゐるが、實は自分が戀しいのである。かうした表裏の取り成しは詩味を饒かにする。三輪の神山は林木鬱蒼として、檜杉などが多いところ、乃ちその老杉を利用して、わが門のしるしと、稱道したのを趣向とする。造句簡勁で、格調もまた高い。景樹が、「上句はいまだ所も知らぬ人に示したるなり。されば友達の交にあらず」といつたのは、事情を解せぬ僻論である。隱逸みづから喜ぶ士が、決して一々住處報告の愚をするものではない。

初句、古來風體抄にわが宿はとある。俊賴口傳に、「こひしくばとぶらひきませ千早ぶる三輪の山本杉たてる門」とあるのは、この誤傳である。六帖に、三輪の大神の詠とあるのは、もとより妄りである。

わがいほは都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり　きせん法師

釋 ○たつみ　辰巳で、東南の方位。○しかぞ　然（シカ）ぞの意。○世をうぢ山　世を憂といふに、宇治山をかけた。山は山城國宇治郡、今喜撰が嶽といふ。鴨長明の無名抄に、「喜撰が住みける迹あり。堂はなけれど、礎など定かにあり」といふものである。

大意 自分の庵室は、京から辰巳に當る所で、世が憂いとて籠る宇治山であると、人はいふのであるわ、しかも、自分はかくの通りサ、憂いとも思はず氣樂に住んで居ますわ。

評 都をいひ人をいふ。世間を對象としてその安住を誇つてゐる處は、眞の脫俗者でないかも知れぬ。けれども彼れは宇治山の隱遯者としてその一生を終へた。とにかく彼れの生活が出てゐる所を取る。貫之がこれを評した、「詞かすかにして、はじめをはりたしかならず。いはゞ、秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し」の語は

古來諸家のひとしく首肯する所である。

六帖に、初句わが宿は、結句いふらむとある。二條關白記に、人毛とあるを、近藤芳樹は執して、「人は」は誇つた口調だから隱者喜撰の語にふさはないと評したが、それでは「然ぞすむ」が一向利がなくなる。やはり本文のまゝがよい。

あれにけりあはれ幾世の宿なれやすみけむ人の音づれもせぬ　よみ人しらず

釋 ○宿なれや　宿なればやの意。

大意 この家はひどく荒れはてたわい、抑もまあこのやうにして、何年になる家であればかして、昔住んだであらう人が、たえて訪ひ音づれもせぬことぞ。

評 廢宅を詠じたのである。住み捨てゝも、程經ぬ家は、その主人の訪ひ音づれたり、或は預りのをのこなどがゐて、さうは荒さぬものなのに、かうも荒れてゐるのは、數多の星霜を閲した宿だらうと思ひやつたのである。初句で切れたのは、この集からはじまつた體製である。

六帖に、作者を伊勢とある。この歌、伊勢物語にも詞を作つて出してあるから、勢語を伊勢の作と思つた人が、六帖のにも、勢語によつて、その名を掲げたのであらう。伊勢集にも出てゐる。

奈良へまかりける時に、あれたる家に、女の琴ひきけるを

きゝて、よみて入れたりける　良岑宗貞

わび人の住むべき宿と見るなべになげき加はる琴の音ぞする

釋 ○よみて入れたりける　歌を詠んで、その家のうちにいひ入れた歌との意。

大意 世にありわびた人が住みさうな家であるがと見れば、それにつれて又、その歎きの添ふ琴の音がサするわ。

評 御境遇は深くお察し申すと、同情したのである。琴の音に歎きの加はることは、昔からいふことで、萬葉集にも、

琴とればなげき先だつけだしくも琴の下樋に妻やこもれる　（卷七）

わがせこが琴とるなべに常人のいふなげきしもいやしきますも　（卷十八）

と詠んだ、一向知らぬ家でも、知らぬ人へでも、歌など詠み入れるのは、當時の常習であるが、これが色好の作者の所爲だと思ふと、何だかをかしくも感ずる。

初瀬にまうづる道に、奈良の京にやどれりける時よめる　二條

人ふるす里をいとひてこしかども奈良の都もうき名なりけり

釋 ○初瀬にまうづる道に　大和の長谷寺に詣づる道にての意。初瀬は春上「人はいざ心も知らず」の條に既出。

大意　珍しい人ばかりもてはやして、自分などは飽かれて、古物にされる都を、いやに思つて出てはきたれども、この奈良の京も古里といふによつて、自分の爲には憂い名であつたわい。

評　思ある身には、聯想の惹かれるものは、名を聞いても厭はしいのは當然である。作者は男にふられての憂さ晴し、否戀を祈りに初瀬詣を企てたのであらう。下句の措辭頗る簡約を極めてゐる。

題しらず　　よみ人しらず

世の中はいづれかさしてわがならむ　ゆきとまるをぞ宿と定むる

釋　○わがならむ　わが物ならむの略。

大意　この世の中は假の世であるゆゑ、どれが一つこれぞといつて、自分の物であらうぞ、自分の物とては無いわ、それ故住居も、何處であらうが行きとまつた所をサ、自分は宿ときめて居るわ。

評　行雲流水行脚の覺悟を述べた。一體我れが無ければ我が物も無い、隨つて我が宿と定まつた處も無い事になる。樹下であらうが、石上であらうが、その問ふ所でない。往きつき次第の野伏山伏である。佛者が常套の文句で、作者は僧侶であらう。

○

逢坂のあらしの風は寒けれど　ゆくへ知らねばわびつゝぞぬる

釋　○逢坂　離別「あふ坂の關しまさしき」の條に既出。○ゆくへ　行方。○知らねば　知られねばの意。

大意　この逢坂山の嵐の風は、ひどく寒いけれど、さればとて、さして外に行くべき方もわからぬゆゑ、難儀しながらもサ辛棒して、こゝに寢るわ。

評　ある漂泊者の作であらう。都を出ての第一足迹を逢坂山に印して、夜嵐の膚に寒くて、夢もまどかならぬまに思ひやれば、何處とあてどもない旅の空で、泣寢入に寢入るより外はない。今昔物語に蟬丸の歌として、

逢坂の關のあらしのはげしきにしひてぞゐたる世をすぐすとて

とあるは、或はこの下句を作りかへて、傳へたものかも知れない。今昔のは一種の人生觀を歌つてゐるので、その意味において感愴がある。これはさすらひの苦患を卒直に歌つたもので、少し理路にわたつた敍述は面白くないが、眞摯な點がある。

六帖に、三句はやけれど、結句わびつゝぞふるとある。

○

風のうへにありか定めぬ塵の身は　ゆくへも知らずなりぬべらなり

釋　○塵の身　塵の如き身。

大意　風にふき上げられて、居所の定まらぬ塵のやうな、この身は、丁度その塵のやうに、何處へどうなつて行くか、行先もわからずなつてしまひさうなわい。

評　これも行脚僧などの作であらう。「塵の身」の混喩は佛經中から出發した舊い想だが、「ゆく方も知らず」と聯想を馳せたのは、腐を化して新としたものである。「風のうへにありか定めぬ」は無理な辭樣で、うへの語が

浮いてゐる。必ず風前塵の直譯と見るべきである。

家をうりてよめる　伊勢

あすか川淵にもあらぬわが宿もせに變りゆくものにぞありける

釋 ○せに　瀬にに、錢をよせた。

大意 飛鳥川の淵こそ、淺瀬に變る物とは聞き及んで居るが、その飛鳥川の淵でもない自分のこの家も、思ひ寄らず瀬にかはつて行く物でサあつたわい、その瀬にといふのは、實は錢のことサ。

評 有爲轉變を歎ずる際にも、なほ錢に換るの酒落を忘れないのは、蓋しこの御の持前の口吻である。どこまでも遊戯氣分が伴つてゐる。上の

世の中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる

を本歌としたものであることは勿論である。古來の註家、皆この御の零落のはてに、家を賣つたものと解してゐる。けれど、延喜時代はこの御を寵幸された宇多帝及び敦慶親王もまし〳〵たのに、それ程の窮乏をも知らず顔に過されることは、人情あるべくもない。況や勅撰の集にその名を署して擧げるとなると、且は君の過ちを擧げ、且は作者が辱をあらはすに似てゐるではないか。よつて想ふに、これは他に理由があつて、家を讓つたと斷ずべきである。

三句、古本にわが宿はとある。

筑紫に侍りける時にまかり通ひつゝ碁うちける人の許

に、京に歸りまうできてつかはしける　きの友のり

故里は見しごともあらず斧の柄のくちし處ぞ戀しかりける

釋 ○見しごと　「ごと」は如くで、碁をよせた。○斧の柄のくちし　爛柯山の故事である。書言故事に、「晉王質、代レ木到二信安石室山一、見二二老叟圍レ棋、與二質一物一如二棗核一、含レ之不レ覺レ飢、看レ棋未レ終、視二斧柯一已爛、歸無二復舊時人一」とある。述異記には、老叟が童子となつてゐる。

大意 久しぶりに歸つて見れば、京の故郷は何もかも模樣が變つて、以前見たやうにもなく、知らぬ土地に來たやうである、それ故、却つて故郷でも無い處の、貴方と碁を打つて、何事も忘れて面白く暮した所がサ、戀しい事であつたわい。

評 信安の樵者王質の境遇を應用して、今の感想を詠んだ。作者が筑紫に居たのは、國衙の小吏であつた折の事と思はれる。すると、歸期におのづから限りがあるので「見しごともあらず」とまで、故郷の變つてしまふことはありさうもない。蓋し、抑揚の筆法でさう誇張したので、斧の柄を取り出したのが、その碁客に對する挨拶である。「見しごと」で爛柯の故事を意識させることは、この頃流行つたことゝ見えて、貫之も、

見しごともあらずもある哉ふる郷は花の色のみあせずぞありける

と詠んでゐる。

女ともだちと物語して、別れてのちにつかはしける　みちのく

あかざりし袖の中にや入りにけむわがたましひのなき心ちする

大意　私の魂ひは、殘り多く思つて別れた、貴女方の袖の中に這入つてしまつたのであらうか、貴女方に別れてから、うつらくとして、魂ひがこゝに無いやうな心持がしますわ。

評　もとくに眞摯の作ではない。只うまい事をいつて喜ばせたものである。想は萬葉卷四に、

わがせこが著せる衣の針目おちず入りにけらしなわがこゝろさへ

とあるに同じであるが、これはいひ過ぎてゐるから、含蓄の味ひはやゝ乏しい。

寛平の御時に、もろこしのはうぐわんに召されて侍りにける時に、東宮のさぶらひにて、をのこども、酒たうべけるついでに、よみ侍りける　藤原忠房

なよ竹のよ長きうへに初霜のおきゐて物をおもふ頃かな

釋　寛平の御時云々　宇多帝の御世に遣唐使の判官に任ぜられました時に、東宮御所の侍所で、侍臣達が御酒を頂いたその序に詠みました歌との意。扶桑略記に、寛平六年八月二十一日、遣唐使の詔の出たことが見えてゐる。但これは派遣の豫定だけで沙汰やみになつた。「もろこしのはうぐわん」は遣唐使の判官で、遣唐使には大使、副使、判官、主典の役人がある。「東宮のさぶらひ」は春宮坊の侍所。○なよ竹の　なよ竹は、嫋(ナヨ)びかなる竹の意と思はれる。或はいふ長節(ナガヨ)竹の義かと。和名鈔に長間笋を、よなが竹と訓んである。節(ヨ)はふしとふしとの間の稱。こゝは、節(ヨ)長きに、夜長きを寄せた。○おきゐて　置きに、起き居てをかけた。

大意　嫋竹の節の長いうへに初霜がおくこの頃、夜の長いうへに寢もせずに起きて居て、遠方へ行く別のことについて、物思をすることよ。

評　東宮の侍臣達は御酒下されて、はめを外しての大愉快。獨り作者忠房は千波萬波を隔てた外國行の苦勞な旅をひかへてゐるので、一向に浮かぬ顔付をして、こんな歌を詠んだのである。遣唐の詔命は八月下旬に出てゐるから、丁度これは九月初旬あたりの初霜のおきゐる夜長の頃であつた。この秋思に催されては、何の思もない人でも、感傷せぬものはなからう。況やこの作者の境遇としては、いかに溜らなく感じたのであらう。序歌としては普通の出來である。今昔物語に、敦忠の中納言が、「殿守の伴の御奴(ミヤツコ)心あらばこの春ばかり清朝めすな」の名歌詠まれた時、小野宮の實資の大臣が、そのあへしらひにこの歌を誦せられたことが見えてゐる。それほど大した作でもなし、時節にも合はぬのに、いさゝか不思議である。

題しらず　よみ人しらず

風ふけばおきつ白浪たつ田山よはにや君がひとり越ゆらむ

ある人、「この歌は、昔、大和の國なりける人のむすめに、ある人住みわたりけり。この女、親もなくなりて家もわろくなりゆくあひだ、この男かふちの國に人をあひ知りて通ひつゝ、かれやうになりゆきけり。さりけれども、つらけなるけしきも見えで、かふちへいく毎に、をとこの心の如くにしつゝいだしやりければ、怪しと思ひて、もしなきまにこと心もやあると疑ひて、月の面白かりける夜、かふちへい

くまねにて、前栽のなかに隱れて見ければ、夜ふくるまで琴をかき鳴しつゝ、うちなげきてこの歌をよみて寢にければこれをきゝて、それよりまた、ほかへもまからずなりにけり」となむいひ傳へたる。

釋 ○立田山　大和國平群郡大和川の上流に沿つた龜瀨越の處である。その附近立野といふ所に、立田神社がある。○左註の「かれやう」は離れ方。「前栽」は庭前の植込。

大意　風がふけば、沖の白浪は立つ事であるが、その立つといふ名の立田山を、時もあらうによる夜中に、君が只一人、越えてお出でなさるであらうかまあ。

評　さてもお案じ申されることかなの餘意がある。元來立田山は、神武紀に、

赴二龍田一而其路狹嶮、人不レ得二竝行一、

とある嶮岨で、書でも歩み苦しく、心細い山越である。それを時もあらうに夜中、しかも一人で越えるとなつては、その辛苦と心細さとは、まことに想像の外であらねばならぬ。と思ふ人のうへに想を馳せて氣遣はしく案じ暮らす處に、婦人のやさしい情致が動いて見える。初二句の序は、

わたの底沖つしら浪たつ田山いつか越えなむ妹があたり見む　（萬葉二）

と同一であり、構想はまた、

二人行けどゆき過ぎがたき秋山をいかでか君が獨りこゆらむ　（萬葉卷二）

朝霧にぬれにしころもほさずして一人や君が山路こゆらむ　（同九）

玉かつま島くま山の夕ぐれにひとりか君が山路こゆらむ　（同十二）

と符合する。いづれこれらを撮合して作つたものらしいが、おのづから別趣をそなへてゐるのは、老手である。とはいふものゝ、初二句の序は、大和人の詠としては不似合な取材で、氣分がしつくりと來ない氣味がある。萬葉の「わたの底沖つ白波」の詠はこれとは別裁で、作者の位置や環境が違ふから一緒にはならない。舊說に「白波」を白波綠林の意として、立田山に盜人を出した俗解がある。滑稽ではあるが、この序が突飛に不調和に感じた結果である。

左註は伊勢物語から轉寫したものと思はれる。

結句、六帖、新撰和歌、金玉集等にゆくらむとあるは味ひが淺い。六帖に、作者をかぐ山の花の子とある。何に據つたものか。

○

たがみそぎゆふつけ鳥かから衣たつ田の山にをりはへてなく

釋 ○たがみそぎ云々　誰が禊してゆふつけたる鳥かの意。「ゆふつけ鳥」の鷄であることは、戀一「あふ坂のゆふつけ鳥もわが如く」の條に解した通りである。但この歌に、「たがみそぎ」とあるを思へば、あながち世の中騷がしき時の公の秡のみではなく、箇人でも、おのが罪咎をこのものに負せて禊秡をなし、さて神に獻つたものと思はれる。社頭に鳥居のあるも、その根源には種々の說もあるが、實際鷄のとまり木として應用された時代があつての事であつた。○から衣　「たつ」にかゝる枕詞。

大意　たれが禊をして、放した庭鳥であるかしらぬ、この立田山に長く續けて、頻に鳴くわ。

評　立田山に鷄の鳴くことのふさはしからぬのを咎めてはならぬ。作者も既にこれをいぶかしんで、一度は聞き

答めたのである。しかし、立田の神垣あることに心付いて、「たがみそぎゆふつけ鳥か」と思ひやつたものだ。結句、六帖にたちかへり鳴く、猿丸集にうちはぶきなくとある。

○

忘られむ時しのべとぞ濱千鳥ゆくへも知らぬ迹をとゞむる

釋 ○迹をとゞむる　濱千鳥の迹は、文字をさしていつた。昔支那で黄帝の時、蒼頡が鳥迹の文を見て字を作つたといふ事、淮南子、呂氏春秋、史記等に出てゐる。

大意　のちく人に忘られよう時に、これを見て思ひ出してもらはうと思つてサ、丁度濱千鳥が飛んでその行方も知らぬのに、砂に足迹を殘してあるやうに、鳥の迹と世にいふ手迹を、ろくに書き方も知らぬのに書きとめておくわ。

評 身後の爲に、何か書きおく時の作であらう。「ゆくへも知らぬ跡」は文字が拙くて、筆の行き方も知らぬ意を、千鳥のうへで喩へていつたのである。

貞觀の御時、萬葉集はいつばかり作れるぞ」と問はせ給ひければ、よみて奉りける　ふんやのありすゑ

神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふるごとぞこれ

釋 ○貞觀の御時云々　清和帝の御時、萬葉集は何時頃作れるぞとの御尋あつたので、そのお答へに詠んで奉つた歌との意。萬葉集のことは、序文の所でいつてある。○ふりおける　降り置きてあるの約。○ならの葉の名におふ宮　楢の葉の奈良といふ名を負ひ持てる宮の意。卽ち奈良に宮處のあつた時代をさす。○ふるごと　古言。舊い詩歌の類を稱した當時の語。

大意　十月頃の時雨が降りたまる楢の葉の、その奈良といふ名のついた宮の御時代に出來ました、古歌の集がサ、これこの萬葉集で御座ります。

評 奈良時代の詞藻は、早くも世に忘られて、清和帝の頃は、その出來の時代すら覺束なくなつたのは、蓋し弘仁、天長の厄運に際會した爲であらう。もとより萬葉集は平城帝以前のものであるが、撰者貫之が、この集の序文に書いた年代の趣を以て推すと、この奈良の宮も、平城帝の御代の意で採つたものと思はれる。然し作者の意は奈良の京時代といふのであつたらしい。それもその筈、この詞書の趣によれば、帝は萬葉集の撰著された時代をお尋ねになつた事と思はれるのに、有季は採錄の中心となつてゐる歌の時代を以てお答へしてゐる。これでは矛盾した御挨拶になるので、殆どつんぼ話にひとしい。これは全く詞書の書き方のわるいので、帝のお尋ねは撰著の時代の事では、必ずなかつたに相違ない。この歌筆鋒が頗る勁健で、緊張してゐるうへに、敍述の詩的なのは嬉しい。上句の序は、時雨の名殘が楢の枯葉にたまつた、神無月の卽景である。「ふりおける」は萬葉集に雪又は霜によんである。時雨にはいかゞといふ説もあるが、それは見方が委しくない。

寛平の御時、歌奉りけるついでに奉りける　大江千里

蘆たづのひとりおくれてなく聲は雲のうへまで聞えつがなむ

釋 ○聞えつがなむ　段々に先へと聲を傳へてゆくを、「聞え繼ぐ」といふ。「なむ」は希望の辭。

大意 蘆邊の友鶴が、皆立つた中に、一羽おくれて鳴く聲は、雲のうへまで聞えるやうに取り次いでほしい、といふが表面の意で、他人は、皆官位昇進されるのに、自分一人後れて歎いて居る聲は、お上のお耳にまで達して頂きたい、といふが裏面の意。

評 作者の歌を召された折、その序にこの歌を詠んで愁訴したのである。「つがなむ」といつたのは、作者は地下の卑賤で、直に奏上など出來る身分でないから、傳奏を希ふの意味である。諷喩を用ひたのは、かゝる場合に、最もふさはしい裁製である。下句は詩經に、

鶴鳴二于九皐一、聲聽二于天一。

とあるによつてゐる。作者は流石に漢學者の子で、その句に來歴が多い。

六帖には、作者を千古とある。

人しれず思ふこゝろは、はる霞たち出でて君が目にも見えなむ　ふぢはらのかちおん

釋 ○春霞　「たち」にかゝる序。

大意 人には知られずひそかにわが望み願ふこの心は、春霞のやうに立ち現はれて、お上のお目にもとまつてほしいわ。

評 「思ふ」は人を思ふのではなく、心配苦勞などの「思ふ」である。上のと同じ官途の陸沈を歎いての作である。「君」はこの人の身分から推すと、直に天子をさしたのではなく、知己の上官などを斥したと思はれる。

歌めしける時に、奉るとて、よみて、奥にかきつけて奉りける　伊勢

山川のおとにのみきく百敷をみをはやながら見るよしもがな

釋 ○百敷を　宮にかゝる枕詞で、「百敷」は百磯城の義。大宮所は、あまたの石垣を築き固めてあるからいふ。但こゝは、百敷を直に大宮のことに轉用してある。○みをはやながら　身を以前のまゝながらにしての意。「はや」は早くの意。水脈早を寄せた。

大意 山川は音が高くて、水脈の早いものである、その山川のやうに音にばかり、只今は承つて居る御所の御有樣を、私が宮仕を致して居りました以前の身で、今も參つて拜見する法もありたいと存じますよ。

評 この御、七條の后の宮の女房として、また寵幸渥い更衣として、宇多帝の後宮にあつた間は、何の思ふ事もなく禁中を立ち馴らしてゐた。今は、宇多帝は上皇となつて朱雀院に遷居、隨つて后妃の人々も禁中を出てしまつた。代りに新主上醍醐の帝が禁中に居られる。すべてが入り代りだ。作者もそれ以來、上皇の御所や自分の里の家などに往來して、禁中を見る機會はなくなつてしまつた。たまゝ〳〵新帝から歌召された折、昔の花やかな夢を回想して、その追憶に耽り、今一度以前の身分で禁中を立ち馴らして見たいものと思ふのも偶然でな

い。しかし「身をはやながら」と昔に返すことは出來ない相談で、それをなほ希望することが、理窟を忘れて感情の主となつたことを思はせる。但「みをはやながら」は例の刻琢に過ぎる。

古今和歌集卷第十九

雜體

長歌

題しらず

あふことの、まれなる色に、おもひそめ、
あまぐもの、晴るゝ時なく、富士のねの、
おもへども、逢ふ事かたし、なにしかも、
わたつみの、沖をふかめて、おもひてし、
いたづらに、なりぬべらなり、人をうらみむ、
かくなわに、おもひみだれて、ゆく水の、
おもへども、えぶの身なれば、ふる雪の、
あしひきの、山した水の、こがくれて、

よみ人しらず

わが身はつねに、
燃えつゝとはに、
人をうらみむ、
おもひは今は、
絶ゆる時なく、
けなばけぬべく、
おもひはふかし、
たぎつ心を、

たれにかも、相かたらはむ、色にいでば、人知りぬべみ、
すみぞめの、ゆふべになれば、ひとりゐて、あはれ〳〵と、
歎きあまり、せむすべなみに、庭に出でて、たちやすらへば、
しろたへの、ころもの袖に、おく露の、けなばけぬべく、
おもへども、なほ歎かれぬ、春がすみ、よそにも人に、
あはれと思へば。

釋 ○雜體　ザフテイ、ザツテイと音讀し、又くさ〴くのすがたと讀んでもよい。この卷には、長歌、旋頭歌、及び短歌の一部なる誹諧歌の諸體を收めてあるのでいふ。上の雜歌と混じてはならぬ。又、本卷の長歌は、本集中の糟粕ともいふべく、殆ど細評に値しない。誹諧歌も内容の疎末なのが多いので、折々評を略した。

○長歌　古本に短歌とあるが、その歌は長歌だから、誤であることは無論である。舊說に彼れ是れの解はあるが無用の辯で、紹介するまでもない。

○稀なる色　色は色彩の意と、色情の意とをかねた。○思ひそめ　思ひ初めに、染めをよせた。○天雲の（アマ）　○富士の根の　ともに枕詞。○とはに　常に。○沖を深めて　心の奥を深めての譬喩。沖と奥とはもと同語。○行く水の　枕詞。○かくなわに　「かくなわ」は、いにしへの唐果子（カラクダモノ）である。和名鈔に、「結果、形如二結緒（ユル）一、此間（コヽニモ）亦有レ之、和名、加久之阿和（カクノアワ）」と見え、顯註に、「唐果子の中に、とかくちがへたる物の、透垣（スイガキ）などのやうに亂れて製りたる油物なり」とある。されば、かく繩の如くに「亂れ」とかゝつた枕詞。○ふる雪の　枕詞。○えぶの身云々「えぶの身」は閻浮（エンブ）の身、閻浮は梵語閻浮提（エンブダイ）の略で、人界をいふ。この世の人間の身なれば、思はじと思へどもかなはずとの意。えぶを、崇德院の御本に、てふとあるに據る說は采らない。○あしひきの山下水の木がくれてたぎつ　窃かに思にたぎるの意の譬喩。戀一、「足引の山下水の木隱れてたぎつ心をせきぞかねつる」に據つたものか。○墨染の　枕詞。○たちやすらへば　躊躇すること。○白たへの　○おく露の　○春がすみ　ともに枕詞。

評 「人を恨みむ」の句、上下に續かない。思といふ語九箇所、「思へども」と續いたのが三箇所、「あふこと」と續いたのが二箇所、その他同意の重複もある。「ふる雪の消なば消ぬべく」、「おく露の消なば消ぬべく」は、わざとの疊句で、對揚せしめたのだらうとも思はれるが、それも不分明で、殆ど蕪雜で、意を成さない。景樹は「或は二首混同したるならむ、足引の山下水云々より切り離して見れば、めでたき長歌なり」といつた。六帖には、古き長歌として、これを擧げてある。まことに平安の京となつての古製と見え、その五七の格調の亂れは、僅に二箇所あるのみで、しかも語句の今調に出來てゐるのは、仁明帝の代に奉つた興福寺の僧徒の長歌のさしつぎの作と見られる。

ふる歌奉りし時のもくろくの長歌　つらゆき

ちはやぶる、神のみよより、くれ竹の、よゝにも絶えず、
あま彦の、音羽のやまの、春がすみ、思ひみだれて、
さみだれの、そらもとゞろに、さよふけて、山ほとゝぎす、

鳴くごとに、たれも寢覺めて、からにしき、たつ田の山の、
もみぢばを、見てのみしのぶ、かみな月、しぐれ〳〵て、
冬の夜の、庭もはだれに、ふる雪の、なほ消えかへり、
としごとに、時につけつゝ、あはれてふ、言をいひつゝ、
君をのみ、千代にといはふ、世の人の、思ひするがの、
ふじのねの、もゆるおもひを、飽かずして、わかるゝなみだ、
藤ごろも、織れるこゝろも、やちくさの、言の葉ごとに、
すべらぎの、おほせかしこみ、まき〳〵の、中につくすと、
いせの海の、浦のしほ貝、ひろひ集め、取れりとすれど、
たまの緒の、みじかき心、思ひあへず、なほあら玉の、
年を へて、大宮にのみ、ひさ方の、ひるよるわかず、
つかふとて、かへりみもせぬ、わが宿の、しのぶ草おふる、
板間あらみ、ふる春雨の、もりやしぬらむ。

釋 ○ふる歌奉りし時云々　序に、「萬葉集に入らぬ古き歌を奉らしめ給ふ」とある。「もくろく」は目錄で、その目じるしの詞をよみつらねた長歌との意。○ちはやぶる　○くれ竹の　○あま彦の　ともに枕詞。○音羽の山の春がすみ　思ひ亂れての「亂れ」へかゝる序で、春上、「春のきる霞の衣ぬきを薄み」に據つた。○さみだれの云々　夏、「五月雨の空もとゞろに時鳥」に據つた。○からにしき云々　唐にしきは、「立田」の枕詞。秋下、「立田川紅葉亂れて流るめり」、又、同、「戀しくば見てもしのばむもみぢ葉を」などに據つた。○かみな月しぐれ〳〵て　冬、「今よりはつぎて降らなむわが宿の」、同、「白雪のふりて積れる山里は」などを思つたものか。○君をのみ云々　賀、「君が代は千代に八千代にさゞれ石の」、同、「鹽の山さし出の磯になく千鳥」に據つた。○思するがの云々　戀一、「人しれぬ思を常にするがなる富士の山こそ」に據つた。○飽かずして云々　離別、「あかずして別るゝ涙瀧にそふ」に據つた。○ふぢ衣おれる心　哀傷、「藤衣はつるゝ絲は」に據つた。○やちぐさ　八千種。○つくすと　盡くすとての意。○伊勢の海の浦のしほ貝　「ひろひ集め」の序。汐貝は汐海の貝のこと。○玉の緒の　「みじかき」の枕詞。○みじかき心　才の足らざる心の意。○思ひあへず　わきまへがたいをいふ。○あら玉の　年の枕詞。○ひさ方の「日」とか、つて、晝の枕に用ひた。○しのぶ草　垣衣。○板間あらみ　板間の疎さに。板は屋を葺いた板をいふ。○もりやしぬらむ　雨の漏るに、よい歌のもれるのを喩へた。

評 「千早振云々」はまづ歌の來歷をいひ、「あま彦の云々」は春、「さみだれの云々」は夏、「唐にしき云々」は秋、「神無月云々」は冬と、四季を擧げて、「時につけつゝ云々」の句で一括し、「君をのみ云々」は賀、「世の人の云々」は戀、「あかずして別るゝ」は離別に羈旅をかね、「ふぢ衣」は哀傷、「やちぐさの言の葉」に物名、雜、雜體、大歌所の歌などをかね、「すべらぎの云々」よりは、勅命を畏んで撰著に從事し、つとめてよい歌を網羅

する積りなれど、われ等が短才にては、良否を思ひあへずして、洩れたのもあらうといつて、年を越えて、宮中の昭陽舎に詰め切りで撰んだが、遂に春雨のふる頃にまで及んだ趣を含めた。序に延喜五年四月とあるは最後の完成で、ほゞ脱稿のうへ、目録を作つたのは、その年の二三月の交であつたらう。

ふる歌にくはへて奉れる長歌

壬生忠岑

くれ竹の、よゝのふるごと、なかりせば、伊香保の沼の、
いかにして、おもふ心を、のばへまし、あはれむかしへ、
ありきてふ、人まろこそは、うれしけれ、身は下(シモ)ながら、
ことの葉を、あまつ空まで、きこえあげ、すゑの世までの、
あととなし、今もおほせの、くだれるは、塵につげとや、
塵の身に、つもれる事を、問はるらむ、これをおもへば、
いにしへも、くすりけがせる、けだものの、雲に吼えけむ、
こゝちして、ちゞのなさけも、おもほえず、ひとつ心ぞ、
ほこらしき、かくはあれども、照るひかり、近きまもりの、
身なりしを、たれかは秋の、くる方に、あざむきいでて、
みかき守、とのへもる身の、みかき守、をさ〳〵しくも、
おもほえず、こゝのがさねの、中にては、あらしの風も、
聞かざりき、今は野山し、近ければ、春はかすみに、
たなびかれ、夏はうつせみ、なきくらし、秋はしぐれに、
袖をかし、冬は霜にぞ、責めらるゝ、かゝるわびしき、
身ながらに、つもれる年を、しるせれば、いつゝのむつに、
なりにけり、これに添はれる、わたくしの、老のかずさへ、
やよければ、身はいやしくて、年たかき、事の苦しさ、
かくしつゝ、ながらの橋の、ながらへて、難波(ナニハ)のうらに、
立つなみの、波のしわにや、おぼほれむ、さすがにいのち、
をしければ、こしの國なる、しら山の、かしらは白く、
なりぬとも、おとはの瀧の、おとに聞く、老いず死なずの、
くすりもが、君が八千代を、若えつゝ見む。
君が代にあふ阪山のいはし水木がくれたりと思ひけるかな

釋 ○ふる歌云々　これも上のと同時ので、添へて奉つた歌である。○くれ竹の　枕詞。○ふるごと　古言。○伊香保の沼　上野國群馬郡今の榛名湖のことと思はれる。こゝは「いかにして」の枕詞。○のばへ　述べの延言。○むかしへ　昔方。いにしへと同じい。○人まろ　柿本人麻呂。飛鳥藤原の宮の代の大歌人で、官五位に至らない。○しもながら　下官ながらの意。○あまつ空　大宮の内を譬へていふ。○あと　例の意。○今もおほせの云々　いにしへ人麻呂の歌を召しけるに續いて、今も我が徒に、「歌奉れ」の仰言の下つたのは、かの人麻呂の例に繼けといふことかとの意。「塵につぐ」は文選に、「遙々播二清塵一、清塵竟誰嗣」とあつて、古き迹をまなぶを、繼塵といふのである。但、人丸の歌を召されたことは物に見えない。○塵の身　塵の如き身で、輕い卑しい身を譬へていふ。○つもれること　積れる言で、塵の緣語。○いにしへも藥けがせる　この二句、原文にない。六帖、及び忠岑集によつて補つた。神仙傳に、淮南王劉安が、仙藥を服して登仙した事を記したところに、「安、臨二去時一、餘藥器還在二中庭一、鷄犬舐二啄之一、盡得レ昇レ天、故鷄鳴二天上一、犬吠二雲中一」とある。獸などの仙藥を舐めたのだから、「けがせる」といつた。○ひとつ心ぞ云々　俗に一心にといふに似てゐる。こゝは撰者の數に入つたのを喜び誇つたのである。○照るひかり　天子を譬へ奉る。○近きまもり　近衛の直譯。作者は左近衛の番長であつた。○秋のくる方に云々　「秋のくる方」は西である。作者はこの時、左近衛の番長から、右衛門の府生に轉任した。衛府の陣屋は、すべて左は東、右は西なので、東西の方位を以て敍した。さて、これは順任であつて、左遷ではないが、大御身に近づき奉る近衛の職を去つたのを、不本意のやうにいひなして、「あざむきいでて」といつた。○みかきもり云々　元來宮城の警衛は、その禁内を近衛、中郭を兵衛、外郭を衛門府といふ風に分擔してゐた。右衛門の府生たる作者は、外郭の御垣を守るのが職であつた。故に、「とのへもる身の御垣守」といつた。「とのへ」は外の重で、外郭のこと。○をさ〳〵しく　長々しにて、立ち優つたの意。○こゝのがさね　九重の直譯。文選に「君門多九重」とあるより、宮城又は禁内をいふ語とする。○今は野山しちかければ　衛門は外郭を守れば、「野山近し」といひ、近衛に對へて、外衛のあしさをいひ竝べた。○霞にたなびかれ　心の晴れやらぬをいつた。○時雨に袖をかし　涙に濡れを喩へた。○しるせれば　かき記したれば。○いつゝのむつに云々　五六三十年に及んだとて、わが公務の勤勞を陳べた。○やよれば　「や」は彌「よ」は愈で、數多き意である。佛足石の歌に、「やよつ光を放ち」とあるもこの意。○長柄のはしの　「長らへて」の序。○難波のうらに　「たつ浪」の序。○波のしわにや云々　皺だらけに老いくちなむの意。波の重なり寄るを、面の皺に譬へた。「おほほれ」は溺れの原語。○しら山の　○おとはの瀧の「の」文字、いづれもの如くの意で序詞。○藥もが　不老不死の藥を欲しの意。「もが」は願望の辭。○わかえ　若くなること。○君が代に云々　かく古き事を興じ給ふ君の御代に逢はうとも知らず、逢坂山の石清水の木隱れてあるやうに、人知れず沈んだ身と歎いたことを後悔するとの意。

評 長歌には、まづ御時にあうたのを悅び、次には身のわびしきをかこち、次には君をいはひ、終に我が命の長くあれかしと願ひ、短歌には、いよ〳〵君の御時にあうた悅をいひかへした。貫之の目錄歌よりはやゝ一ふしもあり、優つてはゐるが、冗長に堪へられない。また、貫之はさすがに萬葉集を心得てゐたものと見えて、五七調が流れて、ところ〴〵七五となつたと思はれるのを、これ及び次の二首は、却つて七五調が五七に流れたやうな觀がある。時代の風潮とはいひながら、かうも劃然たる體形をそなへぬ以上は、邯鄲に步を失つた燕人の

類で、どちらつかずの變なものになつてゐる。

君が代にの短歌は長歌の反歌である。反歌は長歌の意を反復し、又はいひ洩したのを歌ふのを、その本色とする。

「聞えあげ」は家集に聞えあげて、「いにしへに」は一本にいにしへも、「かくはあれども」は家集にかくはほこれどとある。「とのへもる身のみかきもり」は家集にない。「身ながらに」は一本に身ながらも、「しるせれば」は家集に數ふれば、「やよければ」は一本せめくれば、「ながらへて」は家集にながらへば、「浪の」は家集に老の、「瀧の」は家集に山のとある。

冬のながうた

ちはやぶる、神無月とや、けさよりは、雲りもあへず、
うちしぐれ、紅葉とともに、ふる里の、よしの丶山の、
山あらしも、寒く日ごとに、なりゆけば、玉の緒とけて、
こきちらし、あられみだれて、霜こほり、いやかたまれる、
庭の面に、むら〳〵見ゆる、冬くさの、うへに降りしく、
しら雪の、つもり〳〵て、あらたまの、年をあまたも、
すぐしつるかな。

みつね

釋 ○ちはやぶる　枕詞。○神無月とや　神無月といふことにやの意。○紅葉とともにふる里の　時雨が紅葉と共に零るといふに、古里をかけた。吉野の古里であることは、冬、「ふるさとは吉野の山し云々」の條に既出。○あらたまの　枕詞。

評 平凡の二字これを悉してゐる。しかも、「玉の緒とけてこきちらし」は自他がうち合はない。又、こきちらしたる如くと解かねば、その意が通じないが、それも無理で、元來詞が足らないのである。

「けさよりは」は家集にはつ時雨、「うちしぐれ」は六帖に初時雨、「山あらし」は家集に山おろし、「年をあまたも」は家集に年をおほくもとある。

七條の后うせ給ひけるのちによみける　伊勢

おきつ波、荒れのみまさる、宮のうちは、年へてすみし、
いせのあまも、船ながしたる、こゝちして、よらむかたなく、
かなしきに、なみだの色の、くれなゐは、われらがなかの、
時雨にて、秋のもみぢと、ひと〳〵は、おのがちり〳〵、
わかれなば、たのむ蔭なく、なりはてゝ、とまるものとは、
花すゝき、君なき庭に、むれたちて、空をまねかば、
はつ雁の、鳴きわたりつゝ、よそにこそ見め。